550

550-69-(10)

1200501507985

32. 5. 10

古今和歌集鑑

文學博士 尾上八郎校訂

東京 富山房發兌

昭和二年 帝國圖書館

古今倭詞集巻第五

秋哥下

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

550-69

はしがき

古今和歌集二十卷は、萬葉集が出來て凡そ百餘年後、卽ち醍醐天皇の延喜五年に、紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑、坂上是則と勅を奉じて撰んだもので、表立つた勅撰和歌集といふものの濫觴である。

本集の歌は、萬葉集と比較すると、大いに趣を異にするものがある。第一に、長歌は萬葉の骨髓であつた。然るにこの集には、僅かにその兩三首しか見出さない。しかもその聲調氣魄は、共に言ふに足らないもので、殆んど長歌が滅びたと言はれ得ること。第二に、萬葉集の歌は、主として五七調で、七字切れである形が、この集では、七五調となり、五字切れの形をとつたこと。第三に、萬葉集の時代は、自然に寄せて思ひのままを、自由自在に述べ

る風が行はれたのに反して、この時代では、題詠といふ全く一種の檻に囚はれたことである。これらの爲に、萬葉集にあるやうな雄大素朴な力に乏しく、意の至誠が失はれて、一言半句も彫琢推敲を事として、優麗典雅を主とする風となつた。これが卽ち世にいふ古今風であつて、永く後世の歌風を支配したのである。

が併しこの集の歌は、後世の徒らに技巧を弄ぶものとは、同日に論ずべきものではない。その長歌は、萬葉にこそ劣れ、短歌に至つては、文質孰れの方へも偏しないで、華實兼備の作品が多いといふ點に於ては、勅撰和歌二十一代集中の完璧であり、至寶であるといはれるのである。

この古今和歌集は、今日まで幾多の研究者が出たと同時に、又幾種の註釋書が出たが要するに本居宣長翁の、これに俗解を附けて、平易に最も手近に歌の眞なる味を味はせようとした古今和歌集遠鏡が、ことに親しみやすく、最も肯綮を得たものであらう。

本居翁のこの書は、尾張の横井千秋の需に應じて、書かれたものである。從來の註釋書は、遙かな山の梢の、ここからはしかと分らぬのを、山に近い里人がよく知つて、その木の名、枝の樣などを詳しく敎へるやうなものである。敎へられた者は、それで滿足しさうであるが、實は只聞くのみであるから、心底から會得しない。

然るに、世に遠眼鏡といふものがあつて、遠い處も目前に見せる。遙かな峯々の梢も、これによると、たゞ庭の植木と同樣に見え、傳聞したとは違つて、早速の了解が得られる。俗語によつて古語を寫し出すのは、これと同樣である。難解の歌も解せられれば、古い趣味も悟得せられる。これによつて、

自分は俗語によつてこの集の歌を譯し出したのである。乃ち「雲のゐる遠き梢も遠鏡うつせばここに峯のもみぢ葉」である。

口語譯といふ事は、今日では普通であるが、當時の翁のこの企は、確かに劃期的であつた。實にこの企は、確に成功した。始めてこの集を學ぶものは、先づ殆んどこれによつた。幾多の歌人歌學者は、この書に負ふところは實に多大である。

翁の俗譯は、極めて忠實である。それは例言に一々指示してあるが、助辭、助動詞から副詞、感動詞まで精密に注意してある。挿入語がなくては解し得られないものには、それを添加して特に劃線を施してあり、轉倒して解すべきものには、又黑線を附してあるなど周密な用意がある。更に又前出の餘材、打聞等の說をも正してある。

翁のこの解に對しては、幾多の議論がある。香川景樹の古今集正義などは、世に用ゐられてゐるものの中で、主なものである。讀者は對比して、研究せらるべきであらう。

この書は、寛政八年に上板せられ。明治六年に再板せられたものである。活版によつては數種ある。本書は明治の板を用ゐ、更に卷末に上句索引と、下句附上句索引とを具へて、讀者の便に供した。

昭和二年正月中旬

尾上八郎しるす

古今和歌集遠鏡目次

古今和歌集遠鏡序
古今和歌集遠鏡端書

古今和歌集序

古今和歌集卷一　春歌上……（一三）
古今和歌集卷二　春歌下……（三九）
古今和歌集卷三　夏歌……（五七）
古今和歌集卷四　秋歌上……（六五）
古今和歌集卷五　秋歌下……（八四）

古今和歌集卷六　冬歌……（一〇一）
古今和歌集卷七　賀歌……（一〇八）
古今和歌集卷八　離別歌……（一一四）
古今和歌集卷九　羇旅歌……（一二七）
古今和歌集卷十　物ノ名……（一三三）
古今和歌集卷十一　戀歌一……（一四五）
古今和歌集卷十二　戀歌二……（一六三）
古今和歌集卷十三　戀歌三……（一七八）
古今和歌集卷十四　戀歌四……（一九三）
古今和歌集卷十五　戀歌五……（二一一）
古今和歌集卷十六　哀傷歌……（二三二）
古今和歌集卷十七　雜歌上……（二四三）
古今和歌集卷十八　雜歌下……（二六一）
古今和歌集卷十九　雜體　長歌……（二八〇）　旋頭歌……（二八五）　俳諧歌……（二八六）
古今和歌集卷二十　大歌所ノ御歌……（三〇一）　卷第十物名部……（三〇七）
卷第十一……（三〇八）　卷十三卷十四……（三〇八）

古今和歌集遠鏡

本居宣長著

この遠鏡は、おのれはやくよりこひ聞えしまゝに、師のものしてあたへたまへるなり。この集はしも、よゝの註釋あまたあれども、ちうさくはかぎりありて、いかにくはしくときさとしたるも、なほ物へだてたるこゝちのするを、まことに、その名のたとひのごとく、ちとせをへだてゝ、遠きあなたの世の、こゝろふかき言の葉を、いまの世のうつゝの人のかたるを、むかひて聞たらむやうに、こゝろのおくのくまもあらはに、はたらく詞のいきほひをさへに、近くうつして、ちかくたしかに聞とらるゝ、この鏡のうつし詞は、おぼろけの人のなしうべきわざにはあらず。そのかみの世のこゝろことばを、おのがものと、手のうちにぎりえたる、わが師のしわざならではと、いとも〳〵たふとくめでたく、おもひあふがるゝにつきては、かゝるいみじきよのたからをしも、おのれひとりこゝろせばく、わたくしものに、ひめおきてやみなむことの、ねじけがましく、あたらしく、おぼゆるまゝに、さくらの花のえならぬ色を、ひろく人にも見せまほしく、松がえの千代とほく、世にもつたへまほしくて、こたみ名におふその植松の有信にあつらへつけて、櫻の板にゑらしむるになむ、かくいふは木綿苑の千秋、

雲のゐるとほきこずゑもとほかゞみうつせばこゝにみねのもみぢ葉

此書は、古今集の歌どもを、ことゞくいまの世の俗語に譯せるなり。そも〳〵この集は、よゝに物よくしれりし人々の、ちうさくどものあまた有て、のこれるふしもあらざんなるに、今さらさるわざは、いかなればといふに、かの注釋といふすぢは、たとへばいとはるかなる高き山の梢どもの、ありとばかりは、ほのかに見ゆれど、その木とだに、あやめもわかぬを、その山ちかき里人の、明暮のつま木のたよりにも、よく見しれるに、さしてかれはとゝひたらむに、何の木くれの木、もとだちはしかく、梢のあるやうは、かくなむとやうに、語り聞かせたらむがごとし。さるはいかによくしりて、いかにつぶさに物したらむにも、人づての耳は、かぎりしあれば、ちかくて見るめのまさしきには、猶にるべくもあらざめるを。世に遠めがねとかいふなる物のあるして、うつし見るには、いかにとほきも、あさましきまで、たゞこゝもとにうつりきて、枝さしの長きみじかき、下葉の色のこきうすきまで、のこるくまなく、見え分れて、軒近き庭のうゑ木に、こよなき、けぢ

めもあらざるばかりに見ゆるにあらずや。今此遠き代の言の葉の、くれなゐ深き心ばへを、やすくちかく手染の色にうつして見するも、もはらこのめがねのたとひにかなへらむ物をや。かくて此事はしも、尾張の横井千秋ぬしの、はやくよりこひもとめられたるすぢにて、はじめよりうけひきては有ける物から、なにくれといとまなく、事しげきにうちまぎれて、えしもはたさず、あまたの年へぬるを、いかに〳〵と、しば〳〵おどろかさるゝに、あながちに思ひおこして、こたみかく物しつるを、さきに神代のまさことも、此同じぬしのねぎことにこそありしか。さのみ聞けむとやうに、しりうごつともがらも有べかゝめれど、例のいと深くまめなるこゝろざしは、みゝなし山の神とはなしに、さて過すべくもあらずてなむ。

○うひまなびなどのためには、ちうさくは、いかにくはしくときたるも、物のあぢはひを、甘しからしと、人のかたるを聞たらむやうにて、詞のいきほひ、てにをはのはたらきなど、こまかなる趣にいたりては、猶たしかにはえあらねば、其事を今おのが心に思ふがごとは、さとりえがたき物なるを、さとび言に譯したるは、たゞにみづからさ思ふにひとしくて、物の味を、みづからなめて、しれるがごとく、いにしへの雅言みな〳〵おのがはらの内の物としなれゝば、一うたのこまかなる心ばへの、こよなくたしかにえらるゝことおほきぞかし。

○俗言は　かの國この里と、ことなることおほきが中には、みやびごとにちかきもあれども、かたよれるゐなかのことばは、あまねくよもにはわたしがたければ、かゝることにとり用ひがたし。大かたは京わたりの詞して、うつすべきわざ也。たゞし京のにも、えりすつべきは有て、なべてはとりがたし。

○俗言にも、しな〳〵のある中に、あまりいやしき、又たはれすぎたる、又時々のいまめきことばなどは、はぶくべし。又うるはしくもてつけていふと、うちとけたるとのたがひあるを、歌はことに思ふ情のあるやうのまゝに、ながめ出たる物なれば、そのうちとけたる詞して、譯すべき也。うちとけたるは、心のまゝにいひ出たる物にて、みやびごとのいきほひに、いますこしよくあたればぞかし。又男のより、をうなの詞は、ことにうちとけたることの多くて、心に思ふすぢの、ふとあらはなるものなれば、歌のいきほひに、よくかなへることおほかれば、をうなめきたるをも、つかふべきなり。又いはゆるかたことをも用ふべし。たとへばおのがことを、うるはしくはわたくしといふを、はぶきてつねにワタシともワシともいひ、ワシハといふべきを、ワシーヤ、それはをソレ、

ヤ、すればをスレーヤといふたぐひ、又そのやうなこのやうなを、ソンナコンナといひ、ならばたらばを、ばをはぶきてナラタラ、さうしてをソシテ、よからうをヨカロ、とやうにいふたぐひ、ことにうちとけたることなるを、これはたいきほひにしたがひては、中々にうるはしくいふよりは、ちかくあたりて聞ゆるふしおほければなり。

○すべて人の語は、同じくいふことも、いひざまいきほひにしたがひて、深くも淺くも、をかしくもうれたくも聞ゆるわざにて、歌はことに、心のあるやうを、たゞにうち出たる趣なる物なるに、その詞の、口のいひざまいきほひはしも、たゞに耳にきゝとらでは、わきがたければ、詞のやうをよくあぢはひて、よみ人の心をおしはかりえて、そのいきほひを譯すべきなり。たとへば、「春されば野べにまづさく云々、といへるせどうかの、譯のはてに、へゝ〳〵へゝ〳〵と、笑ふ聲をそへたるなど、さらにおのがいまのたはふれにはあらず。此ノ下ノ句の、たはふれていへる詞なることを、さとさむとてぞかし。かゝることをだにそへざれば、たはふれの答へなるよしの、あらはれがたければ也。かゝるたぐひ、いろ〳〵おほし。なすらへてさとるべし。

○みやびごとは、二つにも三つにも分れたることを、さとび言には、合せて一ツにいふあり。又雅言は一つなるが、さとびごとにては、二つ三つにわかれたるもあるゆゑに、ひとつ俗言を、これにもかれにもあつることあり。又一つ言の譯語のこゝとかしこと、異なることもある也。

○まさしくあつべき俗言のなき詞には、一つに二ツ三ツをつらねてうつすことあり。又は上下の語の譯の中に、其意をこむることもあり。あるは二句三句を合せて、そのすべての意をもて譯すもあり。そはたとへば「ことならばさかずやはあらぬ櫻花などの、ことならばといふ詞など、一つはなちては、いかにもうつすべき俗言なければ、二句を合せて、トテモ此ヤウニ早ウ散ルクラキナラバ一ー向ニ初メカラサカヌガヨイニナゼサカズニハキヌゾ、と譯せるがごとし。

○歌によりて、もとの語のつゞきざま、てにをはなどにもかゝはらで、すべての意をえて譯すべきあり。もとの詞つゞき、てにをはなどを、かたくまもりては、かへりて一うたの意にうとくなることもあれば也。たとへば「こぞとやいはむことしとやいはむなど、詞をまもらば、去年ト云ハウカ今年トイハウカ、と譯すべけれども、さては俗言の例にうとし。去年ト云たモノデアラウカ今年ト云たモノデアラウカ、とうつすぞよくあたれる。又「春くることをたれかしらましなど、春ノキタ事ヲ云々と譯さゞれば、あたりがたし。來ると來たとは、たがひあれども、此歌などの來るは、來

ぬると有るべきことなるを、さはいひがたき故に、くるとはいへるなれば、そのこゝろをえて、キタと譯すべき也。かゝるたぐひいとおほし。なすらへてさとるべし。

○詞をかへてうつすべきあり。「花と見てなどの見ては、俗言には、見てとはいはざれば、花ヂヤト思ウテと譯すべし。「わぶとこたへよなどの類のこたふるは、俗言には、こたふとはいはず、たゞイフといへば、難儀ヲシテ居ルトイへと譯すべし。又てにをはをかへて譯すべきも有り。「春は來にけりなどのはもじは、春ガキタワイと、ガにかふ。此類多し。又てにをはを添ふべきもあり。「花咲きにけりなどは、花ガ咲イタワイと、ガをそふ。此類は殊におほし。すべて俗言には、ガといふことの多き也。雅言のぞをも多くはガと云へり。「花なき里などは、花ノナイ里と、ノをそふ。又はぶきて譯すべきも有り。「人しなければ、「ぬれてをゆかむなどの、しもじをもじなど譯言をあてゝは、なかく〳〵にわろし。

○詞のところをおきかへてうつすべきことおほし。「あかずとやなく山郭公などは、郭公を上へうつして、郭公ハ殘リオホウ思フテアノヤウニ鳴クカと譯し、「よるさへ見よとてらす月影は、ヨルマデ見ヨトテ月ノ影ガテラスとうつし、「ちくさに物を思ふころかなのたぐひは、ころをうへにうつして、コノゴロハイロ〳〵ト物思ヒノシゲイ事カナと譯し、「うらさびしくも見えわたるかなは、わたるを上へうつして、見ワタシタトコロガキツウマア物サビシウ見エル事カナと譯すたぐひにて、これ雅語と俗言と、いふやうのたがひ也。又てにをはもところをかへて譯すべきあり。「ものうかるねに鶯ぞなくなど、ものうかる音にぞと、ぞもじは、上にあるべき意なれども、さはいひがたき故に、鶯の下におけるなれば、其こゝろをえて譯すべき也。此例多し。皆なすらふべし。

○てにをはの事、ぞもじは譯すべき詞なし。たとへば、「花ぞ昔の香ににほひけるのごとき、殊に力ヲを入レたるぞなるを、俗言には、花ガといひて、其所にちからを入れて、いきほひにて雅語のぞの意に聞カすることなるを、しか口にいふいきほひは、物には書きとるべくもあらざれは、今はサといふ辭を添へて、ぞにあてゝ、花ガサ昔ノ云々と譯す。ぞもじの例、みな然り。こそはつかひざま大かた二つある中に、「花こそちらめ根さへかれめやなどやうに、むかへていふことあるは、さとびごともの同じく、こそといへり。今一つ「山風にこそみだるべらなれ、「雪とのみこそ花はちるらめ、などのたぐひのこそは、うつすべき詞なし。これはぞにいとちかければ、ぞの例によれり。山風にぞ云云、雪とのみぞ云々、といひたらむに、いくばくのたがひもあらざれば也。さるをしひていさゝか

のけぢめをもわかむとすれば、なか〳〵にうとくなること也。「たが袖ふれしやどの梅ぞも」「戀もするかな」などのたぐひのももじは、マアと譯す。マアは、やがて此もの轉れるにぞあらむ。疑ひのやもじは、俗言には皆、カといふ。語のつゞきたるなからにあるは、そのはてへうつしていふ。「春やとき花やおそきとは、春ガ早イノカ花ガオソイノカと譯すがごとし。

○んは俗言にはすべて皆ウといふ。來んゆかんを、コウイカウといふ類也。けんなんなどのんも同じ。「花やちりけんは、花ガチツタデアラウカ、「花やちりなんは、花ガチルデアラウカと譯す。さて此チツタデといふと、チルデといふとのかはりをもて、けんとなんとのけぢめをもさとるべし。さて又語のつゞきたるなからにあるんは、多くはうつしがたし。たとへば「見ん人は見よ「ちりなん後ぞ、「ちるらん小野のなどのたぐひ、人へつゞき、後へつゞき、小野へつゞきて、んは皆なからに有リ。此類は、俗言にはたゞに、見ル人ハ、チツテ後ニ、チル小野ノとやうにいひて、見ヤウ人ハ、チルデアラウ後ニ、チルデアラウ小野ノ、などはいはざれば也。然るに此類をも、しひてんなんらんの意を、こまかに譯さむとならば、散なん後ぞは、オツ、ケチルデアラウガソノ散タ後ニサと譯し、ちるらん小野のは、サダメテ此ゴロハ萩ノ花ガチルデアラウガ其野ノ、とやうに譯すべし。然れども、俗言にさはいはざれば、中々にうとし。同じことながら、「春霞たちかくすらん山の櫻をなどは、山ノ櫻ハ霞ガカクシテアルデアラウニ、と譯してよろしく、又かの見ん人は見よなども、見ヤウト思フ人ハとうつせば、俗言にもかなへり。歌のさまによりては、かうやうにもうつすべし。

○らんの譯はくさ〴〵あり。「春たつけふの風やとくらんなどは、風ガトカスデアラウカと譯す。アラウらんにあたり、カ上のやにあたれり。「いつの人まにうつろひぬらんなどは、イツノヒマニ散テシマウタコトヤラと譯す。ヤラらんにあたれり。「人にしられぬ花やさくらんなどは、人ニシラサヌ花カ咲タカシラヌと譯す。カシラヌやとらんとにあたれり。又上にや何などいふ、うたがひことばなくて、らんと結びたるには、ドウイフコトデといふ詞をそへてうつすも多し。又「相坂のゆふつけ鳥もわがごとく人や戀しき音のみ鳴らんなどは、人ガ戀シイヤラ、聲ヲアゲテヒタスラナクとうつす。これはとぢめのらんの疑ひを、上へうつして、やと合せて、ヤラといふ也。ヤラは、すなはちやらんといふこと也。又「玉かづら今はだゆとや吹風の音にも人のきこえざるらんなどのたぐひも、同じく上へうつして、やと合せて、ヤラと譯して、下ノ句をば一向ニオトヅレモセヌと、落しつけてとぢむ。これらはらんとうたがへることは、上にありて、下にはあらざればなり。

○らしは、サウナと譯す。サウナは、さまなるといふことなるを、音便にサウといひ、るをはぶける也。然れば言の本の意も、らしとおなじおもむきにあたる辭也。たとへば物思ふらしを、物ヲ思ウサウナと譯すが如き、らしもサウナも共に、人の物思ふさまなるを見て、おしはかりたる言なれば也。さてついでにいはむは、世にらんとらしを、たゞ疑ひの重きと輕きとのたがひとのみ心得てみづからの歌にも、其こゝろもてよむなるはひがこと也。たとへば時雨ふるらんは、時雨ガフルデアラウ也。時雨ふるらしは、時雨ガフルサウナの意也。此俗言のアラウとサウナとの意を思ひて、そのたがひあることをわきまふべし。

○かなは、さとびごとにもカナといへど、語のつゞきざまは、雅言のまゝにては、うときが多ければ、つづける詞をば、上下におきかへもし、あるは言をくはへなどもして譯すべし。すべて此辭は、歎息の詞にて、心をふくめたることおほければ、譯には、そのふくめたる意の詞をも、くはふべきわざなり。

○つゝの譯は、くさ〳〵あり。又雪はふりつゝなど、いひすてゝとぢめて、上へかへらざるは、テと譯して、下にふくめたる意の詞をくはふ。いひすてたるつゝは、必ず下にふくめたる意あれば也。そのふくめたる意は、一首の趣にてしらる。

○けりけるけれは、ワイと譯す。「春はきにけりを、春ガキタワイといへるがごとし。またこその結びにも、ワイをそへてうつすことあり。語のきれざるなからにあるけるけれは、ことに譯さず。

○なりなるなれは、ヂーヤと譯す。ヂーヤは、デアルのつゞまりて、ルのはぶかりたる也。故に東の國々にては、ダといへり。なりももとにありのつゞまりたるなれば、俗言のヂーヤダと、もと一つ言也。又一つ「春くれば雁かへるなり、「人まつ蟲の聲すなり、などの類のなりは、あなたなる事をこなたより見聞ていふ詞なれば、これは、アレ雁ガカヘルワ、アレ松蟲ノ聲ガスルワなど譯すべし。此なりはヂーヤと譯すなりとは別にて、語のつゞけざまもかはれり。ヂーヤとうつす方は、つゞく詞よりうけ、此なりは、切るゝ詞よりうくるさだまり也。

○ぬぬる、つつる、たりたる、きしなど、既に然るうへをいふ辭は、俗言には、皆おしなべてタといふ。なりぬなりぬるをば、ナーッタ、來つ來つるをば、キタ、見たり見たるをば、見タ、有き有しをば、アーッタといふが如し。タは、タルのルをはぶける也。

○あはれを、アヽハレと譯せる所多し。たとへば、「あれにけりあはれいくよのやどなれやを、何年

ニナル家ヂヤゾヤ、ア、ハレキツウ荒タワイと譯せる類也。かくうつす故は、あはれはもと歎息聲にて、すなはち今ノ世の人の歎息でア、ヨイ月ヂヤ、ア、ツライコトヂヤ、又ハレ見事ナ花ヂヤ、ハレヨイ子ヂヤなどいふ、このア、とハレとをつらねていふ辭なれば也。「あはれてふことをあまたにやらじとや云々は、花を見る人の、ア、ハレ見事ナといふ其詞を、あまたの櫻へやらじと也。「あはれてふことこそうたて世の中を云々は、ア、ハレオイトシヤト人ノ云テクレル詞こそ云々也。大かたこれらにて心得べし。さてそれより轉りては、何事にまれ、ア、ハレと歎息かるゝ事の名ともなりて、あはれなりとも、あはれをしるしらぬなども、さまゞ〳〵ひろくつかふ。そのたぐひのあはれは、ア、ハレと思はるゝ事をさしていへるなれば、俗言には、たゞにア、ハレとはいはず、そは又その思へるすぢにしたがひて、別に譯語ある也。

○すべて何事にまれ、あなたなる事には、アレ、或はアノヤウニ、又ソノヤウニなどいひ、こなたなる事には、コレ、或は此ヤウニなどいふ詞を添て譯せることおほきは、其事のおもむきを、さだかにせんとてなり。

○物によせて、其詞をふしにしたる、又物の緣の詞のよしなど、すべて詞のうへによれる趣は、雅言と俗言とは、こと〳〵なれば、たゞには譯しがたし。さる類は、俗言のうへにても、ことわり聞ゆべきさまに、言をくはへて譯せり。

○枕詞序などは、歌の意にあづかれることなきは、すてゝ譯さず。これを譯しては、事の入まじりて、中々にまぎらはしければなり。そも歌の趣にかゝれるすぢあるをば、その趣にしたがひて譯す。

○此文の書るやう、譯言のかぎりは、片假名をもちふ。假名づかひをも正さず、便りよきにまかせたり。譯のかたはらに、をり〳〵平假字して、ちいさく書ることあるは、其の歌の中の詞なるを、こは此詞にあたれりといふことを、猶たしかにしめせる也。數のもじは、其句としめしたる也。又かたへに長くも短くも筋を引たるは、歌にはなき詞なるを、そへていへる所のしるしなり。そもそもさしも多く詞をそへたるゆゑは、すべて歌は、五もじ、七もじ、みそひともじと、かぎりのあれば、今も昔も思ふにまかせず、いふべき詞の、心にのこれるもおほければ、そをさぐりえて、おぎなふべく、又さらにそへて、たすけもすべく、又うひまなびのともがらなどのために、そのおもむきを、たしかにせむとて也。(一)(二)(三)、あるは(上)などしるせるは、枕詞序など、譯をはぶけるところ

をしめせる也。但しひさかたあしびきなど、人のよく枕詞と知りたるは、此しろしをはぶけり。一二三は、句のついで、上は上の句也。

○うつし語のしりにつきて、ひらがなして書ることあるは、譯の及びがたくて、たらはざるを、たすけていへること、又さらでも、いはまほしき事ども、いさゝかづゝいへるなり。

○大かたいにしへの歌を、今の世の俗語にうつすすぢにつきては、猶いはまほしきことども、いと多かれど、さのみはうるさければ、なすらへてもしりねと、みなもらして、今はたゞこれかれいさかいへるのみ也。又今さだめたる、すべての譯どもの中には、なほよく考へなば、いますこしよくあたれることども、いでくべかめれど、いとまいりて、此事にのみは、えさしもかゝづらはで、たゞ一わたり、思ひよれるまに〳〵物しつる也。歌よく見しれらん人、なほまされるを思ひえたらむふしもあらば、くはへもはぶきも、あらためもしてよかし。

本居宣長

古今和歌集序

やまとうたは人の心をたねとしてよろづのことのはとぞなれりける

○歌ト云物ハ人ノ心ガタネニナツテ。イロイロノ詞ニナツタモノヂヤワイ

世の中にある人ことわざしげきものなれば心におもふことを見るものきく物につけていひいだせるなり

○世ノ中ニカウシテ居ル人ト云フモノハ。イロ〳〵ト事ノ多イモノヂヤニヨツテ。ソノナニヤカヤノ事ニツケテ。心ニ思フコトヲ、ソノ時見ル物ヤ聞クモノニツケテ云ヒダシタノヂヤ。

花になくうぐひす水にすむかはづのこゑをきけばいきとしいけるものいづれか歌をよまざりける

○花ノ枝ヘキテ鳴ク鶯ヤ水ニスンデヰル蛙ヤナドノ聲ヲキキケバ。ソレ〳〵ニ面白イトコロハミナ歌ヂヤ。スレヤ生キテアルホドノ物ハ何カ歌ヲヨマヌゾ。鳥類畜類マデ皆メン〳〵ニソレ〳〵ノ歌ヲヨムヂヤワイノ。

ちからをもいれずしてあめつちをうごかしめに見えぬおに神をあはれと思はせをとこ女のなかをもやはらげたけきものゝふのこゝろをもなぐさむるは歌なり

○チカラモ入レズ天地ヲウゴカシタリ。目ニ見エヌ鬼ヤ神ヲ感ジサシタリ。男ト女トノアヒダヲ。ムツマシウナルヤウニシタリ。アラクマシイ武士ノ心ヤハラゲタリナドス

ルモノハ歌ヂヤ。

この歌あめつちのひらけはじまりける時よりいできにけり

○サテ此歌ト云モノハ。天地ノハジマツタ時カラデケタワイ。

あまのうきはしのしたにて、め神を神となり給へることをいへる歌なり。

○ソレハカノ伊弉諾伊弉册ノ尊ガ天浮橋ノ下デ御夫婦ノ神ニオナリナサレタ事ヲオヨミナサレタ歌ノ事ヂヤ。

しかあれども世につたはることはひさかたのあめにしてはしたてるひめにはじまり

○サウヂヤケレドモ。シツカリト歌ト云テ世ノ中ニツタハツテキタノハ〔ひさかたの〕天デハ下照姫ト云フ神カラハジマリ。

したてるひめとはあめわかみこのめなりせうとの神のかたちをか谷にうつりてかゞやくをよめるゑびすうたなるべしこれらはもじのかずもさだまらず歌のやうにもあらぬことゞもなり。

○下照姫ト云神ハ天若彦ト云タ神ノ御内シヤウデアツタ。ソノ歌ト云ハ下照姫ノ兄ゴガ、殊ノ外ウツクシイ神デ。ソノ身ノ光リガ。ソコラノ山ヤ谷ヘウツリテ照リカヾヤイタコトヲチヨンダエビス歌ト云ガアルガ。其事デアラウ。コレラハ文字ノ數ナドモ定マツタコトモナウテ。歌ノヤウデモナイコトゞモヂヤ。

あらかねのつちにしてはすさのをのみことよりぞおこりける

○〔あらがねの〕此ノ國土デハ素盞嗚尊カラサハジマツタワイ。

ちはやぶる神代には歌のもじもさだまらずすなほにしてことのこゝろわきがたかりけらし

○〔ちはやぶる〕神代ノ時分ニハ歌ノ文字ノ數モマダ定マツタコトモナシ。コトノホカ古風ナコトデ。ドウ云コトヲヨンダモノヤラソノ歌ノ心ガ今見テハワカリニクイコトデアツタサウナ。

人の代となりてすさのをのみことよりぞみそもじあまりひともじはよみける

○サテ人ノ代ニナツテカラ。カノ素盞嗚尊カラ始マツタ歌ノトホリニ。卅一文字ニヨムコトニハナツタワイ。

すさのをのみことはあまてるおほん神のこのかみなり女とすみ給はむとていづもの國に宮づくりし給ふ時にそのところにやいろの雲のたつを見てよみ給へるなり

○スサノヲノ尊ハ天照大神ノ御兄ゴ樣ヂヤ。シテソノ御歌ト云ハ。女ト一所ニ御住ナサルウトテ。出雲國ヘ御殿ヲオタテナサル。時ニソノアタリハ八色ノ雲ガ立ツタヲ御覽ナサレテ。オヨミナサレタ歌ノコトヂヤ。

八雲たついづも八重垣つまごめに八重垣つくるその八重がきを

○アレイクヘモ雲ガアツタ。アノ出ル雲ノ八重垣ワイノ。吾妻ヲ入レル宮ノタメニ。アレ雲ガ八重垣ヲ作ツタ。アノ八重垣ワイノ。

いづもは。いでくもなり。でくつゞまりて。づとなる。こゝは國の名にはあらず。

かくてぞ花をめで鳥をうらやみ霞をあはれひ露をかなしふこゝろことばおほくさまゞくになりける

○サウシテサ。花ヲ賞翫シタリ。鳥ヲウラヤンダリ。霞ヲ感ジタリ。露ヲ愛シタリスルヤウナ心詞ガオホウサマザマニナツタモノヂヤワイ。

とほきところもいでたつあしもとよりはじまりて年月をわたりたかき山もふもとのちりひぢよりなりてあま雲たなびくまでおひのぼれるごとくにこの歌もかくのごとくなるべし

○キツウ遠イ所デモ。タツタ一足フミダス。足モトカラ始マツテ。イク月モ何年モカヽルホドノ所マデニユキ。又キツウ高イ山デモフモトノチリホコリホドノ土カラ段々ツモツテ。雲ノタナビクホド高ウナルヤウナ物デ。此歌モソノトホリナ物デアラウ。

難波津のうたはみかどのおほんはじめなり

○サテ難波津ノ歌ハ天子ノ御事ヲヨンダ歌ノハジメヂヤ。

大さゞきのみかどのなにはづにてみこと聞えける時東宮をたがひにゆづりてくらゐにつき給はで三年になりにければ王仁といふ人のいぶかり思ひてよみてたてまつりける歌なりこの花は梅の花をいふなるべし。

○難波津ノ歌ト云ハ。仁德天皇ノ難波津ニ御座ナサレテ。皇子ト申シタ時ニ東宮宇治ノ若郎子ト御タガヒニユヅリアフテ。御位ニ御ツキナサレイデ三年ニナツタニヨツテ。王仁ト云タ人ガマチカネテシンキニ思フテ仁德天皇ヘヨンデ上タ歌ヂヤ。其歌ニコノ花トヨンダハ。梅ノ花ヲ云タデアラフ。

わがをしへ子。須賀直見がいひけるは。東宮をは東宮とを。寫しあやまれるなり。ととをと似たり。

あさか山のことのはゝうねへのたはふれよりよみて

○アサカノ山ノ歌ハ奥州安女ノタハムレカラヨンダ歌デ

かづらきのおほきみをみちのおくへつかはしたりける時に國のつかさことおろそかなりとてまうけなどしたりけれどすさましがりければうねへなりける女のかはらけとりてよめるなりこれにぞおほきみの心とけにける。

○コレハ葛城王ト云テ。御用デ奥州ヘツカハサレタ時ニ國ノ守ナドガ御馳走申シタレドモ。アシラヒガ麤末トナリテ葛城王ガ。キツウフケウニ思ハレタ時ニ。其國ノ安女デアツタ女ガ。盃ヲ持テ出デヨンダ歌ヂヤ。トコロガ此歌デ葛城王ノキゲンガナホツタワイ。

此ふた歌は歌の父母のやうにてぞ手ならふ人のはじめにもしける

○此ナニハヅトアサカ山ト二首ノ歌ハ歌ノテテ親ハ、親ノヤウデサ。子供ノ手習ノ始メニモマヅ是ヲナラウコトヂヤワイ。

そも〳〵歌のさまむつなりからのうたにもかくぞあるべき

○サテマヅ歌ニ六ツノワケガアルノヂヤ。唐ノ詩ニモ大カタ此六ツノワケガサアルデアラウ。

そのむくさのひとつにはそへうたおほさゝきのみかどをそへ奉れる歌

○ソノ六イロト云一ツハソヘ歌。カノ仁德天皇ヲオヨソヘ申シタ歌。

なにはづに咲やこの花冬ごもりいまは春べとさくやこのはな

○難波津ニサクコノ花ガ〔三〕サアモウ春サキヂヤト云テサクコノ花ガ。

といへるなるべし

○ト云ヤウナガサウデアラウ。

ふたつにはかぞへうた

咲花に思ひつく身のあぢきなさ身にいたつきのいるもしらずて

○咲テアル花ニ。ウツガリト思ヒ入テ居ル者ノサテモイラザルコトワイノ。身ニ心勞ナコトノ。デケテクルモシラズニサ。

といへるなるべし

これはたゞことにいひて物にたとへなどもせぬものなり此の歌いかにいへるにかあらむそのこゝろえがたしいつつにたゞこと歌といへるなりこれにはかなふべき

○此カゾヘ歌ト云ハ。ソノ事ヲタヾコトニ云テ。物ニタトヘナドモセヌモノヂヤ。ソレニ此ノ咲花ニト云歌ヲカゾヘ歌ニ出シタ、

ドウ云心ヂヤヤラ。ガテンガイカヌ。五番メノタヾコトウタト云所ヘ出シタ歌ガサ。此ノカゾヘ歌ニ叶フデアラウ。

みつにはなすらへうた

君にけさあしたの霜のおきてゐなば戀しきごとに消えやわたらむ

○オマヘガ。別レテ〔二〕起テイナシヤツタナラ。ソシハ今カラ。戀シウ思フタビゴトニ。消ルヤウニ思フテタテルデガナアラウ。君には。一本君がとあるよろし。

といへるなるべし

これは物にもなすらへてそれがやうになむあるとやうにいふなりこの歌よくかなへりとも見えず

○此ナスラヘ歌ト云ハ。物ニナゾラヘテ。ソノ物ノヤウナド云ヤウニヨンダヲ云ヂヤガ。此君ニケサト云歌ハ。ヨウ叶ウタトモ見エヌ。

たらちめのおやのかふこのまゆごもりいぶせくもあるか妹にあはずて

○養蠶ノマユニコモツテアルヤウニ〔一〕親ノヒザモトニ居テ外ヘ出ヌ樣ナレバ。ドウモエアハイデ。サテモ〳〵モシンキナ事カナ

かやうなるやこれにはかなふべからむ

○此ヤウナ歌ガ。此ナスラヘ歌ト云ニハ叶ウデアラウカ。

よつにはたとへうた

わが戀はよむともつきじありそ海の濱のまさごはよみつくすとも

○タトヒ海ノ濱ノ砂ノ數ハヨミツクスト云テモ。オノレガ戀ノジゲイ數ハヨミツクサレマイ。

これはよろづの草木鳥けだものにつけて心を見するなり此の歌はかくれたるところなむなきされどはじめのそへ歌とおなじやうなればすこしさまをかへたるなるべし

○此タトヘ歌ト云ハ。イロ〳〵ノ草木ヤ鳥ケダモノナドニヨセテ思フ心ヲ見セタモノヂヤ。ソレニ此ヲガ戀ハト云歌ハ。カクレタ所ガナイ。タトヘ歌ハ物ニタトヘテ云テ。アラハニハ云ハヌヂヤニヨツテ。カクレタ所ガナウテハスマヌ。ヂヤケレドモ始メノソヘ歌ト同ジヤウナコトナレバ。スコシモヤウノカハツタ歌ヲ出シタモノデアラウ。

すまのあまの鹽やく煙風をいたみ思はぬかたにたなびきにけり

○スマノ浦ノ海士ガ鹽ヲヤク煙ガ風ノハゲシサニ。思ヒモヲラヌ方ヘナビイテイタワイ。

この歌などやかなふべからむ

○此ノ歌ナドガ。タトヘ歌ニハ叶ウデモアラウカ。

いつゝにはたゞことうた

いつはりのなきよなりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし

○僞リト云フガナイ世ノ中デアラウナラ。ドレホド人ノ云フテクレル間ガウレシカラウゾ。

といへるなるべし

これはとのとゝのほりたゞしきをいふなりこの歌のこゝろさらにかなはずとめうたとやいふべからむ

○此ノタヾコト歌ト云ハ。コトノトゝノウテ。タヾシイノヲ云ヂヤ。コノイツハリノト云フ歌ノ心ハネカラ叶ハヌ。此ノ歌ハトメ歌ト云フ物デアラウカ。

山櫻あくまで色をみつるかな花ちるべくも風ふかぬ世に

○山櫻ヲ腹一ハイ十分ニ見タサデモアリガタイコトカナ。花ノチルクラヰノアライ風モフカヌ。ケツカウナ御代デサ此ノ歌ナドガ。タヾコト歌ト云ニハ叶ウデアラウカ。

むつにいはひうた

此とのはうべもとみけりさきくさのみつばよつばに殿づくりせり

○此ノ御屋形ハゲニモ御繁昌ナコトヂヤワイ。御殿〳〵ノツマ〴〵ガ段々ト〔三〕三ツモ四ツモツヾイテサテ〳〵ケツカウナ御普請ヂヤ。

といへるなるべし

これは世をほめて神につぐるなり此の哥いはひうたとは見えずなむある

○此ノイハヒ哥ト云ハ。御代ヲホメテ。其ノ事ヲ神ヘ申スノヂヤ。ソレニ此ノ殿ハト云哥ハドウモ。イハヒ哥トハサ見エヌテイヂヤ。

春日野にわかなつみつゝ萬代をいはふ心は神ぞしるらん

これやすこしかなふべからむおほよそむくさにわかれそのはじめをおもへばかゝるべくなむあらぬ

○ホンタイノトコロヲ思フテ見レバカウアラウコトデハサナイ。

いにしへのよゝのみかど春の花のあした秋の月の夜ごとにさふらふ人々をめしてことにつけつつ歌をたてまつらしめ給ふ

○昔ハ御代々ノ天子樣ガ。春ノ花ノ時分ヤ。秋ノ月夜ナド云トキニハ。イツデモ。ツメテ居サツシヤル衆ヲ御前ヘメシテ。ナンゾレカゾレノ事ニツケテハ。歌ヲ上ルヤウニ仰付ラレタ。

あるは花をこふとてたよりなきところにまどひあるは月を思ふとてしるべなきやみにたどれる心を見給ひてさかしおろか也としろしめしけむ

○サウシテ。或ハ花ヲ見タウ思テ。ヨリツキモナイ所ナドマデ。尋ネマハツテアルイタリ。或ハ月ニ執心シテ見ニ行テハ。マダ出ヌサキヤ入テシマウタアトナド闇イノニ。案内モシラヌ所ヲアチラヘコチラヘトシテアルイタリ。スルヤウナ風流ナ心々ヲ。ソノヨウダ歌デ考テ御覽ナサレテソノ歌ニヨツテ。アレハカシコイモノヂヤ。アレハオロカナ者ヂヤト云コトヲ。御存知ナサレタモヤウヂヤ昔ハサ

花をこふといふより。やみにたどれるといふまですべて。風流たる人々のさまをいへるなり。しかるに諸說。これを愚なる方にとれるは。ひがことなり。さかしおろかなるをしろしめすはさてよめる歌のさまをもてこそ考へ給へるなれ。もしこれらおろかなるかたのしわざとせば。今ひとつかしこき方をもいはでは。ととゝのはずたゞ愚なる方のみをいひて。やむべきにはあらざるをや。

しかあるのみにあらずさゞれ石にたとへつくは山にかけて君をねがひ

○サテ又サウバカリデナシニ。サヾレ石ニタ

むことはえあるまじきことになむ

○コレラナドノ哥ガ。イハヒ哥ト云ニハ。スコシ叶ウデモアラウカ。マアタイテイ。歌ノシナイ。六イロニ分レウコトハドウモサウハワケラレヌコトデゴザル。

今のよのなかいろにつき人の心花になりけるよりあだなる歌はかなきことのみいでくれば

○サテ今ノ世ノ中ハ人ノ心ガ花〳〵シイコトニツイテ。ウハキニナツタカラシテ。アダナキツトセヌ歌バツカリデケルニヨツテ。いろこのみの家にうもれ木の人しれぬこととなりてまめなるところには花すゝきほにいだすべきこともあらずなりにたり

○大切ナ歌ガ。色事シノ家ノ〔うもれ木の〕ナイショウゴトニナツテ。カタイトコロヘハ〔花すゝき〕アラハシテダサレヌヤウニナツテソマウタ

トヘタリ。筑波山ニツケタリシテ君ヲ御祈リ申シ。

よろこび身にすぎたのしみ心にあまり

○又ハ身ニ過タヨロコビノアルトキヤ。心ニアマルホドオモシロイコトノアルトキヤナド。

ふじのけふりによそへて人をこひ松蟲の音に友をしのび

○アルヒハ又富士ノケムリニヨソヘテ。人ヲ戀シウ思フコトヲ云タリ。松虫ノ聲ヲキイテ友ダチヲナツカシウ思タリ。

高砂住の江の松もあひおひのやうにおぼえ

○キツウ年ガヨツテハ。高砂ヤ住ノ江ノアノ久シイ相追ノヤウニ思ハレタリ。スルトキニモヨミ。

あひおひは。今の俗語にもいふとにて。相追なり。そはもとたがひに追み追れみする意より出たる言にて。いくばくの前後もなく。大かた同じほどなるとにいへり。

をとこ山のむかしを思ひいでをみなへしの一ときをくねるにも歌をいひてなぞなぐさめける

○又年ヨツテハ。男ハヲトコザカリデアツタ昔シノ事ヲ思ヒダシ。女ハワカザカリノ早ウスギタコトヲ愚痴ニクヨ〳〵ト思ウヤウナ時モミナ歌ヲヨンデサ心ヲハラシタ事ヂヤワイ。

又春のあしたに花のちるをみ秋の夕暮にこの葉の落るをきゝ

○又春ノコロ朝花ノチルノヲ見タリ。秋ノユフガタ木ノ葉ノオチル音ヲキイタリ。

あるはとしごとにかがみの影に見ゆる雪と浪とをなげき

○或ハ鏡ノ影ニ見エルワガ白髪ヤ面ノシワノ毎年多ウナルノヲ見テ歎イタリ。

草の露水のあわを見てわが身をおどろき

○草ノツユヤ水ノ沫ノキエルヲ見テ。我身モアノトホリヂヤト云コトヲ知テ驚イタリ。

あるはきのふはさかえおごりて時をうしなひよにわびしたしかりしもうとくなり

○アルヒハ昨日マデハ繁昌シテ。何ノ思ヒゴトモナカツタ者ガ。ニハカニ不仕合セニナツテナンギヲシタリ。又モトシタシカツタ中ガ。ソエンニナツタリシタトキ。

あるは松山の浪をかけ野中の水をくみ秋萩の下葉をながめあかつきのしぎのはねがきをかぞへ

○或ハ末ノ松山ノ波ヤ野中ノ清水ヲタトヘニシタリ。萩ノ下葉ヲナガメタリ曉ノ鳴ノ羽根ガキスル數ヲカゾヘタリ。

あるはくれ竹のうきふしを人にいひよしの川をひきて世の中をうらみきつるに

○或ハ〔竹の〕身ノウイ事ヲ人ニハナシ。吉野川ヲタトヘニ引キ世ノ中ヲ恨ンダリ。

きつるといへる詞、次の文とあひかなはず。いかゞ。

今はふじの山もけふりたゝずなりながらの橋も造なりときく人は歌にのみぞ心をなぐさめける

○又今デハモウ富士山モ烟ノタヽヌヤウニナリ。長柄ノ橋モ又アタラシウ出來タト聞ク人ナドハ。別シテ歌ヨムバツカリデサ心ヲハラシタ事ヂヤワイ。

つくるを。盡るなりと見たる說は。ひがとなり。もし盡なれば。つきぬなりとこそいへ。つくるなりとはいはず。これ雅言の必す定れる格也。

いにしへよりかくつたはるうちにもならの御時よりぞひろまりけるかのおほんよや歌のこゝろをしろしめしたりけむ

○ズツト昔カラ右ノ通リ。傳ハツテキタウチ

ニモ奈良ノ御時カラサ別シテヒロマツタワイ。其ノ御時代ニハ定メテ歌ノワケチ。ヨウ御存知デアツタモノデガナアラウ。

かのおほん時におほきみつのくらゐかきのもとの人まろなん歌のひじりなりける

○其御世ニ正三位柿ノ本ノ人麿ハ歌ノ聖人デサアツタワイ。

これは君も人も身をあはせたりといふなるべし

○コレハマコトニ君臣合躰ト云モノデアラウ。

秋の夕べ立田川にながるゝもみぢをばみかどの御目に錦と見給ひ春のあした吉野山のさくらは人まろがこゝろには雲かとのみなんおぼえける

○秋ノ夕グレニ立田川ニ流レル紅葉チバソノ奈良ノ帝ノ御目ニハ錦ノヤウニ御覽ナサレ。春ノ朝吉野山ノ櫻チバ。人麿ノ心ニハ雲カトバカリ思ハレタワイ。

又山のべのあか人といふ人有けり歌にあやしくたへなりけり

○又山ノベノ赤人ト云人ガアツタワイ。コレモ歌ニ妙ナ名人デアツタワイ。

人まろはあか人がかみにたゝむことかたくあかひとは人まろがしもにたゝむことかたくなむありける

○人マロハ赤人ノ上ニタツコトハナリニクカラウシ。赤人ハ人マロノ下ヘオキニクイクラキナコトデサアツタワイ。

ならのみかどの御うた

立田川もみぢみだれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ

人まろ

梅の花それとも見えずひさかたのあまぎる雪のなべてふれゝば

ほの〳〵とあかしの浦の朝ぎりに島がくれゆく船をしぞ思ふ

赤人

春の野にすみれつみにとこし我ぞ野をなつかしみ一よねにける

○春ノ野ヘスミレチツマウト思ウテ。オレハ來タガ。アマリノドカデ面白サニ。此ノ野デサ一夜寢タワイ。

わかの浦にしほみちくればかたをなみあしべをさしてたづ鳴わたる

○若ノ浦ヘシホガミチテクレバ。干潟ガ無サニ。蘆原ノ方ヲ指テ鶴ガ鳴テワタルアレ。

此人々をおきて又すぐれたる人もくれ竹のよゝにきこえかたいとのより〳〵にたえずぞ有ける

○此ノ二人ノ外ニモ又スグレ人ハ「くれ竹の」御代々「かた糸の」時々タエズサアツタワイ。

これよりさきの歌をあつめてなむ萬えうしうとなづけられたりける

○サテ此ノ奈良ノ御時代マデノ歌トモヲ集メテ萬葉トサ題號ヲツケラレタワイ。

こゝにいにしへのことをも歌のこゝろをしれる人わづかにひとりふたりなりきしかあれどこれかれえたるところえぬところたがひになんある

かの御時よりこのかた年はもゝとせあまり世はとつぎになむなりにける

○其ノ御時代カラコチヘ年ハ百年アマリ。御代ハ十代ニサナルワイ。

こゝにいにしへの事をも歌のこゝろをもしれる

人よむ人おほからずわづかにひとりふたりなりきしかはあれどこれかれえたるところえぬところたがひになむある

○其ノ間ニ昔ノコトモ歌ノワケモ。ヨウ知ツタ人ヨンダ人ハ。タクサンニハナイ。ワヅカ一人カ二人ト云ホドノコトデアツタ。ヂヤガソレモタガヒニ得タトコロト得ヌトコロガサアツテ。カノ人麿ヤ赤人ホドニ十分難ノナイ名人トハイハレヌ。

今此事をいふにつかさくらゐたかき人をばたやすきやうなればいれず

○サテ今其ノ人々ノ事ヲ云ウヂヤガ。其ノ内ニ官位ノ高イ人ノ事ハ云ノハ慮外ナヤウナ物ヂヤニヨツテ。ソレヤノケオイテ。

そのほかにちかきよにその名きこえたる人は

○ソノ官位ノ高イ衆デハナシニ。其ノ外ニ近イ代ニ歌ノ名ノ聞エタ衆ハ。

すなはち僧正遍昭は歌のさまはえたれどもまことすくなしたとへばゑにかけるをうなを見ていたづらに心をうごかすがごとし

○マヅ僧正遍昭ハ歌ノテイハ。得テアツタケレドモ。マコトガスクナイ。物ニタトヘテイハウナラ。繪ニカイテアルオヤマヲ見テ。センノナイコトニ心ヲウゴカスヤウナモノヂヤ。

浅みどり絲よりかけて白露を玉にもぬけるはるのやなぎか

はちす葉のにごりにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく

嵯峨野にて馬よりおちてよめる

名にめでゝおれるばかりぞ女郎花われおちにきと人にかたるな

ありはらのなりひらはそのこゝろあまりてことばたらずしぼめる花の色なくてにほひのこれるがごとし

○在原ノ業平ノ歌ハコヽロガアツテ。詞タラズ。テウドシボンダ花ノ色ハナウナツテ。ニホヒノ殘ツテアルヤウナ。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわがみひとつはもとの身にして

大かたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさる哉

清ふんやのやすひではことばたくみにてそのさまみにおはずいはばあき人のよききぬきたらんがごとし

○文屋康秀ハ詞ハタクミデ。歌ノ體ガソノ詞ト相應ゼヌ。イハバアキンドノエイキル物ヲ著タヤウナモノヂヤ。

吹からに野べの草木のしをるればうべ山風をあらしといふらむ

深草のみかどの御國忌に

草ふかき霞の谷にかげかくしてる日のくれしけふにやあらぬ

宇治山の僧きせんはことばかすかにしてはじめをはりたしかならずいはゞ秋の月を見るにあかつきの雲にあへるがごとし

○宇治山ノ僧喜撰ハ。詞ガオクフカウテ。ソシテ。始メトハテトノツリアヒガシツカリトセヌ。イハゞ秋ノ月ヲ見ルノニ曉ノ雲ノデヽキタヤウナモノヂヤ。

わが庵はみやこのたつみしかぞすむ世をうぢ山

と人はいふなり
よめるうたおほく聞えねばかれこれをかよはし
てよくしらず
○此ノ人ハヨンダ歌ガ多ウハ傳ハラヌニヨツテ。アレヤコレヤヲ見合スコトガナラネバ。トクトハシレヌ。
をのゝこまちはいにしへのそとほりひめの流なりあはれなるやうにてつよからずいはゞよき女のなやめるところあるに似たりつよからぬはをうなの歌なればなるべし
○小野小町ハ昔シノ衣通姫ノ流ナ歌ヂヤ。アハレナヤウデ。ツヨウナイ。イハヾエイ女ノヤム所ノアルニ似タ物ヂヤ。ツヨウナイノハ女ノ歌ユエデアラウ。
思ひつゝぬればや人の見えつらん夢としりせば
さめざらましを

色見えでうつらふ物はよの中の人の心の花にぞ
ありける
わびぬれば見をうき草の根を絶てさそふ水あら
ばいなむとぞ思ふ
そとほり姫の歌
わがせこがくべきよひなりさゝがにのくものふ
るまひかねてしるしも
大とものくろぬしは〔コトバオチタリ〕そのさまいやしい
はゞたき木おへる山人の花のかげにやすめるが
ごとし
○大友黒主ハオモシロイ所ガアツテ。歌ノ體ガイヤシイ。イハヾ薪ヲ負テキルヤマガオヤヂガ。花ノ木ノ下デ休ンデ居ルヤウナテイヂヤ。
千秋云譯に。オモシロイトコロガアツテ。とあるは。眞字序に顔有二逸興一とあるによりて。補はれたるなるべし。此序には。これにあたる詞の有しが。落たるなり

思ひいでゝ戀しき時ははつかりの鳴てわたると
人のしらずや
鏡山いざ立よりて見てゆかんとしへぬる身はお
いやしぬると
このほかの人々その名きこゆる野べにおふるか
づらのはひひろごりはやしにしげきこの葉のご
とくにおほかれど歌とのみおもひてそのさまし
らぬなるべし
○此ノ外ニモ名ノアル人々ハ野ニハヒロガツテ。葛ヤ林ニシゲウハエテアル木ノ葉ヤナドノゴトクニ。タントアルケレドモ。ミナ自分ニ歌ヂヤト思ウテ居ルバカリデ。實ニ歌ト云モノゝ。クハシイヤウスヲバ知ラヌモノヂヤト見エル。
かゝるにいますべらぎのあめのしたしろしめす
ことよつのときこゝのかへりになむなりぬる
○サテ右ノ通リデアツタトコロニ。御當代樣ノ天下ヲ治メサセラルゝノモ今年デ九年ニサナルカ。
あまねきおほんうつくしみの浪やしまのほかま
でながれひろきおほんめぐみのかげつくは山の
ふもとよりもしげくおはしまして
○ドコカラドコマデモモレタ所ノナイ御慈悲ガ。日本ノ外マデイキワタツテ。イヅクノウラマデモ。ミナソノ御蔭ヲカウムラヌ者ハナイ。難有イ時節デ。
よろづのまつりごとをきこしめすいとまもろも
ろの事をすてたまはぬあまりに
○イロ〳〵ノ御政事ヲトリ行ハセラルゝ御ヒマ〳〵ニ其ノ外ノ一切ノ事マデヲ。御ステ

アソバサレヌアマリニ。

いにしへの事をもわすれじふりにし事をもおこし給ふとて今も見そなはし後の世にもつたはれとて

○古ヘアツタ事ヲモ御忘レアソバサルマイ。年久シウナツタコトヲモ御取立アソバサウト云フ思召シデ。今モ御覽アソバサレ。又後々ヘモ傳ハレト思召テ。

延喜五年四月十八日に大内記きのとものり御書のところのあづかりきのつらゆきさきのかひのさうくわんおふしかふちのみつね右衞門府生みぶのたゞみねらにおほせられて

○當年延喜五年四月十八日ニヲレラ四人ノ者ヘ仰付ラレテ。

まんえうしふにいらぬふるきうたみづからのをもたてまつらしめ給ひてなむ

○萬葉集ニ入ラヌフルイ歌并ニ自分〳〵ノ歌ヲモ集メテ差上マスルヤウニト仰セ付ラレテサ。

それがなかにも梅をかざすよりはじめてほとゝぎすをきゝもみぢををり雪を見るにいたるまで

○ソノ中ニモ春梅ノ花ヲカザス歌カラウツタツテ。郭公ヲキク歌。紅葉ヲ折ル歌。雪ヲ見ル歌マデ四季ノ部。

又つるかめにつけて君をおもひ人をもいはひ

○又鶴龜ニツケテ君ノ御壽命ヲ長カレト思フテ御祝ヒ申シタリ。其ノ外ノ人ヲモ祝フタ歌。

秋萩夏くさを見てつまをこひ逢阪山にいたりて手向をいのり

○又秋ノ萩ノ花ヤ。夏ノ草ヲ見テハ妻ヲ戀シウ思フタ戀ノ歌。逢坂山マデ旅立テ行テ手向ノ神ヲ祈ル歌ナド。

あるは春夏秋冬にもらぬくさ〳〵の歌をなむえらばせ給ひける

○アルヒハ四季戀ナドノ部ニモイラヌイロイロノ雜ノ歌マデヲサ。撰ミマセイト仰付ラレテ其通リ撰テ集メタ。

すべてちうたはたまきなづけて古今和歌集といふ

○其歌數都合千首卷ノ數ハ廿卷。題號ハ古今和歌集ト名ケタ。

かくこのたびあつめえらばれて山下水のたえずはまのまさごのかずつもりぬれば

○カヤウニ此ノ度此ノ集ガ出來テ「山下水の」昔シノ撰集ノ跡モ斷絶セズ「はまの眞砂」ヨイ歌ガ數多クアツマツタコトナレバ。

いまはあすか川の瀨になるうらみも聞えずさゞれいしのいはほとなるよろこびのみぞあるべき

○モウコレカラハ歌ノ風ノヲルウ變ルキヅカヒモナウテ。次弟ニコノ道ノ末長ウ繁昌スルメデタイコトバカリガサアラウ。

それまくらことばは春の花にほひすくなくしてむなしき名のみ秋の夜のながきをかこてれば

○サテ我々ドモガ儀ハヨミ歌ハ「春のはな」ガモシロイトコロモナイノニ。實デモナイ名バカリ「秋のよの」上手ナヤウニ云ヒハヤサレルヿナレバ。

おのがをしへ子なる。三井高蔭がいはく。まくらは。われらを寫しあやまれるなるべし。われとまれと似たり。同じ貫之の大井川の序にもわれらみじかき心の云こ。後遺集序にも。仰せをうけ給はれるわれら云こ伊勢が長歌にも。涙の色のくれなゐはあれらが中の時雨にて云こ。とありといへり。横井千秋もわれらなるべしといへり。又ある人はいはく。それまくらは。それがしらの誤なるべし。おのがこをそれがしといへるこも。中むかしの文に例ありといへり。今思ふに此ふたつのうちなるべし。まろうの誤とするはわろし。まろといふは。無禮しき語に用ひたる例なれば。此の序な

どにいふべきにあらず。

かつは人のみゝにおそりかつは歌の心にはぢをもへど

○世間ノ人ノ聞クトコロモナントアラウカト。思ハレ又一ツニハ歌ノ思フ心モ恥カシケレドモ。

たなびく雲のたちゐなく鹿のおきふしはつらゆきらがこの世におなじくうまれて此事の時にあへるをなむよろこびぬる

○拙者ドモガ此ノ世ニ同ジヤウニ生レアハセテ。カヤウナ仰付ラレノアル時節ニ逢フコトヲサ。「たなびくくもの」タツテモ居テモ「なくしかの」寐テモサメテモ悦ビマス。

ひとまろなくなりにたれど歌の事とゞまれるかな

○カノ人麿ハトウ無クナツテシマウタケレドモ。歌ノ道ハノコツテアル。サテ〳〵難有イコトカナ。

たとひときうつりことさりたのしひかなしひゆきかふとも

○コレカラ後タトヒ時代ガ段々カハツテ。ドノヤウニナリユクト云テモ。

このうたのもし「あるをや」あをやぎの絲たえず松の葉のちりうせずしてまさきのかづら長くつたはり鳥の跡久しくとどまれらば

○此ノ集ガモシ世間ニ。「青柳の」「松のはの」タエウセズニ「まさきのかづら」末ヱ長ウ「鳥のあと」久シウ傳ハツテサヘアツタナラバ。

あるをやの四字は。次のあをやぎよりまぎれたる誤なるべし。もしは。若にて。久しくとゞまらばといふへかゝれる詞なり。

歌のさまをもしりことのこゝろをえたらむ人は

○末代ニ至テ歌ノヤウスヲヨク知リ。物モ心得テアラウ人ハ。

大ぞらの月を見るがごとくにいにしへをあふぎて今をこひざらめかも

○此集ヲ。サテ〳〵結構ナ集ヂヤト云テ。天ノ月ヲ見ルゴトク仰ギタツトンデ。今マ此ノ當代ヲシタハヌト云コトハアルマイヲサテ。

千秋云、いにしへとは。後世よりいふ古へにて。すなはち此延喜の御代をさせり

古今和歌集卷第一

春歌上

ふるとしに春たちける日よめる　在原ノ元方

年のうちに春は來にけり一とせをこぞとやいはんことしとやいはむ

○年内ニ春ガキタワイ。コレデハ。同ジ一年ノ内ヲ。去年ト云タモノデアラウカ。ヤツハリ。コトシト云タモノデアラウカ。

春たちける日よめる　紀ノ貫之

袖ひぢてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらむ

○袖ヲヌラシテスクウタ水ノコホツテアルノヲ。春ノキタ今日ノ風ガ。フイテトカスデアラウカ。

題しらず　よみ人しらず

春霞たてるやいづこみよし野のよしの〻山に雪はふりつ〻

○春ガキテ。霞ノ立タハドレドコヂヤゾ。見レバ吉野山ニハマダ雪ガフツテ。ナカ〳〵春ノケシキハミエヌガ。

二條后の春のはじめの御歌

雪のうちに春は來にけりうぐひすのこほれる涙いまやとくらむ

○マダ雪ノツモツテアル處ヘ春ガキタワイ。コレデハ鶯ノ氷ツタ涙モモウトケルデアラウカ。

題しらず　よみ人しらず

梅がえにきゐるうぐひす春かけてなけどもいまだ雪はふりつ〻

○梅ノ枝ヘキテ居ル鶯ハハヤ鳴ケレドモ。マダ此ヤウニ春マデカケテ雪ガフツテ春ノヤウニモナイ。

驚なけども。春かけて。いまだ雪はとつゞく意なり。

雪の木にふりかゝれるをよめる　素性法師

春たてば花とや見らむ白雪のかゝれる枝に鶯のなく

○春ニナツタレバ。花ヂヤト思フテヤラ。雪ノフリカゝツテアル木ノ枝デ鶯ガナク。

題しらず　よみ人しらず

心ざしふかくそめてしをりければきえあへぬ雪の花とみゆらむ

○トウカラ花ノ事ヲ深ウ思ヒコンテ。居ルガソレユエヂヤラシテ。春ニナツタレバ。ソノマゝ。雪サヘマダロクニ消ヌノニ。ソノ殘ツテアル。木ノ枝ノ雪ガ。ハヤ花ニミエル。

此歌古く聞ゆれば。三の句。をりけれかなるべし。をりければにやの意なり。この格萬葉に多し。然るを此集のころにいたりては。けれかといふ詞は。耳なれぬ故に。ければととなへ來つるか。はた後の人の。かはは の誤と心得て。さかしらに改めたるにもあるべし。然れども。ければにては結びのちむとかけあひわろし。されば結を一本に。見ゆるかとあるも。後にかけあひを思ひて。改めたるにやあらん。

ある人のいはくさきのおほきおほいまうちぎの歌なり。

二條后のとう宮のみやすむ所ときこえける時正月三日おまへにめしておほせごとあるあひだに日はてりながら雪のかしらにふりかゝりけるをよませ給ひける　康秀ガ

ふんやのやすひで

春の日のひかりにあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき

○此節ノ春ノ日ノ光ノヤウナ難有イ御惠ミヲ蒙リマスル私デゴザリマスレドモ。年ヨリ

マシテカヤウニ頭ガ雪ニナリマスルハサ難儀ニ存ジマスル。コマリマシタ物デゴザリマス。

雪のふりけるをよめる　きのつらゆき

霞たちこのめもはるの雪ふれば花なき里に花ぞちりける

○霞ガタツテ。木ドモノコノメモ張リ出ル春ノコロ此ヤウニ雪ガフレバ花ノナイ里ニモサ。花ガチルワイ。トント花トミエル。

春のはじめによめる　ふぢはらのことなほ

春やとき花やおそきとき〻わかんうぐひすだにもなかずも有かな

○ハヤ春ニナツタコトナレバ。モウ花ガ咲サウナ物ヂヤニ。マダサカヌハ春ノ來タガホドヨリ早イノカ。花ノサクガホドヨリオソイカ鶯ナリトモ鳴イタラ。ソレデドチラヂヤト云フコトガシレウニ。サテモマア鶯サヘナカヌコトカナ。

春のはじめのうた　みふのたゞみれ

春きぬと人はいへどもうぐひすのなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ

○春ガキタト人ハ云ケレドモ。マダ鶯ガナカヌ。ナンデモ鶯ノナカヌウチハ。イツマデモ。オレハ春デハアルマイトサ思フ。

寛平ノ御時きさいの宮の歌合の歌　源ノまさすみ

谷風にとくる氷のひまごとにうちいづる波や春のはつ花

○春ノ初メニ。谷ノ風ニ。アソココヽトケル氷ノヒマ〳〵カラウチダス涙ハ。テウド花ノヤウニ見エルガ。コレガ春ノハツ花ト云モノデアラウカ。

きのとものり

花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる

○風ノ吹テイク幸便ニ花ノ香ヲコトツケテ。ヤツテサ。ソレヲ鶯ヲサソヒダシテクル案内者ニハスルヂヤ。

大江ノ千里

鶯の谷より出るこゑなくは春くることをたれかしらまし

○谷カラ鳴テ出テクル鶯ノ聲ガナクバ。春ノキタト云コトヲタレガシラウゾ。

在原ノ棟梁

春たてど花もにほはぬ山里はものうかる音にぞ鶯なく

○春ニナツテモ。花モナイ山中ノ里デハ。ナニモハリアヒガナサニ。鳴キトモナサウナ聲ヲシテサ。鶯ガナク。

千秋云。下の句。ものうかる音にぞ。鶯のなくといふ意にて。そもじはものうかるねへかゝれるてにをはなりこの類おほし

題しらず　よみ人しらず

野べちかく家ゐしせればうぐひすのなくなる聲は朝なゝきく

○ワシハ野邊ノ近イ所ニスマヒヲシテキレバ。鶯ガヨウ鳴テ毎日アサカラ聞マス。

春日野はけふはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり

○此ノ春日野ヲバ今日ハ燒テクレルナヨ〔三〕妻モ來テアソンデ居ル。我モキテ遊デ居ルホドニ。

かすが野のとぶ火の野守出て見よいまいくかありてわかなつみてむ

○此ノカスガ野ノ飛火野ノ番人ヨ。出テヤウスチ見テクレイソチハコノ野ニ付テ居レバ。タイガイ知レルデアラウガ。マウイクカバカリアツテカラ。若菜チツミニハ來ウゾ。

み山には松の雪だにきえなくにみやこは野べのわかなつみけり

○山ニハアレ雪サヘマダキエズニアツテ。松ナドモ白ウミエルニ京ハ。ハヤメツキリト春メイテ。野ヘンヘ人ガデヽ。若菜チツムワイ。

あづさ弓おして春雨けふふりぬ明日さへふらばわかなつみてむ

○〔一〕オシナメテドコモカモ春雨ガマヅ今日フツタガ。アスマ一日フツタナラバ。オホカタ若菜ガツマルヽクラヰニナルデアラウホドニ。野ヘ出テ。若菜チツマウゾ。

仁和のみかどみこにおましく〳〵ける時に人にわかな給ひける御歌

君がため春の野に出てわかなつむわがころもでに雪はふりつゝ

○ソコモトヘ。進ゼウト存ジテ。野ヘ出テ此若菜チツンダガ殊ノ外寒イコトデ。袖ヘ雪ガフリカヽツテ。サテ〳〵ナンギヲ致シテ。ツンダ若菜デゴザル。

歌奉れとおほせられし時よみてたてまつれる　つらゆき

春日野のわかなつみにやしろたへの袖ふりはへて人のゆくらむ

○ワザ〳〵春日野ノ若菜ヲツミニヤラ。アレ白妙ノ袖ヲフツテ。ツレダツテ人ガイクロ。

打聞ふりはへの説いかゞ。延とはえあふのはえとは。假字さへ異なるものをや。

題しらず　在原ノ行平ノ朝臣

春のきる霞のころもぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ

○春ノ着ル霞ノ衣ハ横ノ絲ガウスサニ。山風ニサミダレルデアラウサウ見エル。

寛平ノ御時きさいの宮の歌合によめる　源ノむねゆきの朝臣

ときはなる松のみどりも春くれば今一しほのいろまさりけり

○イツモカハラヌ松ノ青イ色モ。春ガキタレバ。一入染タヤウニ色ガマシタワイ。

歌たてまつれとおほせられし時よみて奉れる　つらゆき

わがせこがころもはるさめふるごとに野べのみどりぞ色まさりける

○〔一〕〔衣〕ハル雨ノフルタビニ。野ヘンノ草ノ青イ色ガサダン〳〵増ワイ。

わがせこがの説打聞よろし。妻が夫の衣をはるといふ詞なり、餘材あやまれり。

青柳の絲よりかくる春しもぞみだれて花のほころびにける

○糸チコツテハホコロビモヌフコトダヤニ。青イ柳ノ糸ヲヨリカケル春ノコロハ。ケツクサ花ガ咲ミダレテ。ホコロビルワイ。

ほころぶるは。花のひらくをいふ。

西大寺のほとりの柳をよめる　僧正遍昭

あさみどり絲よりかけてしら露を玉にもぬける春のやなぎか

○アレアノ柳ヲ見レバ。ウスモユギ色ノ糸ヲヨツテカケテ。キレイナ白イ露ヲマア玉ニシテツナイデ。サテモ〳〵見事ナ春ノ柳カナ。餘材わろし。

題しらず　よみ人しらず

もゝ千鳥さへづる春はものごとにあらたまれど

も我ぞふりゆく

○鶯ヤナニカヤ。鳥ノオモシロウサヘヅル春ハ物ゴトニナニモカモ改マツテアタラシウナルケレドモ。オレガ此身バカリハサ春ノクルタビニダン〳〵トフルウナツテイク。

をちこちのたづきもしらぬ山中におぼつかなくもよぶこどりかな

○アチモコチモ。案内モシラヌ此ノ山中ニナンヂヤカ呼子鳥ガナイテ人チヨブガ。ドコヂヤヤラサテ〳〵マアシツカリトシレヌコトカナ。

雁のこゑをきゝてこしまへかりけろ人を思ひてよめる　北國　凡河内ノ躬恒

春くれば雁かへるなり白くものみちゆきぶりにことやつてまし　清

○春ニナツタレバ。アレ雁ガカヘルワ。雁ハアノヤウニソラチトンデ。北國ヘ方ヘユクの道ヂヤガコレハヨイトコロデ。ユキアフタ。コトヅケチシテヤラウカヨ。

かへる雁をよめる　伊勢

春霞たつを見すてゝゆく雁は花なき里にすみやならへる

○オツヽケ花ガ咲ヂヤニマア。此ヤウニ春ノ霞ノタツタノチ。ミステヽイヌルアノ雁ハ。花ト云モノヽ昔カラナイ里ニスミナレタコトカイソレデ花ノ面白イコトチ。シラヌデガナアラウ。

餘材花なき里の説わろし。

題しらず　よみ人しらず

をりつれば袖こそにほへうめの花ありとやこゝにうぐひすのなく

○梅ノ枝ヲ折タニヨツテ。ソレデ袖ガニホフノデコソアレコヽニ梅ノ花ハアリモセヌノニ。此ノ袖ノニホフノチ。梅ノ花ガコヽニアルト思フカシテ鶯ガ來テ鳴ク。

打聞わろし。

色よりも香こそあはれとおもほゆれたが袖ふれしやどの梅ぞも

○梅ノ花ハ色モヨイガ。色ヨリ香ガサナホヨイワイ。アヽハレヨイニホヒヂヤ。此ノヤウニヨイニホイガスルハ。タレガ袖ヲフレタ此庭ノ梅ノ花ゾイマア。

やどちかく梅の花うゑじあぢきなくまつ人の香にあやまたれけり

○ムヤクナコトヂヤニ。庭ノ近イ所ニ梅ハウエマイゾ。花ガサケバアマリヨウ匂ウデ。待人ハ來モセヌニ。ソノ人ノ袖ノニホヒニトリヂガヘラレルワイ。

千秋云、梅うゑじ花のあぢきなくと心得べし

梅ノ花たちよるばかり有しより人のとがむる香にぞしみける

○海ノ花ノ下ヘヂヨツト立ヨツタト云ホドノ事ガアツタガ。ソレカラ。人ノフシンヂウツヤウニサ。衣モノガ香ニソマツタワイ。キツイ匂ヒナモノヂヤ。

うめの花ををりてよめる　東三條左のおほいまうちぎみ

鶯の笠にぬふてふうめの花をりてかざゝん老かくるやと

○ソウタイ笠ハツムリヤカホヂカクス物ナレバ。鶯ガ笠ニヌウト云梅ノ花ヂヂツテ。吾ガ年ヨツタ形ガカクレルカドウヂヤトツムリヘサシテ見ヤウ。

題しらず　素性法師

よそにのみあはれとぞ見しうめの花あかぬいろ香はをりてなりけり

○オレハアハウナ今マデハ。梅ノ花ヲタヾヨソニバツカリサアアハレ見事ナ事カナト思フテ見テ居タガ。梅ノ花ノドウモイヘヌ色ヤ香ハ折テカウ近ウミテノ事ヂヤワイノ。又々ヨソニ見タヤウナ事デハナイ。

餘材わろし。

梅ノ花ををりて人におくりける　とものり

君ならでたれにか見せむ梅ノ花いろをも香をもしる人ぞしる

○此ノ梅ノ花ヲ貴樣デナウテハ誰ニ見セウゾイ。色デモ香デモヨウ知テ居ル人ガサ。ヨシアシハ。ヨウシリマス。ソレデ知ラヌ人ニ見セテハナンノセンモナイ事サ。

くらぶ山にてよめる　つらゆき

うめの花にほふ春べはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞ有ける

○梅ノ花ノニホウ春サキノコロハ。暗部山ヲクライ闇ノ夜ニコユル時デモ梅ガサイテアルト云事ハ見エイデモ。ソノ匂ヒデサ。ヨウシレルワイ。

月夜に梅ノ花ををりてと人のいひければをるとてよめる　みつね

月夜にはそれとも見えずうめの花香をたづねてぞしるべかりける

○ハテヨイトコロヲ一枝折テヤラウト思フガ此ヤウナ月夜ニハ月影ノサス所ガミナオンナジヤウニ。白ウ見エルニヨツテ。梅ノ花ガソレヂヤトドウモ見分ラレヌコレデハ匂ヒヲタヅネテ行テサ。知ラウヨリホカハナイ。

春のよ梅の花をよめる　伊勢

春の夜のやみはあやなし梅ノ花色こそ見えねかやはかくるゝ

○春ノ夜ノ闇ト云モノヽ。ソケノタヽヌ物ヂヤ。ナゼト云ニ梅ノ花ガ。暗ウテ。色コソ見エネ。香ガカクレルカ。香ハナンボ。クラウテモ隱レハセヌ。色ハカクレテ香ガカクレネバ隱レルデモナシ隱レヌデモナシドチラモソケノタヽヌ闇ヂヤハサテ。

マヘカタ長谷ヘマヰル タビニ トマツタはつせにまうづるごとにやどりける人の家に久しくやどらでほどへてイヘ久シウ中絶シテトマラズヰテ ソノノチ久シブリデソノイヘ、イタワイシタレバ ソノイヘノテイシュ後にいたれりければ かの家のあるじ此ヤドハコレコノ トホリニ マヘカタノマミデガ くさだか になむやどりはアヒカハラズシツカリトアルゾヤト口上デ申シテダシあるといひ出して侍りければマシテゴザレバソコニサイテアルそこにたてりける梅の花ををりてよめる　つらゆき

人はいさ心もしらずふるさとは花ぞむかしの香ににほひける

○人ハドウヂヤヤラ。心モカハラヌカ、カハツタカシラヌガ。ナヅミノ所ハ梅ノ花ガサワシガ來タレバコレ此ヤウニマヘカタノトホリノ匂ヒニカハラズ。ニホウワイノ。

水のほとりに梅ノ花のさけりける　伊勢

をよめる

春ごとに流るゝ川を花と見てをられぬ水に袖やぬれなむ

○流レテイク川ヘ花ノ影ノウツヽタノヲ。アノ水ノ中ニモ花ガアルトミテハ。イツノ春デモダマサレテ。折ラレモセヌニ。チラウトシテハソノ水デ袖ガヌレルガ。今年モ又ヌレルデカナアラウ。

詞書に水とあるは京極院の庭の池なれば。哥にながるる川とよめるは。その池につゞきたるやり水をいふなるべし。上句二三一と句を次第して心得べし。

年をへて花のかゞみとなる水はちりかゝるをやくもるといふらむ

○年ヲ重ネテ。毎年春ハ花ノ影ガウツヽテ。其ノ花ノ鏡ニナル水ハ花ノチリカヽルヲ鏡ノクモルト云ノデアラウカ。花ノチリカヽルト云ト。年ヘテ鏡ヘ塵ガカヽルト云ト詞ガ同ジコトヲヤニヨツテ。カウヨンダノヲヤワヱ。

千秋云。としをへてといふ詞は上の句にはさして用なきを。たゞ鏡の年をへてくもることをいはんためにおけるなり。さてこの歌などは俳諧の部にいるべきさまにあらずや

家に有ける梅の花のちりけるをよめる　貫之

くるとあくとめかれぬものを梅ノ花いつのひとまにうつろひぬらむ

○日ガクレルト云テハ見。夜ガアケルト云テハ見イシテ。シバシ目モハナサズ見テ居ルノハ。此ノ梅ノ花ハイツノヒマニ。此ノヤウニチツテシマタ事ヤラ。

打聞。うつろふの説。なか〳〵にわろし。

千秋云。此初句の二つのとはとての意なり。與にはあずら

寛平ノ御時きさいの宮の歌合のうた　よみ人しらず

梅が香を袖にうつしてとゞめてば濁春はすぐともかたみならまし

梅ノニホヒヲ。袖ヘウツシテ。トメテオイタラバ。春ハ過テシマウタト云テモ。ソレガ春ノ形見デアラウニ。

素性法師

ちると見てあるべきものをうめの花うたてにほひの袖にとまれる

○ハアチツタワトバカリ見テ。ソノブンデアラフ事ヲヤニ。ヒヨンナ事ヤ。匂ガ袖ヘノコツタ。コレデドウモチツタ梅ノ花ノ事ガ忘レラレヌ。

題しらず　よみびとしらず

ちりぬとも香をだにのこせ梅の花戀しき時の思ひ出にせむ

○梅ノ花ヨ。チツタリトモ。セメテハ香ヲナリトモノコシテオケ。ソレヲ後ニ戀シイトキドキノ思ヒダシグサニセウ。

人の家にうゑたりける櫻の花さきはじめたりけるを見てよめる　つらゆき

ことしより春しりそむるさくら花ちるといふことはならはざらなむ

○春ハサク物ヲヤト云事ヲ外ノ櫻ニナラウテ今年カラ始メテ。知テ咲イタ此ノサクラ花ヨ。ドウゾチルト云事ヲバ。外ノ櫻ニナラヌハヌガヨイゾヨ。

題しらず　よみ人しらず

山高み人もすさめぬさくらばないたくなわびそ我見はやさむ

○山ガ高サニコヽヘハ誰モ來テ見テ。賞翫スル人モナイ此ノ櫻花ヨ。人ガシヤウクワンセヌトテ。アマリツラウ思フナイ。オノレ見ハヤシテヤラウホドニ。

又は里とほみ人もすさめぬ山ざくら

山ざくらわが見にくれば春がすみ峯にも尾にもたちかくしつゝ

○山ノ櫻ヲオレガカウ見ニクレバ。霞ガ一チメンニドコモカモ立テカクシテ。花ヲミセヌワイ。サテモイヂノワルイカスミカナ。

染殿ノ后のおまへに花がめに櫻の花をささせ給へるを見てよめる　前ノおほきおほいまうちぎみ

年ふればよはひはおいぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし

○年數ヲ經マシタレバ。ワタクシモイカウ年ハヨリマシタガ。サリナガラ。アナタノ御

繁昌ナサルヽ。此ノ御殿デ。カヤウニ花ヲ見マスレバ。ナンニモ物思モコザリマセヌ。

なぎさの院にてさくらを見てよめる

在原ノ業平ノ朝臣

世ノ中にたえてさくらのなかりせば春のこゝろはのどけからまし　清

○イツソ世ノ中ニトント櫻ト云モノガナイナラバ。ケツク春ノジブンノ心ハ。ノドカニアラウニ。櫻ト云モノガアルデ。此ヤウニイロ〳〵ト心ガサワツイテ。春モノドカニオモハヌ。

題しらず　よみ人しらず

石ばしるたきなくもがなさくら花手折てもこむ見ぬ人のため

○岩ノウヘヲハシル此ノ早イ川ガ。ナケレバヨイニ。ソシタラ内ニ居テ。エ見ヌ人ノタメニ。アノ川ノアチラノ櫻ノ枝ヲ折テキテ見てのみや人にかたらん櫻花手ごとにをりて家づとにせむ

○カウシテアノ見事ナ櫻花ヲ見テ。人ニハタダ咄スバカリデ。オカウ事カイ。ソレデハ見タカヒガナイホドニ。手ンデニ折テ來テ。持テインデ内ヘミヤゲニセウ。

花ざかりに京を見やりてよめる

見渡せば柳さくらをこきまぜてみやこぞ春のにしきなりける

○此ノ山ノ上カラカウ見渡セバ。柳ノ青イ色ト。櫻ノ花ノ白イ色トヲコキマゼテ。トント錦ト見エル。此ノ見ワタシタトコロノ。京ノケシキガサ春ノ錦ト云モノデヤワイ。

さくらの花のもとにてとしの老ぬることをなげきてよめる

きのとものり

色もかも同じむかしにさくらめど年ふる人ぞあらたまりける

○櫻ハアノヤウニ色モ香モ。イツノ年モ同シ事デ昔ノトホリニサクケレドモ年ヲ經テ人ハサ。コレ此ノトホリニ。若イ時トハ大キニカハツタワイ。

此歌三の句さくらめどゝいひては。いさゝかかなひがたきやうなるを。櫻をたちいれむとて。しひたりときこゆ千秋云。さくらめどは。げにさけれどもとか。さくなれどゝか。いはではかなき雖きさまなり

をれるさくらをよめる　つらゆき

たれしかもとめてをりつる春霞立かくすらむ山のさくらを

○此ノ櫻ノアツタ山ハ。三四サダメテ霞ガ立テカクシテ。知レニクカラウニ。タレガマア。タンダヘテイテ折テキタコトゾ。

歌奉れとおほせられし時によみてたてまつれる　清

櫻花咲にけらしもあしひきの山のかひより見ゆるしら雲

○櫻ノ花モサイタサウナワイマア。アノ山ノアヒダカラ白イ雲ノ見ユルノハ。

寛平ノ御時きさいの宮の歌合の歌　友の　り

みよしのゝ山べにさける櫻花雪かとのみぞあやまたれける

○吉野山ノアタリニ咲テアル櫻花ヲ見レバ。トントサ。雪ヂヤナイカトトリチガヘラレルワイ。

やよひにうるふ月の有けるとしよ

みけろ　い　せ

さくら花春くはゝれる年だにも人のこゝろにあかれやはせぬ

○櫻花ヨイツモノ年ハ早ウチルトモ。セメテ春ノ一月加ハツテ。長イ今年バカリナリ厄人ノ心ニタンノウスルホド。ユルリト咲テアツタガヨイニ。ナゼニイツモト同ジヤウニ。今年モ早ウチルゾイ。

此結句のてにをは一格なり。例多し。詞の玉の緒に出せるがごとし。打聞いひざまあしくて。いかなる意ともきゝとりがたし。

さくらの花のさかりに久しくとは
ざりける人のきたりける時によみ
ける　よみ人しらず

あだなりと名にこそたてれ櫻花年にまれなる人もまちけり

○櫻花ハアダナ物ヂヤト名ニコソタツテアレ。ナカ〳〵アダナモノデハコサラヌ。一年ノ内ニモタマ〳〵ナラデハ。尋ネテクダサレヌ人ヲサヘキドクニ今日マデチラズニ。待テ居タワイノ。スレヤ久シウ尋ネテモ下サレヌ貴樣ノアダナ御心ヨリハ櫻ガハルカマシヂヤ。

かへし　なりひらの朝臣

けふこずは明日は雪とぞふりなまし消ずは有とも花と見ましや

○貴樣ハ。櫻ハアダニハナイ。業平ヲアダナト云ハシヤルガ。ソレヤ大キナチガイジヤワシガ今日參ツタレバコソアノ櫻ヲ花ヂヤトハ見レモシ今日參ラズバ。明日ハモウ雪ニナツテ降テシマウデアラウ。タトヒソノ雪ニナツタノガ。消ズニアツタトテモ。雪ヂヤトコソ見ヤウケレドモ。モトノ花トハ見ヤウカヤ。

題しらず　よみ人しらず

ちりぬればこふれどしるしなき物をけふこそさくらをらばをりてめ

○櫻花ハチツテシマウテカラハ。ナンボ見タウ思フテモ。ソノセンハナイモノヲ。折ルナラ早ウ。今日ノ内ニコソ折ウ事ナレ。明日ハモウチルデアラウ。

をりとらばをしげにもあるかさくら花いざやどかりてちるまでは見む

○コノ櫻ガアマリ見事サニ。一枝ヲリテミヤウカト思ヘド。折テ取ルハ。イカニシテモマア惜イヤウナ物カナ。サイ〳〵ナントセウゾ。イヤ〳〵折ルノハ惜イ事ヂヤニ。ドレヤ。此木ノ下デ宿ヲカツテ居テ。チルマデハ。ソノマヽデ見ヤウ。

きのありとも

櫻色にころもはふかく染てきむ花のちりなむ後の形見に

○花ハオツヽケ散テシマウデアラウ。ソノ後ノ形見ニ。キル物ヲ櫻イロニコウ染テ着ヤウゾ。

千秋云。此さくら色といへるはたゞさくらの花のいろにといへるなるべし。さくら色とて定れるそめ色をいへるにはあらじ

櫻の花のさけりけるを見にまうで
きたりける人によみておくりける　みつね

我やどの花見がてらに來る人は散なむ後ぞ戀しかるべき

○コチノ花ヲ見ガテラニ尋ネテクル人ハ。花見ガテラノ事ナレバ花ガチツタラモウ來ハスマイヂヤニヨツテ散テシマウタ後ニサ其人ガ戀シカラウ

亭子院の歌合の時よめる

伊勢

見る人もなき山ざとのさくら花ほかの散なむ後ぞさかまし 清

○來テ見ル人モナイ山里ノ櫻花ハ。ヨソホカノ花ガミンナ散テシマウテ後ニサ咲ウコトヂヤニ。今ハドコニデモ澤山ニ花ハアルヂヤニヨツテソレデ遠イ山里ナドヘハ。誰モ見ニクル人モナイヂヤガ。ホカノ所ノ花ガモウ無イジブンニナツテカラ。咲クヂイヤトモ遠イ所デモ見ニクルデアラウワサ。

古今和歌集卷二

春歌下

題しらず　よみ人しらず

春がすみたなびく山のさくら花うつろはむとや色かはりゆく

○霞ガタナビイテ其カスミヘ色ノウツヽテ見エルアノ山ノ櫻バナガ。四チラウトテヤラ霞ノ色ガカハツテキタ。

まてといふにちらでしとまる物ならば何をさくらに思ひまさまし 清

○チリカヽツタ櫻ニ向フテシバラクチラズニ待テクレト云フノヲ聞入レテソレデシバシデモチラズニ留ルモノナラバ何ヲ櫻ヨリマサツタモノヂヤトハ思ハウゾソンデハモウ世ノ中ニ櫻ヨリマサツタモノハアルマイニ惜イノニ早ウチルバツカリガアツタラ櫻ノキヅヂヤ。

のこりなく散ぞめでたき櫻花有てよの中はてのうければ

○ワルウナツテウザ〳〵ト殘ツテアラウヨリサツハリト殘リナシニ早ウ散テシマウノガサアヽケツカウナコトヂヤ櫻花ハ。世ノ中ト云フモノハソウタイ何ンデモ長ウアレバカナラズシマイクチガワルイ物ナレバ。

此里にたびねしぬべし櫻花ちりのまがひに家路わすれて

○コヨヒハ此ノ里デトマラウ事ヂヤ此ヤウニガモシロイ櫻花ノチルマギレニ内ヘイヌル事ヲバ思ヒダサズニサ。

うつせみの世にもにたるか花ざくらさくと見しまにかつ散にけり

○櫻花ハサ咲イタヲト思フタウチニハヤカタ一方カラ散テシマウタヲイ人間一生ノ間ハ何ノマモナイモノヂヤガソレニモマアヨウ似タ事カナ。

僧正遍昭によみておくりける

これたかのみこ

櫻花ちらばちりなむちらずとて故郷人の來ても見なくに

○遍昭師ガ大方コノ花ヲ見ニ來テクレラルヽデアラウト思フテ。毎日〳〵マテドモ見エヌ。ケフマデ見エヌカラハ。モウ大方見エヌノデアラウ。スレヤヨイヲ櫻花ヨ。チルナラ勝手ニ散テシマウサ。チラズニアツタトテ在所ノ人ガ來テ見モセメニ。カヤウニヨミ候ユエ御目ニカケ候已上

雲林院にさくらの花のちりけるを見てよめる

そうく法師承均

櫻ちる花のところは春ながら雪ぞふりつゝきえがてにする

○櫻花ノチル所ヘユキテ見レバ、時節ハ春デアリナガラ。雪ガサチラ〳〵トフツテヂキニハキエニクイ。春ノ雪ハソノマヽ消ルモノヂヤニコレハ正ノ雪デナイ櫻バナヂヤニヨツテ。

千秋云。初二句ちるところはといふことなるを。さは云ひがたき故に。はなとちるとを下上にはいへるなり

櫻の花のちり侍けるを見てよみける

そせいほうし

花ちらす風のやどりはたれかしる我にをしへよゆきてうらみむ

○サテモ〳〵モアツタラ花ヲ。此ヤウニチラス風メガ逗留シテ居ルトコロハ。タレゾハ知テ居ルモノガアラソ。誰レガ知ツテ居ルゾ。オレニ教ヘテクレイ。ソコヘ行テゾンブンニ恨ミテイハウ。

うぐいんぬんにて櫻の花をよめる

そうく法師

いざさくらわれもちりなむ一さかりありなば人にうきめ見えなむ

○此ヤウニ櫻ノ早ウ散テシマウノハ。アヽヨイ料簡ヂヤドレヤ櫻ヨオレモイツショニ散テドウナリトモナツテシマハウ。人ト云フモノモ。一トサカリ。盛リナ時ガアツテ。ソレガ過ギテ。オトロヘタナラバ。老ボレテラツシモナイヤウスヲ人ニ見ラルデ、アラウホドニ。

あひしれりける人のまうで來てかへりにける後によみて花にさしてつかはしける　つらゆき

一め見し君もやくるとさくら花けふはまち見て散ばちらなむ

○此間タチヨツトキテ見テ。イナシヤツタ人ガ。又ゴザルカト今日一日ハマア待テミテソシテゴサラズハ。チルナラチツタガヨイ櫻花ヨ。大カタ今日ハゴザリサウナモノヂヤ。

山のさくらを見てよめる

春霞なにかくすらむさくら花ちるまをだにも見るべきものを

○霞ハナゼニ此ヤウニ櫻花ヲカクスヤラ。ユルリトミル事ハナラズトモ。セメテハ枝カラチルアヒダナリトモマア。見ヤウモノヲ。ソノ間タサヘ霞デ見ラレヌ。

こゝちそこなひてわづらひける時に風にあたらじとておろしこめてのみ侍りけるあひだにをれる櫻の

ちりがたになれりけるを見てよめる　藤原ノよるかの朝臣

たれこめて春のゆくへもしらぬまにまちし櫻もうつろひにけり

○ワシハアンバイガワルウテ。帳ノ帷ヲオロシテ。ヒツコモリテバカリ居テ。春モイクカヤラ日ノ過テイクモシラヌニ。咲タラ見ヤウ〳〵ト思フテ。セツカク待タ櫻モ。ハヤコノヤウニ。ウツロウテシマウタワイノ

東宮の雅院にてさくらの花のみかは水にちりてながれけるを見てよめる　すがのゝ高世

枝よりもあだにちりにし花なればおちても水のあわとこそなれ

○水ノ上ヘチツテ流レル櫻花ガ。アレトツト沫ノヤウニ見エル枝カラモ。モロウ散タ花ギヤニヨツテ。下ヘ落テモ。又同クアノヤウニモロイ水ノ沫ニサナルギヤワ。

櫻の花のちりけるをよめる　つらゆき

ことならばさかずやはあらぬ櫻花見る我さへにしづ心なし

○トテモ此ノヤウニ早ウチルクラキナラバ。一向ニシヨテカラサカヌガヨイニナゼニサカズニハキヌゾ櫻花ハ。此ノヤウニ早ウ散テハ見テ居ルコチマデガ。心ガサワ〳〵トシテオチツカヌ。

打聞。ならばの説。いと物どほし此詞はいづれも右の譯の意を以て見るべきなり。例を考へ合せて味ふべし。

櫻のごとくちる物はなしと人のいひければよめる

さくら花とくちりぬともおもほへず人のこゝろぞ風も吹あへぬ

○カレハ櫻ノ花ハ早ウチルモノヂヤトモ思ハレヌ。ソレヨリハ。人ノ心ガサアダナモノヂヤ。ナゼト云ニ。櫻ハマダ風ガフカネバメツタニチリモヤラヌガ。人ノ心ハ風ノフクマデモマタズニ早ウウツル物ヂヤワサテ。

餘材。下句の注あろし。

さくらの花のちるをよめる　きの友のり

ひさかたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

○日ノ光リノ。ノドカナ。ユルリトシタ春ノ日ヂヤニ。ドウ云事デ花ハ此ヤウニ。サワサワト心ゼワシウチル事ヤラ。

東宮のたちはきのぢんにてさくらの花のちるをよめる　藤原ノよしかぜ

春風は花のあたりをよきてふけこゝろづからやうつろふと見む

○春風ハ花ノ咲テアルアタリヲバヨケテフケモシ風ハフカイデモ。花ハジブンノ心カラヒトリデニモ。チルモノカナ。タメシテミヤウニ。

さくらのちるをよめる　凡河内ノみつね

雪とのみふるだにあるをさくら花いかにちれとか風のふくらむ

○サクラ花ハ。ヒトリデニモ。ヒタスラ。雪ノヤウニフルモノヂ。ソレサヘアルニ。マダコノ上ヘドノヤウニチレト云事デ。風ハフク事ヤラ。

ひえにのぼりてかへりまうできてよめる　つらゆき

山高み見つゝわがこしさくら花風はこゝろにま

かすべらなり

○アノ櫻ノアル所ヘ行テ見テ。折リタカツタケレドモ。山ガ高サニエノボライデ。殘念ナガラオレハヨソニ見イ〳〵來タニ。風ハアノ櫻ヲ心マカセニスルデアラウト思ハル。

餘材。山高みの説わろし。

題しらず　　大友ノくろぬし

春雨のふるはなみだかさくら花ちるををしまぬ人しなければ

○櫻ノチルヲ。惜マヌ人ハナケレバ。此ノヤウニ此ノセツ春雨ノフルノハ世間ノ人ノ櫻ヲチシンデ。泣クナミダカイ。

亭子院ノ歌合のうた　　つらゆき

櫻花ちりぬる風のなごりには水なき空に浪ぞたちける

○櫻ノチル時ニ風ガ吹タテヽ。其ノ花ガシバラク。中デサワグケシキハ。テウド涙ノタツケシキヂヤ。ソシテ海ベニナゴリト云事ガアル其ナゴリハ涙ガタツヂヤカ。花ヲチラシタ此ノ風ノアトノナゴリニハ。水ノアリトモセヌ空ニサ。涙ガタツタワイ。

ならのみかどの御歌

ふるさとゝなりにしならのみやこにも色はかはらず花は咲けり

○フルイ昔シノ都ニナツテシマツタ。此ノ奈良ノ京ニモヤツパリ色ハ昔シニカハラズ。都デアツタ時ノトホリニ。花ハサイタワイ。

春のうたとてよめる　　よしみねのむねさだ

花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風

○春ノ色ハドコモカモ。ヒラ一マイナレバ。イキワタツタ里トイキワタラヌ里トノ。ワケヘダテハ。アルマイニ。ドウ云事デ花ハ咲タ所ト。サカヌ所トガアルヽヤラ。

春のうたとてよめる　　つらゆき

三輪山をしかもかくすか春がすみ人にしられぬ花やさくらむ

○サテ〳〵三輪山ハキツウ霞ンダ事カナ。コノヤウニマアカスミノ隱スノハ此ノ山ニハ人ニシラサヌ。ナイショウノ花ガアルカシラヌ。

うりんぬんのみこのもとに花見にきた山のほとりにまかれりける時　　そせい

いざけふは春の山べにまじりなむくれなばなげの花の陰かは

○ドレヤケフハ日ノクレルマデモ。此ノ春ノ山ベヲ。カケアルイテアソバウゾ。日ガクレタトテモ。花ノ陰ガナササウナカイ。イクラモ花ノカゲガアレバ。モシ暮タナラ。サイハヒヂヤ。花ノカゲニトマラウワサ。なげは。なは。無にて。げは。何げとおほくいふ詞なり。打聞なげの説わろし。くれなばといふにかなはず。

昔の歌とてよめる

いつまでか野べに心のあくがれむ花しちらずは千世もへぬべし

○花ガチラズハ。イツマデコノ野邊ニ心ガウカレテ居ルデアラウ。モシ花ガチラズニアツタラバ。千年デモ此ノ野デタテウヤウニ思ハレル。

題しらず　よみびとしらず

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見んことは命なりけり

○花ハノ今年チツテモ。又來年カラ後モ。春ゴトニ盛ハアラウケレド。ソノ盛リニ逢テ見ル事ハ。コチノ命次第ヂヤワイ。ナンボ花ザカリガ。毎年アツテモ。命ガナケレヤ。又ト見ル事ハナラヌ。サウ思ヘバアヽ殘リガホイ花ヂヤ。

花のごと世のつねならば過してし昔は又もかへりきなまし

○花ハチツテシマウテモ。又春ニナレバ。年年相替ラズ。定マツテ咲ク物ヂヤガ。世ノ中ガ花ノトホリニ定マツテ。カハラヌ物ナラバ過シテキタ昔シモ。又フタヽビカヘツテクルデアラウニサ。世ノ中ハ過タ昔シガフタヽビカヘルト云事ハナイ。

吹風にあつらへつくるものならば此一本はよきよといはまし

○吹テクル風ニタノンデ。イヒツケラルヽ物ナラ。此ノ花一本ハ。ヨケテ吹テクレイトイハウニ。サウイフ事ハナラヌモノナレヤ。ドウモ散テモセウ事ガナイ。

まつ人もこぬものゆゑに鶯のなきつる花ををりてけるかな

○此花ヲ馳走ニ折テ生テオテ。來タナラバ見セウト思ウテ。待ツ人モ來モセヌニ。アヽ鶯ノオモシロウ鳴テキタ。アツタラ花ノ枝ヲオレハ折タワイサテモヲシイ事ヲシタコトカナ。待ツ人ガ來ヌクラキナラ。折ラネバヨカツタニ。

寛平ノ御時きさいの宮の歌合の歌

藤原ノおきかぜ

こぬものゆゑには。來もせざる意なり。

さく花は千種ながらにあだなれどたれかは春を恨みはてたる

○ヨニ春サク花ハイロ〳〵アルガ何ンノ花デモ皆アダナ物ナレド。ソレデモ誰レガ春ノ花ハアダナト云テ。トント見カギツタ者ガアルゾ。アダナモノヂヤ〳〵トハ誰モイヒツヽ咲ケバ又ヤツハリ賞翫スルヂヤ。餘材。後の説はわろし。

春霞いろのちくさに見えつるはたなびく山の花のかげかも

○霞ノ色ガイロ〳〵ニ見エルノハ。ソノ霞ノタナビイテアル山ノ中ヲ花ノイロガ霞ヘウツヽタノカイノ。　在原ノ元方

かすみたつ春の山べはとほけれど吹來る風は花の香ぞする

○霞ノ立ツテアル春ノコロノ山ハ遠ウミエルケレドモ。カクベツ遠ウモナイカシテ。吹テクル風ハ花ノニホヒガサスル。

この歌の意。諸説ともにくはしからず。

うつろへる花を見てよめる　みつれ

花見ればこゝろさへにぞうつりける色にはいでじ人もこそしれ

○ウツロウタ花ヲ見レバ。アヽヲシヤト思フ心ガ花ニシミコンデ。コチノ心マデガサ花ノ色ニウツヽタワイ。此ノヤウニ花ノ色ニウツツタ心ヲ。トウゾ顔イロニハダスマイ人ガ知ラウモシレヌホドニ人ガ知テハ。アマリアハウラシイ事ヂヤ。打聞よろし餘材わるし。

題しらず　よみ人しらず

うぐひすのなく野べごとにきて見ればうつろふ花に風ぞふきける

○鶯ノナク野ヘ來テ見レバドコノ野モ〳〵ウツロウタ花ヲ風ガ吹テチラスワイ。鶯ガ惜シガツテナクハダウリヂヤ。千秋云二の句の。ごとにといふ詞は下の句へかけて心得べし。來て見ればへはかゝらざるなり

吹風をなきてうらみようぐひすはわれやは花に手だにふれたる

○鶯ガオレガチカクヘ來テ恨メシサウニ鳴クガ。ソチハ花ノチルガ惜ウテウラミルナラアノ吹テクル風ヲ恨ンデナケサ。オレガアノ花ニチヨツトナリトモ手ドモフレタナラコソ。オレヲ恨ミヤウケレ。オレハ手モフレハセヌゾヨ。スレヤコチガ知タ事デハナイワサテ。

典侍洽子朝臣（ナイシノスケアマネイコノ）

ちるはなのなくにしとまる物ならばわれ鶯におとらましやは

○散テユク花ガ。惜ンデ泣ノデ。チラズニトマルモノナラ。コチモ鶯ニオトロウカイ。鶯ニオトラヌホド泣ウケレド。ナンボ泣テモ花ハドウモトマラヌワイノ。

仁和の中將のみやすん所の家に歌合せむと［て］しけるときによみける　藤原ノ後蔭

花のちることやわびしき春霞たつたの山のうぐひすの聲

○霞ノタツテアルアノ立田山ニ鶯ノナク聲ガスルガ。花ノチルコトガツラウ思ハレテ。アノヤウニ鳴クカイ。

うぐひすのなくをよめる　そせい

こづたへばおのが羽風にちる花をたれにおほせてこゝら鳴らむ

○鶯ガアノヤウニ花ノ枝ヲアチラヘコチラヘコヅタヘバ。自分ノ羽ノアチチノ風デ花ハチルモノヲ。ソレヲ誰レガ咎ニシテ。アノヤウニ恨メシサウニ。シキリニ鳴クコトヤラ。外ノ物ガチラカスナンゾノヤウニマア千秋云。こゝらは物の數の多きことなればシキリニといふ譯はあたらざるがごとくなれども。俗語にていふときは必ずしきりになくといふ勢なるところなり。すべてこの類多し。なずらへてしるべし

鶯の花の木にてなくをよめる　みつれ

しるしなき音をもなくかなうぐひすのことしのみちる花ならなくに

○鶯ノナンノセンモナイ鳴ゴトカナ。今年バカリチル花デハナイイツノ年トテモツヒニ鶯ノナクノデ花ガチラズニアツタト云フハナイニ。

題しらず　よみ人しらず

こまなへていざ見にゆかむふるさとは雪とのみこそ花はちるらめ

○タレカレサソヒアハセテ。馬ヲノリナラベ

テ。打ツレテ。ドレヤ見ニユカウゾ。此ノセツフル京ハサゾヤ。雪ノフルヤウニサ。ヒタ〳〵ト花ハチルデアラウワイ。

ちる花をなにかうらみむ世ノ中に我身もともにあらむ物かは

○花ノチツテユクヲ。何ンノ恨メシウ。コチガ身トテモ。イツマデモ。此ノ世ニカウシテアラウモノカイ。花ト同ジヤウニガツヽケ死ンデユクモノヂヤ。花バカリヲ早ウチルトテ。恨ミヤウヤウハナイ。

小野ノ小町

花の色はうつりにけりないたづらにわが身よにふるながめせしまに

○エエヽ。花ノ色ハアレモウ。ウツロツテシマウタワイナウ。一度モ見スニサ。ワシハツレソフテ。居ル男ニツイテ。心苦ナ丁ガアツテ。何ンノトンチヤクモナカツタ。アヒダニ長雨ガフツタリナドシテ。ツイ花ハアノヤウニマア。

世にふるとは男女のかたらひするをいふ。男女の中らいのことを世とも世の中といへる多し。此集戀の歌にもこれかれあり。いせ物語に世ごゝろつける。源氏物語に。まだ世をしらぬ。などあるたぐひもこれなり。

仁和の中將のみすやんどころの家に歌合せんとしける時によめる

そせい

をしと思ふ心はいとによられなむちる花ごとにぬきてとゞめむ

○散テユク花ヲ。ヲシイト思フ心ハ。ドウゾ糸ニヨラルヽ物ナラヨイニソシタラ。ソノチル花ヲ一ツ〳〵。ソノ糸デツナイデ。チラヌヤウニトメテオカウニ。

しがの山ごえに女のおほくあへりけるによみてつかはしける

つらゆき

あづさ弓はるの山べをこえくれば道もさりあへず花ぞちりける

○〔一〕春ノコロ山ヲ越テクレバ。ドウモ道モヨケラレヌホド。花ガチツテクルワイ。アノ女等ガサ。

寛平ノ御時きさいの宮の歌合のうた

春の野にわかなつまむとこし物を散かふ花に道はまどひぬ

○此春ノ野デ若菜ヲツマウト思フテ。來タモノヲアチラヘコチラヘチリマガウ花デ。ワカナヲツム所ヘユク道ハマギレテ。フミマヨウテ。ソデモナイ所ヘキタワイヨレヤ。

山寺にまうでたりけるによめる

ある人のいはく。此詞書なる下のにはよを寫し誤れるなるべし。

やどりして春の山べにねたる夜は夢のうちにも花ぞちりける

○春花ノチル時分ニ山ニトマツテ。寐タ夜ハソノ花ヲ惜イ〳〵ト思フニエカ。夢ノウチニモサ。花ノチル事バツカリヲミルワイ。

寛平ノ御時きさいの宮歌合の歌

吹風と谷の水としなかりせばみ山がくれの花を見まし清

○フキチラス風ト。流レテユク谷川ノ水トガナイモノナラバ。ミ山ノオクニカクレテ咲テアル花ヲバ見ヤウモノカイ。見ラレハスマイニスレヤ風ヤ川ノ水モ。花ノタメニメツタニワルイ事バカリデモナイモノヂヤ。

志賀よりかへりけるをうなどもの花山にいりて藤の花のもとに立よりてかへりけるによみておくりける

僧正遍昭

よそに見てかへらむ人にふぢの花はひまつはれよ枝はをるとも

○チヨツト立ヨツタバカリデ足モ留メズニ。ヨソニ見テイヌル人ニハヒマツウテイナス藤ノ花ヨ。タトヒ枝ハ折レルトモ。ドウゾハヒマツウチトメヨ。

家に藤の花さけりけるを人のたち
とまりて見けるをよめる　みつね

我やどに咲るふぢなみ立かへりすぎがてにのみ人のみるらむ

○コチノ庭ニ咲テアル藤ノ花ヲ。アノヤウニ人ガヒツカヘシ〳〵シテドウモ見ステヽイナレヌヤウニ。ヒタスラ見ルガ。ドウ云事ヤラ。エイ庭デモナイニ。

題しらず　よみ人しらず

いまもかもさきにほふらむたちばなの小島のさきの山吹の花

○タチバナノ小島ノ崎ノ山吹ノ花ハ。ケフコノゴロカナ。見事ニサイタデアラウ。

初句もは二つともにやすめ辭にて。今かなり。今もといふにはあらず。

はるさめにはへる色もあかなくに香さへなつかし山ぶきの花

○此五山吹ノ花ワイ。春雨ニヌレテ一入マサツタ色モ。ドウモイヘヌニ。色バカリデナシニ。香マデガ。雨ニヌレテ別シテ。シホラシウニホウ。

春雨。香の方へもかゝれり。物のにほひは。しめれば增る物なり。

山吹はあやなくさきそ花見むとうゑけむ君がこよひこなくに

○山吹ハワケノタヽヌ物ヂヤ。コシナ事ナラサカヌガヨイ。花ガサイタラ見ニ來ウト。思フテ植テオカシヤツタデアラウニ。其御方ガ。コヨヒミエモセヌニ。咲テモ何ンノセンモナイ事ヂヤ。咲ククラキナラ。其御方ガ見ニミエルヤウニシテ。クレレヤ。ソレデハ。咲タカヒガアツテ。ワケノタツト云モノヂヤニ。

戀の歌なり。

よしの川のほとりに山ぶきの咲り
けるをよめる　つらゆき

吉野川きしのやまぶき吹風に底の影さへうつろひにけり

○吉野川ノ岸ナ山吹ヲ見レバ。風ガ吹テチルガ。ソノ風デ川ノ水ガ。ウゴクニヨツテ。底ヘウツヽタ影マデガチツタワイ。

題しらず　よみ人しらず

かはづなく井手の山吹ちりにけり花の盛にあはまし物を

○〔一〕コノ井手ノ山吹ガハヤモウ散テシマウタワイ。ア、殘念ナ事ヲシタマソツト早ウ花ノサカリノ時分ニ逢フヤウニ來テ見ヤウデ。アツタモノ。

この歌はある人のいはくたちばなのきよともが歌なり。

春のうたとてよめる　そせい

思ふどち春の山べにうちむれてそこともいはぬ旅寢してしが

○ソンデアソコヘイクト云テ定マツタ旅デハヨソニトマルノハ。ウイ物ヂヤガ。サウイフ四定マツタ旅デハナシニ。心ノアフタドウシ。春ノ山ヘツレダツテイテ。一日日ノクレルマデアソンデ。四イキガヽリニトマツテミタイモノヂヤ。ソレデハオモシロイ旅寢デアラウ。

打聞。下句の意くはしからず。

春のとく過るをよめる　みつね

あづさゆみはるたちしより年月のいるがごとくもおもほゆるかな

○古歌ニ梓弓春トツヾケテヨンデアルガ。マコトニ月日ガ早ウタツテ。矢ナイルヤウニ思ハルヽ。春ニナツテカラマダナンノマモナイニ。サテモ早ウタツタ事カナ。

とし月とよめるは。まことは年の暮の歌なればなるべし。春の暮の歌にては。此詞いかゞにきこゆ。

やよひに鶯のこゑ久しう聞えざりけるをよめる　つらゆき

なきとむる花しなければうぐひすもはては物うくなりぬべらなり

○ナンボ惜ンデ鳴テモ〳〵。花ハミナ散テシマウテ。鳴タデトマル花ハナケレバ。コレデハセンノナイ事ヂヤト思フテ。鶯モシマヒニハ鳴トモナウナツタデ。アラウサウアリソナ事ニ思ハレル。ソレデ久シウナカヌギヤマデ。

餘材わろし。

やよひのつごもりかたに山をこえけるに山川より花のながれけるをよめる　ふかやぶ

此の人は。こゝに始めて出たれば。姓をあぐべき例なるに。姓なきはいかゞ。又打聞に。此名のぶを。みなほとせるはひがことなり。

花ちれる水のまに〳〵とめくれば山には春もなくなりにけり

○花ノ散テ流レル川スヂニソウテ。段々ミナカミノ方ヘ尋ネテキテミレバ山ニハモウ花ハミナチツテシマウテ。ハヤ春モナイヤウニナツタワイ。

春を惜みてよめる　もとたか

をしめどもとゞまらなくに春霞かへる道にしたちぬと思へば

○春ヲ惜ムケレドモ。モウシヨセントマリハセヌ。春ハモウタツテイヌル道ヘ旅ダチシタレバ。トマラヌハズヂヤ。

霞は。たつ縁にいへるなり。結句はたゞたちぬればといふ意にて。思ふには意なし。すべて思又いふ詞をそへていへる例つねに多し。思へばを。春の思ふと見たる説はわろし。

寛平ノ御時きさいの宮の歌合の歌　おきかぜ

聲たえずなけやうぐひす一とせに二たびとだにくべき春かは

○春ハ一年ノ内ニ。イク度モ來レバ。重疊ノ事ヂヤガ。サウハナラズトモ。セメテ二度トナリトモ來レバヨケレドモ二度トモクル春カイ。タツタ一度ナラデハ。ナイ春ヂヤニ。クレテユクハサテ〳〵ノコリ多イ事ヂヤ。鶯ハズキブン絶ズ鳴テ恨ミヨヤイ。イカニモ鳴キドコロヂヤ。

やよひのつごもりの日花つみよりかへりける女どもを見てよめる　みつね

とゞむべき物とはなしにはかなくもちる花ごとにたぐふこゝろか

○アノ花ガアマリ惜サニ一本〳〵チツテユク花ゴトニ。コチノ心ガツイテイクワ。アノ女ニ。サテモマア。アホラシイ事カナ。ツイテイタトテ。トメラレウモノデハナイニ。

打聞みなわろし。

やよひのつごもりの日雨のふりけるにふぢの花ををりて人につかはしける　なりひらの朝臣

ぬれつゝぞしひてをりつる年のうちに春はいくかもあらじと思へば

○此藤ノ花ハ。ドウゾソコモトヘ。御目ニカケウト存ジテ。今日ノコノ雨ニヌレ〳〵。

ムリニ折リマシタ。春ハマダイクカモアルデハアルマイ。モウ當年ノ内ニハ。タツタケフ一日ナラデハ春ハナイト存ズユエニサ。

諸說。下句の意を得ず。

亭子院ノ歌合に春のはての歌

みつね

けふのみと春を思はぬときだにもたつことやすき花の陰かは

○春ヲ。モウ今日バカリヂヤトハ思ハヌ時デサヘ。花ノ下ハ。立ツテイヌルノカ何ントモナイガサア。ソレデサヘ花ノ下ハ。立チサリトモナイニ。マシテケフギリノ春ヂヤモノ。

古今和歌集卷三

夏歌

題しらず　よみ人しらず

我やどの池の藤なみ咲にけり山ほとゝぎすいつかきなかむ

○コチノ庭ノ池ノ邊ナ藤ノ花ガ咲タワイ。ハイツ來テナクデアラウ。

此歌ある人のいはくかきのもとの人まろがなり。

うづきにさける櫻を見てよめる　紀ノとしさだ

あはれてふことをあまたにやらじとや春におくれてひとり咲らむ

○今月ニナツテ。櫻花ノアルハメヅラシイ事ヂヤ。コレハナンデモ見ル人ガアヽハレ見事ナト云フ其詞ヲ。方々ノ櫻ヘ分テヤルマイ。己ヒトリガサウイハレウト思レテ。ワザト春ヨリ後ニオソウヒトリ。咲タデアラウカ。

千秋云結句にさくらをかくしてよみたるなり

題しらず　よみ人しらず

さ月まつ山郭公うちはぶき今もなかなむこぞのふる聲

○郭公ハ五月ヲ待テ鳴クヂヤガ。マダ五月ニハナラネドモ。去年ノ殘リノフル聲ヲ出シテ。ドウゾ今モナケカシ。

千秋云。うちはぶきは。蔦葉に打羽振と書て。羽をふるを云。この譯なきはなきがよろしきなるべし

伊勢

五月こばなきもふりなむ郭公まだしきほどのこゑをきかばや

○時鳥ハ五月ニナツタナラバ。モウ澤山ニナ

ツテ。メヅラシウナイデモアラウ。ドウゾ
マダソノ時節ニナラヌウチノ聲ヲ聞タイモ
ノヂヤ。

よみ人しらず

さつきまつ花たちばなの香をかげば昔の人の袖
のかぞする

○五月ニサク橘ノ花ノニホヒヲカゲバ。マヘ
カタノナジミノ人ノ袖ノ香ガサスル。

いつのまにさつききぬらむあしびきの山時鳥い
まぞなくなる

○イツノマニ五月ニナツタヤラ。ヒゴロマチ
ニ待ツタ時鳥ガ。今始メテサナクワアレ。

けさきなきいまだ旅なるほとゝぎす花たちばな
にやどはからなむ

○ケサ始メテ來テ。マダエ住ツカズニ旅ガケ
テ居テ鳴ク時鳥ヨ。定メテ宿ヲトルデアラ
ウガ。コチノ庭ノ橘ニ宿ヲバカレカシ。ソ
シタラ存分ニ聞ウニ。

おとは山をこえける時に時鳥のな
くを聞てよめる　きのとものり

音羽山けさこえくればほとゝぎす梢はるかにい
まぞなくなる

○音羽山ヲケサ越テクレバ。時鳥ガアノハル
カナ梢デ。アレ今始メテサナクワ。
音羽山といへるにほとゝぎすの聲の意はなし。

ほとゝぎすのはじめて鳴けるをき
きてよめる　そせい

ほとゝぎすはつこゑきけばあぢきなくぬし定ま
らぬ戀せらるはた

○時鳥ノ始メテ鳴聲ヲキキケバ。オモシロウハ
アレドモ又サ何トナウカンジヤウガオコツ
テ無益ナ。其人ト定マツタ事モナイ。戀コ
ヂガスル。

すべてはたは又なり。此の歌なるは。三の句の頭にう
つして聞べし。おもしろけれども又の意なり。

ならのいそのかみ寺にて郭公のな
くをよめる

いそのかみふるき都の郭公こゑばかりこそむか
しなりけれ

○此ノ石ノ上ノアタリハ昔ノ奈良ノ都ヂヤガ
今ハモウ何モカモ昔シトハ變ツテシマウタ
ニ。郭公ノ聲バカリガサ。カハラズニ昔ノ
トホリヂヤワイ。

詞書たる石の上寺は。山邊の郡石上にあるを。奈良と
いへる事は。今の京にては。石上のあたり迄をもひろ
く奈良といひならへるなり。たとへば今の世に。丹波
の國なる愛宕山をも。他國にては。京の愛宕といふ類
なり。打聞の説ひがことなり。

題しらず　よみ人しらず

夏山になくほとゝぎす心あらば物思ふ我に聲な
きかせそ

○アノ山デナク時鳥ヨ心ガアルナラ。此ノヤ
ウニ物思ヒヲシテヰルワシニキカシテクレ
ナイ。

郭公なくこゑきけば別れにし故郷さへぞ戀しか
りける

○ホトヽギスノナク聲ヲキキケバ。感情ガオコ
ツテ。ハナレテキタマヘカタノ在所ノ事マ
デガサナツカシウ思ハレルワイ。

ほとゝぎすながなく里のあまたあればなほうと
まれぬ思ふものから

○ホトヽギスヨ。ソチハナク里ガアソコニモ
コヽニモアマタアツテ。コヽバカリデ鳴カ
ヌニヨツテ。賞翫ニハ思ヒハスレドモ。ソ
レデモウトヽ〳〵シウ思ハレル。

思ひいづるときはの山の時鳥からくれなゐのふ
り出てぞなく

○戀シイ人ヲ思ヒダシタ時ニハ〔の山の〕〔三〕
〔四〕聲ヲアゲテサ。ワシヤナクワイ。

四の句は。たゞふり出の序のみにて。戀二に。紅のふり出つゝなくとあるは。異なれり。さてこの歌は。もはら戀の歌なるを。こゝに入れるはいかにぞや。

聲はして涙は見えぬほとゝぎす我衣手のひづをからなむ

○時鳥ハナク聲ハシテ。涙ハ見エヌガ。涙ガナクハ。オレガ袖ガヒツタリトヌレテアルチ。借シテヤラウホドニ、コレチソチガ泣涙ニカツタガヨイ。

あしひきの山郭公をりはへてたれかまさるとねをのみぞなく

○オレハイツシユク泣テバツル居ルガ。アノ時鳥モオンナジヤウニ。間タモナシニ鳴テオレド。誰レガ。勝ゾサアナキクラベチセウトテ。ヒタスラナクワイ。

をりはへは。時延にて。時長くつゞくことをいふ詞なり。をりはへて鳴クハ。時長く。あひだもなしになくことなり。

今さらに山へかへるなほとゝぎす聲のかぎりは我やどになけ

○山カラ出テ來テ。モウ里ナレタコトヂヤニ。今サラ山ヘカヘルナヨ時鳥聲ノアリタケハシマイマデ。コチノ庭デナケ

みくにのまち

やよやまて山郭公ことづてむわれ世の中にすみわびぬとよ

○山ヘカヘル時鳥。ヤイノウ。チヨツト待テタモ。コトヅテチセウワシハモウ世ノ中ニ住ミアグンダワイノ。ソレデ追付ワシモ山ヘコモラウト思フホドニ、サウ云フテタモ。

寛平ノ御時きさいの宮の歌合のうた

紀ノ友則

さみだれに物思ひをれば時鳥夜深く鳴きていづちゆくらむ

○五月雨ガフリツヽイテ。イヨ〳〵夜モ。モヤクヤト物思ヒチシ居レバ。時鳥ガ鳴テイクガ。夜モフケタニ。ドチラヘイクヤラ。オレモ此ノヤウデハ。ドチヘナリトモイキタイ。

夜やくらき道やまどへる郭公我やどをしも過ぎがてになく

○夜ルデクライニヨツテ。ドチヘモイカヌノカ。又ハ道ニマヨウタノカホトヽギスガ。所モ多イニ。コチノ庭デバツカリ。ドウモ過テイナレヌヤウニヂツト鳴テキル。

大江ノ千里

やどりせし花橘もかれなくになど時鳥こゑたえぬらむ

○宿カツテ居タ橘モマダカレモセヌニ。時鳥ハナゼニヨソヘインデ聲モセヌヤウニナツタヤラ。

きのつらゆき

夏の夜はふすかとすれば時鳥なく一こゑにあくるしのゝめ

○チルカト思ヘバ。時鳥ノナク聲デ。ハヤモウ明方ニナツタ。サテ〳〵短イ夜カナ。(下句又ハ)ホトヽギスノナイタ一聲デ目ガサメタガハヤモウ夜ガアケル。

しのゝめを打聞の如く。朝の目とする時は後の辭なり。館材しのゝめの説わろし。

千秋云初句ののもじはがの意にて結句のあくるへつゞく詞なり

みぶのたゞみね

くるゝかと見れば明けぬる夏のよをあかずとやなく山郭公

○日ガクレルカト思ヘバ。ハヤアケタ此夏ノ夜ヲ。アマリ短サニノコリ多ウ思フテ。郭公ハアノヤウニナクカヤ。

紀ノ秋峯

夏山に戀しき人や入りにけむ聲ふりたてゝなくほとゝぎす

○コノ山ヘ時鳥ノ戀シウ思フ人ガコモツタカシラヌ。ソヂヤヤラ。聲ヲアゲテナク。

餘材わろし。打聞よろし。

題しらず　よみ人しらず

こぞの夏なきふるしてし郭公それかあらぬか聲のかはらぬ

○去年ノ夏タクサンニタエズナイテ。ヨウ聞知テ居ル時鳥ガ。今又ナクアレハ去年ナイタソノ時鳥歟。サウデハナイカ。聲ガオナジ事ヂヤガ

郭公のなくを聞てよめる　つらゆき

五月雨の空もとゞろに時鳥なにをうしとかよただ鳴くらん

○時鳥ガ五月雨ノ空モドンドゞ。ヨヒトヨヒタスラ鳴クガ。何事ヲウイト思フテアノヤウニナクヤラ

さふらひにてをのこ共のさけたうべけるにめして時鳥まつ歌よめと有ければよめる　みつね

ほとゝぎす聲も聞えず山彦はほかに鳴く音をこたへやはせぬ

○時鳥ガナクカ〳〵トマテドモ聲モ聞エヌガヨゾデ鳴ク聲アリトモコヽヘヒビイテ。聞エレバヨイニ。山彦ハナゼニコヽヘヒビカサヌゾイ

山にほとゝぎすの鳴けるをきゝてよめる　つらゆき

郭公人まつ山になくなれば我うちつけに戀まさりけり

○人ガ來モセウガト待テ居ル此ノ松山ニ。アノヤウニ時鳥ガナケバ。今マデサホドニモ思ハナンダカ。ニハカニコチモ人ヲ待ツ心ガマサツタワイ

はやくすみけるところにてほとゝぎすの鳴けるを聞てよめる　たゞみね

むかしへや今も戀しき郭公ふるさとにしも鳴きてきつらむ

○時鳥ヨ。ソチモオレト同ジヤウニ。昔カ今デモ戀シイカ。所モ多イニ此本ト在所ヘ鳴テ來タノハ昔ガ戀シイヤラ。

千秋云。今もは。なれもとあらまほしくおぼゆ

時鳥の鳴けるをきゝてよめる　みつね

ほとゝぎすわれとはなしにうの花のうきよの中になき渡るらむ

○世ノ中チウイ物ニ思フテ泣テクラスモノハオレヂヤガ。時鳥ハ其オレデハナシニ。ドウイフ事デ。世ノ中ガウイト云テ。卯ノ花ノアタリヘキテ。アノヤウニオレト同ジヤウニ。鳴テクラス事ヤラ。

はちすの露を見てよめる　僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく

○蓮ハ世ノ中ノ濁リニソマヌ。譬ヘニ御經ニトイテアルガ。サウ云フ清淨ナ心デ。ナゼニアノヤウニ葉ノ露ヲ玉ト見セテ。人ヲバダマスコトゾイ

月のおもしろかりけるよあかつきがたによめる　ふかやぶ

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこにに

月やどるらむ

○アヽヨイ月デアツタニ。夏ノ夜ノ短サデハ。マダヨヒノマヽデ。フケル間モナシニハヤ明タモノ。コノ夜ノ短サデハ。月ハ西ノ方ノ山マデイキツク間ハアルマイガ。アノ曉ノ雲ノ。ドコニトマツタヤラ。

となりよりとこなつの花をこひにおこせたりければをしみて此歌をよみてつかはしける　みつね

ちりをだにすゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわがぬる床なつの花

○手前ノトコナツハ。カヽトワシガ二人寢マス床夏デ大事ノデゴサル花ガサイテカラ。塵サヘカケマイトサ。存ズルホド大事ノデゴサル折テハエシンジマスマイ。

千秋云。此の歌上句。三一二と句を次第して見るべし

みな月のつごもりの日よめる

夏と秋とゆきかふ空の通ひぢはかたへすゞしき風やふくらむ

○今晩クレテ。ユク夏ト來ル秋ト。イキチガウ空ノ通リ道ハソノ夏ノ通ツテユク片一方ハマダ暑ウテ。秋ノトホツテクル片一方ハスゞシイ風ガフクデアラウカイ。

古今和歌集卷四

秋歌上

秋たつ日よめる　藤原ノ敏行朝臣

あききぬとめにはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

○秋ガキタトイフテ。ソレトハツキリト目ニハ見エヌケレド。ケフハ風ノ音ガ。ニハカニカハツタデサ。コレハ秋ガキタワトビツクリシタ。

秋たつ日うへのをのこどもかものの川原に川せうえうしけるともにまかりてよめる　つらゆき

河風のすゞしくもあるかうちよする浪とともにや秋は立つらむ

○川風ガサテモマア。涼イ事カナ。浪モ立ツト云フナリ秋ノ來ルノモ立ツトイヘバ。此ノ岸ヘウチヨセル浪トイツショニ。秋ガタツタカシラヌ。

題しらず　よみびとしらず

わがせこが衣のすそを吹かへしうらめづらしき秋の初風

○〔上〕コレハ〳〵メヅラシイ秋風ヂヤ。サテモ涼シイ。コヽロヨイ。

餘材に。わがせこは。女をさせりといへるは。いみじきひがことなり。これは女の歌なるべし。又歌林良材集に引れたるたるには。わぎもこがとあり。新古今集有家卿。「さらでだに恨みんと思ふわぎもこが衣のすそに秋風そふく。これらによれば。わぎもことある本も有しなるべし。

きのふこそさなへとりしかいつのまにいなばそよぎて秋風のふく

○マダ昨日コソハ田ヲウエタレ。ソレニマア。

イツノマニ此ノヤウニ稲ノ葉ガソヨ〳〵トシテ。秋風ノ吹クヤウニハナツタゾ。

秋風の吹にし日より久かたの天の河原にたゝぬ日はなし

○ワシハ私風ノフキソメタ日カラ。毎日〳〵此ノヤウニ。コノ天ノ川ノ川原ヘ出テ立テ君チマタヌ日ハ一日モナイ。

千秋云。この歌などは。たなばたつめになりてよめるなり七夕の歌此類多し

ひさかたの天のかはらのわたし守君渡りなばかぢかくしてよ

○天ノ川ノ渡シ守リヨ。君ガコチラヘ御渡リナサツタナラ。ヂキニソノ船ノ棹チシレヌヤウニ。カクシテオイテクレイ。ソシタラ川チ渡ツテ御カヘリナサル事ガナルマイニヨツテ。イツデモコチニ御逗留デアラウニ

天川もみぢを橋にわたせばやたなばたつめの秋をしもまつ

○天ノ川ノ橋ニ紅葉チ渡スユエカシテ。時節モ多イニ。棚機サマガ。秋チ御待ナサルこひ〳〵てあふよはこよひあまの川霧立わたりあけずもあらなむ

○一年ノアヒダ長ノ月日チ戀々テ。タツタ一度彦星ト棚機ト御逢ナサル夜ハコヨヒヂヤドウゾ天ノ川ヘ霧ガ一メンニ立ツテ闇ウナツテ。イツマデモ。夜ガアケ子バヨイ。

寛平ノ御時なぬかのようへにさふらふをのこども歌奉れと仰せられける時人にかはりてよめる

とものり

あまのがは淺瀬しらなみたどりつゝ渡りはてねばあけぞしにける

○此天ノ川ノ淺瀬ノ所チシラヌ故ニオボツカナウテ。水ノナカチアチヤコチヤトシテヒマドツテマタ渡ツテシマイモセヌウチニサ。ハヤ夜ガ。アケタワイ。

千秋云。四の句。ねばは。ぬにの意なり

同御時きさいの宮の歌合の歌

藤原おきかぜ

契りけむ心ぞつらきたなばたの年に一たびあふはあふかは

○一年ニタツタ一度ヅヽト。約束シテオイタ棚機ノ心ガキコユヌ一年ニタツタ一度グラキアウノガアウノカソレヤ逢ト云フモノデハナイ。

七日の日の夜よめる

凡河内ノ躬恒

年ごとにあふとはすれどたなばたのぬるよの數ぞすくなかりける

○棚機ハ毎年逢ツシヤリハスレドモ。一年ニタツタ一度ヅヽナレバ。逢ツシヤル夜ノ數ハスクナイコトヂヤワイ

たなばたにかしつる絲のうちはへて年のを長くこひやわたらむ

○タナバタ祭リニコヨヒ手向テオ借シ申シタ絲ノヤウニ長ウ引ノビテコレカラモ年久ウ此ノヤウニ戀シウ思フテ月日チタテヽルコトデアラウカ。

是は七夕によめるおのが戀の歌なり。

題しらず　そせい

こよひこむ人にはあはじたなばたの久しき程にまちもこそすれ

○今夜クル人ニハアウマイ。今夜ハ七夕ヂヤニヨツテ。棚機ノ久シイ一年ノ間タヲ待ツノニアヤカツテ。コチモ久シウ待ツヤウナ中ニナル事モアラウホドニ。

なぬかのよの曉によめる

源ノむねゆきの朝臣

今はとてわかるゝ時は天の川わたらぬさきに袖

ぞひぢぬる

○サアモウト云テ別レルトキニハ。マダ天ノ川ヲ渡リモセヌサキニ此ノヤウニ袖ガヒツタリト涙デサヌレタ。

やうかの日よめる　みふのたゞみれ

けふよりは今こむとしの昨日をぞいつしかとのみ待渡るべき

○タナバタ樣ハサゾ。今日カラシテハ。又今カラ來年ノ七月七日昨日ヲサ。イツカ〳〵トヒタスラ待テ。月日ヲタテサツシヤルデアラウト思ハレル。

題しらず　よみ人しらず

このまよりもりくる月の影見れば心づくしの秋は來にけり

○木ノ枝ノ間カラモツテクル月ノ影ヲミレバ虫ガ見ルトハチガウテ。スコシダヽホカ見エネバ。サテ〳〵シンキナ物ヂヤ。是ヲミレバ。今カラ總體モノゴトシンキナ秋ガキタワイ。

大かたの秋くるからにわが身こそかなしきものと思ひしりぬれ

○世間一同ノ秋ガキタカラシテ。人ハコノヤウニハナイサウナニオレヒトリガサ秋ハカナシイ物ヂヤト思ヒシツタ。秋ハオレ獨ノ秋デハナイ世間一同ノ秋ヂヤニ。

わがためにくる秋にしもあらなくに蟲の音きけばまづぞかなしき

○オレニ悲シウ思ハサウタメニ來ル秋デモナイニ。蟲ノ聲ヲキケバ人ヨリサキヘ。マヅ一番ガケニサ。オレハカナシイ。

物ごとに秋ぞかなしきもみぢつゝうつろひゆくをかぎりと思へば

○草木ノダン〳〵。カハツテ散テイクノハ草木ノシマイニナルノヂヤガオツヽケサウ物ノシマイニナル時節ノバシメヂヤト思ヘバ總體ノ物ナニヽツケテモ秋ハサ悲シイ。

打聞よろし。餘材わろし。

ひとりぬるとこは草葉にあらねども秋くるよひは露けかりけり

○草ノ葉コソ秋ハ露デヌレルモノナレ。ワシガヒトリネル床ハクサノ葉デハナケレドモ秋ニナレバ夜ルハ此ヤウニ涙デ露ノヤウニヌレルワイ。

これさだのみこの家の歌合のうた

いつはとは時はわかねど秋の夜ぞもの思ふことのかぎりなりける

○イツハ物思ハヌトキヂヤト云フ時節ノ差別ハナシニイツデモ物思ヒハアルケレドソノウチニモ秋ノ夜ガサ。イツチ物思ヒスル頃上ヂヤワイ。

かむなりのつぼに人々あつまりて秋の夜をしむ歌よみけるついでに　よめる　みつれ

つぼは。御坪の内にて。梅壺藤壺などいふは。その御坪の内にある木草をもてそこの舍の異名にしたる物なり。かむなりのつぼも雷の落たることありしより。異名になれるなり。壺の字は宮中ノ衞謂三之壺一とあるこれなり。器の壺とは別なり。まがふことなかれ。

かくばかりをしと思ふ夜をいたづらにねてあかすらむ人さへぞうき

○コレホドニ面白イ。アツタラ秋ノ月夜ヲ。寢テシマウテ。ムザムザト明ス人モアラウガ。サウシタ人〻デガサ。キコエヌコトヂヤト思ハレル。

餘材いたづらの說わろし。いたづらにねてはゝねていたづらにと心得べし。

題しらず　よみびとしらず

白雲にはねうちかはしとぶ雁の數さへ見ゆる秋のよの月

○サテモサヤカナ月カナ。雲ヘトヾクホド高イソラチツレダツテ。トンデユク雁ノ數マデガヨウ見エル。

（千秋云。はねうちかはしは。いくつもつらなりて。雁と雁と羽をならべかはして飛わたるをいへり。しら雲とうちかはすにはあらず）

さよ中と夜はふけぬらし雁がねの聞ゆる空に月わたるみゆ

○夜ハイカウフケタ。モウトント夜半ニナツタサウナ。見レバ雁ノ鳴聲ノキコユルズツトソラノ方ヘ。モウ月ガマハツタ。

是貞ノみこの家の歌合によめる　大江ノ千里

月見ればちゞにものこそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねど

○月ヲ見レバガレハイロ〳〵ト物ガサ。悲シイワイ。オレヒトリノ秋デハナケレド。

たゞみね

久かたの月のかつらも秋はなほもみぢすればやてりまさるらむ

○月ノ中ノ桂ハコノ國土ノ木ノヤウニ秋ヂヤト云テモ。紅葉スルナド云事ハアリソモナイモノヂヤニ。ソレモヤツハリ。秋ハモミヂスルカシテ。イツモヨリハ光リガテリマサツタ。紅葉シタニヨツテ此ヤウニ照リマサルデアラウ。

打聞わろし。

月をよめる　佐原ノ元方

秋の夜の月のひかりしあかければくらぶの山もこえぬべらなり

○此ヤウニ月ノ光リノアカイ秋ノ夜ハ。ナンボ闇イクラブ山デモ。越ラレウト思ハレル人のもとにまかれりける夜きり〴〵すのなきけるをきゝてよめる

ふぢはらのたゞふさ

きり〴〵すいたくななきそ秋のよの長き思ひは我ぞまされる

○コレ御亭主貴樣ハ。心苦ガオホウテ。イロイロノ事ヲ思フテ夜ノ長イヲ明シカネルトイハシヤルガ。御亭主アノキリギリスト同ジヨウニアマリ泣カシヤルナイ。心苦ガ多ウテ秋ノ夜ノ長イノガメイワクナ事ハ。貴樣ヨリ。拙者ハサナホノコトヂヤワイ。

餘材打聞ともにわろし。

是貞ノみこの家の歌合の歌　とゝゆきの朝臣

秋のよのあくるもしらずなく蟲はわがごと物やかなしかるらむ

○此長イ秋ノ夜ノアケルモシラズニアノヤウニナク蟲ハ。オレガヤウニアレモ物ガ悲シイカシラヌ。

題しらず　よみ人しらず

秋萩も色づきぬればきり〴〵すわがねぬごとやよるはかなしき

○萩ノ葉モ色ヅイテソロ〳〵枯カケテクル時節ニナツタレバ物ガナシウテ夜ルモネラレヌニ。アノ蟲モ同ジヤウニ夜ルナクハ。ソチモオレガヤウニ物ガカナシイカ。

秋の夜は露こそことに寒からし草むらごとにむしのわぶれば

○クサムラゴトニアノヤウニ蟲ガ難儀ガツテナクノヂキケバ。秋ノ夜ハ露ガサカクベツニ寒イサウナ。

君しのぶ草にやつるゝふるさとはまつ蟲の音ぞ

かなしかりける

○人ガ見ステヽヨリツカイデドコモカモキツウアレテ。軒ナドヘハシノブガハエテ見苦シウナツテ。其ノ人ヲ戀シタフテ居家デハ庭デナク松蟲ノ聲ガサ。人ヲ待ト云名ユエカ。一入カナシウ聞エルワイ。

打聞やつるゝの注わろし。

秋の野に道もまどひぬまつ蟲の聲する方にやどやからまし

○此秋ノ野デ。モウ日モクレニ及ブ道モフミマヨウタホドニ。アノ人ヲ待ツト云名ノ松蟲ノ聲ノスル方ヘイテ。宿ヲカツタモノデアラウカイ。

あきの野に人まつ蟲のこゑすなり我かと行きていざとふらはむ

○此ノ秋ノ野ニアレ人ヲマツト云名ノ松蟲ノコエガスルワ。ソヲヤオレヲマツノカト云テ。ドレヤ行ヲカミマヒ申サウ。

もみぢ葉の散りてつもれるわがやどに誰をまつ蟲こゝら鳴くらむ

○モミヂガ散テツモツテ。誰モフミ分テ來タ人モナイコヲノ庭デ。タレヲ待ツトテアノヤウニ松蟲ハシキリニ鳴コトヤラ。タレモ來ル人ハアルマイニ。

打聞よろし餘材わろし。

ひぐらしのなきつるなべに日は暮れぬと思ふは山の陰にぞ有りける

○ヒグラシガ鳴イタニツレテ日ハクレタト思フタハ。サウデハナカツタ山ノカゲデサ。闇イノデアツタワイ。

千秋云なべには並にしてなれとかれとならぶときにいふ言なりつねに云々並に云々といふもこれにちかし

日ぐらしのなく山里の夕暮は風よりほかにとふ人もなし

○ヒグラシノナク此山里ハ夕グレニハ風ヨリ外ニハ一向ニ尋ネテクル人モナイアヽサビシイコトヂヤ。

はつかりをよめる　在原ノ元方

まつ人にあらぬ物からはつ雁のけさなく聲のめづらしき哉

○待人ガキタカナンゾノヤウニ。ケサ始メテ雁ノ鳴ク聲ガサテモメヅラシウ思ハレルコトカナ。コヲヂガ待テ居ル人デハナイヂヤケレド。

是貞ノみこの家の歌合のうた　とものり

秋風にはつ雁がねぞ聞ゆなるたが玉づさをかけてきつらむ

○秋風ノ吹ク空ニアレ給メテ雁ノ聲ガサスル雁ハ遠方カラノ狀ヲクビヘ掛テ來ルト云ヿヂヤガアノ鳴雁ハドコカラタガ狀ヲカケテキタ事ヂヤヤラ。

題しらず　よみ人しらず

わがかどにいなおほせ鳥のなくなべにけさふく風に雁はきにけり

○コヲノカドデ稻負鳥ガナクニツレテケサノ風ニ雁ガキタワイ。

いとはやもなきぬる雁かしら露の色どる木々ももみぢあへなくに

○キツウ早ウマア雁ハナイタ事カナ。露ノ色ドル木ドモモマダロクニモミヂモセヌウチニ。

春霞かすみていにしかりがねは今ぞ鳴くなる秋霧のうへに

○春霞ノ中ヘカスミニ見エテインダ雁ガ。ソノ時ノ霞ト同ジヤウニ秋ノ霧ノウヘノ方

デ。アレ今又ナクワ。

夜を寒みころもかりがねなくなべに萩の下葉もうつろひにけり

○夜ガ寒サニ衣ヲカルト云名ノ雁ノ鳴クニツレテ。萩ノ下葉モウツロウタワイ。

此歌はある人のいはくかきのもとの人まろがなりと

寛平ノ御時きさいの宮の歌合の歌

藤原ノ菅根ノ朝臣

秋風に聲をほにあげてくる船はあまのと渡る雁にぞ有りける

○アレ〳〵アノ青イ海ノヤウナソラヲ。秋風ニ聲ヲ高ウ帆ノヤウニアゲテ船ノヤウニ見エテ來ルモノハ。鳴テワタル雁ヂヤワイ。

かりの鳴けるを聞てよめる

みつね

うきことを思ひつらねて雁がねのなきこそ渡れ秋のよな〳〵

○雁ノイクツモツラナツテ鳴テワタルヤウニオレハ秋ノ夜ノウイ事ノ數々ヲオモヒツヾケテ。毎夜〳〵泣テサアカスワイ。

是貞ノみこの家の歌合の歌

忠岑

山里は秋こそことにわびしけれしかの鳴音に目をさましつゝ

○山里ハイツデモト云フウチニ。秋ガサ。別シテツラウナンギニ思ハレルワイ。ヨルヨル鹿ノナク聲デ目ヲサマシツゝ。夜ハ長シ何ヤラカヤラト難儀ナコトヲ思ヒツヾケラレテサ。

よみびとしらず

おく山にもみじふみわけ鳴く鹿の聲きく時ぞ秋はかなしき

○秋ハ總體カナシイ時節ヂヤガ。其秋ノ内デハ又ドウイフ時ガイツチ悲シイゾトイヘバ。紅葉モモウ散テシマウタ奥山デ。ソノチツタモミヂチ。鹿ガフミワケテアルイテ鳴ク聲ヲキク時分ガサ。秋ノウチデハイツチ悲シイ時節ヂヤ。

ふみわけは。鹿のふみ分るなり。

題しらず

秋萩にうらびれをれば足引の山したとよみ鹿のなくらむ

○萩ノ葉モ段々枯テイクヲ見テ。時節ノ物カナシサニ。此ヤウニ。ウナジヲナゲテ居ルノニドウ云事デアノヤウニ山ノ下マデヒヾクホド鹿ガ鳴コトヤラアノ鹿ノ聲ヲキケバイヨ〳〵悲シウテドウモタヘラレヌニ。をればゝ。をるにの意なり。

秋萩をしがらみふせてなく鹿のめには見えずておとのさやけさ

○野ノ萩ノ中ヲフミアラシテオシフセテシガラミニシテ鳴テアルク鹿ノ目ニハ見エイデアノマア聲ノサヤカニヨウ聞ユル事ワイ。

千秋云。古へは鹿などの鳴こゑをもおとゝもいへり。萬葉に鶯のおとなどもよめり

是貞ノみこの家の歌合によめる

ふぢはらのとしゆきの朝臣

あきはぎの花咲きにけり高砂のをのへの鹿は今やなくらむ

○アレ萩ノ花ガサイタワイ。山ノ鹿ガモウナクデアラウカ。

むかしあひしりて侍ける人の秋の野にてあひて物がたりしけるついでによめる

みつね

秋萩のふるえにさける花見ればもとの心はわすれざりけり

○萩ノ去年ノ古枝ヘアレアトホリ又花ノサイタヲ見レバ草木デモマヘカタノ事ヲバ忘レハシマセヌワイ。スレヤソコモトモ。中絶ハ致シタケレド。先年御コンイニ致シタ事ハオ忘レハナサルマイ。

題しらず　よみ人しらず

秋はぎの下葉色つく今よりやひとりある人のいねがてにする

○萩ノ下葉ガソロ〳〵枯カケテキタ。アヽ段段ト夜ハ長ウナラウシモウコレカラ又。オレガヤウナ。獨ズミノ者ハ。ネラレヌデ。アラウカイ。

千秋云。此歌。二の句にてきれたり

鳴きわたるかりの涙やおちつらむ物思ふやどの萩の上の露

○アレハテヽ悲シイコチノ庭ノアノ萩ノウヘヘ露ガキツウシゲウオイタガ。ソラヲワタル雁モ。オレガヤウニカナシイ事ガアルカシテ。泣テイク。スレヤアノ雁ノナク涙ガオチタノカシラヌ。アノ萩ノ露ハ。

萩の露玉にぬかむととればけぬよし見む人は枝ながら見よ

○萩ノ露ガキラ〳〵トシテアマリ見ゴトサニ玉ニシテツナガウト思テトツタレバヂキニ消タ。エイワ。ソンナラ見ヤウト思フ人ハトラズニヤハリ枝ニアルマヽデ見ヨサ。

ある人のいはく比歌はならのみかどの御うたなりと

をりて見ばおちぞしぬべき秋萩の枝もたわゝにおける白露

○萩ノ花ノエダモヒワ〳〵トタワムホドオイタアノ露ガキツウ見事ナガ。アレヲ。折テ見ヤウトシタナラ。サダメテ落テシマウデサアラウ。

はぎが花ちるらむ小野の露霜にぬれてをゆかむさよはふくとも

○今夜妹ガトコロヘイカウト思フ野道ハ。萩ガ散テ。サゾ露モフカイデアラウガ。ヨイワヌレテイカウゾ。夜ガフケテ。露ハシゲクトモ。

露霜といふはたゞ露のことなり。萬葉に多し皆しかり。

千秋云。ぬれてをのを。は助辭ながら。其事をつよくいへる詞なり

是貞ノみこの家の歌合によめる　文屋ノあさやす

秋の野におくしら露は玉なれやつらぬきかくるくもの絲すぢ

○秋ノ野ノ露ハ玉ヂヤカシテ。蛛ノ糸スヂヘツナイデカケタ。

題しらず　僧正遍昭

名にめでておれるばかりぞ女郎花われおちにきと人にかたるな

○女郎花ト云。名ガヨサニ。チヨツト馬カラオリテ見タバカリ。ヂヤゾカナラズ。オレガ。女ニオチタト人ニ云デハナイゾヨ。

千秋云。そのかみ然るべきほどの法師はつねに馬にのりてありきたりしなり。ものに多くみえたり

おれるとは。馬よりおりたるをいふ。をみなへしを折れるにはあらず。打聞わろし。

僧正遍昭がもとにならへまかりける時にをとこ山にてをみなへしを見てよめる　ふるのいまみち

をみなへしうしと見つゝぞ行き過ぐるをとこ山にしたてりと思へば

○アノ女郎花ヲバアヽイタヅラナ女ヂヤト思フテオレハヨソニ見テサ。通リ過テイク。コヽハ男山ナレバ男ノ中ニマジツテ居ル女

ヂヤト。思フニヨツテサ。

是貞ノみこの家の歌合のうた　としゆきの朝臣

秋の野にやどりはすべし女郎花名をむつましみ旅ならなくに

○トマルナラ秋ノ野ニトマルガヨイ。女郎花ガアツテ女ト云名ガムツマシサニヨツテ。寐ルヤウデハナイワサ。

二の句のはもじ。心をつくべし。餘材打聞ともにときえずわろし。

千秋云。心遠き所にはあらでも。常の家をはなれて。他所にて寐るを旅寐と云こと常なり

題しらず　をのゝよしき

をみなへしおほかる野べにやどりせばあやなくあだの名をやたちなむ

○女郎花ノ多クアル野ニトマツタナラ。ワケノナイ事ニアダナ名ガタヽウカシラヌ。

女郎ト云ハ名バカリデコソアレホンノ女デモナイニ。

朱雀院のをみなへしあはせによみて奉りける　左のおほいまうちぎみ

をみなへし秋の野風にうちなびき心ひとつをたれによすらむ

○チミナメシガ。秋ノ野ノ風ニナビクガ。タレニ心チヨセテ。アノヤウニナビクヤラ。ひとつといふはたゞ心といふとなり

藤原ノ定方ノ朝臣

秋ならであふことかたき女郎花あまの河原におひぬものゆゑ

○天ノ川コソタナバタノ秋デナウテハアハヌ所ナレ。アノ女郎花ハアマノ川ノカハラニハエテアルデモナイニ。秋デナウテハアフ事ガナリガタイ女ヂヤ。

つらゆき

たが秋にあらぬものゆゑ女郎花なぞ色に出てまだきうつろふ

○誰ガ飽タトイフ秋デモナイニ女郎花ハドウシタ事ゾ。アノヤウニ色ニデテ恨ンデ。マダ早イニウツロウノハ。

みつね

妻こふる鹿ぞ鳴くなるをみなへしおのがすむ野の花としらずや

○アレ妻ヲコヒシタウ鹿ガサアレナクワ。鈍ナヤツヂヤ。女郎花ヲ己ガカヨウ野ノ花ヂヤトハ知ラヌカイ。女郎花トイヘバ女ヂヤニ。ナゼアハヌゾイ。

をみなへし吹き過ぎてくる秋風はめには見えねど香こそしるけれ

○女郎花ヲ吹テトホツテクル風ハ目ニハソレト見エヌケレド。テウド女ニ逢テキタ男ノウツリガノスルヤウデ。女郎花ヲ吹テキタト云事ガ。香デサヨウシレルワイ。

たゞみね

人の見ることやくるしきをみなへし秋霧にのみたちかくるらむ

○女郎花ハ。女ノ人ヲハヅカシガツテ。カクレルヤウニ霧ニカクレテバツカリアルガドウ云事デアノヤウニ霧ニカクレルヤラ。アレモ人ノ見ルノガメイワクナカイ。

ひとりのみながむるよりは女郎花わがすむやどにうゑて見ましを

○女郎花ヨ。此ノ野原ニコノヤウニ露ニシチレテ。獨リシホ〳〵トシテバツカリ居ヤウヨリハオレガ宿ヘウツシテ植テ見ハヤシテ

ヤラウモノチ。

餘材にしたかふべし。打聞わろし。

千秋云ひとりとは一もとにてあるよしにはあらず女の男にそはずしてひとりあるよしにいへるなり

ものへまかりけるに人の家にをみなへしうゑたりけるを見てよめる

兼覽ノ王

女郎花うしろめたくも見ゆる哉あれたるやどにひとりたてれば

○アノ女郎花ハ。此アレタヤドニ。見レバ人モツカズニ。タツタ一人居レバサテモマアキヅカイナ物カナ。

寛平ノ御時藏人所のをのこどもさが野に花見むとてまかりたりける時かへるとてみなうたよみけるついでによめる　平ノさだふむ

花にあかで何かへるらむをみなへしおほかる野べにねなまし物を

○見事ナ色々ノ花ヲハライツハイエ見ズニナゼニ此ヤウニカヘル事ヤラ。女郎花ノ多クアル野デ。コヨヒハネヤウデアツタモノヲ。女ト云フ名ナレバヨイトマリ所ヂヤニ。

是貞ノみこの家の歌合によめる

としゆきの朝臣

なに人かきてぬぎかけし藤ばかまくる秋ごとに野べをにほはす

○此フヂバカマハマヘカタ何人ノ著テヌギカケテオイタ袴ゾ。毎年〳〵秋ニナレバ此野ヘンヲニホハス。今ニ此ヤウニニホウハ。ナンデモコレハナミタイテイノ人ノ袴デハアルマイ。ヨク〳〵レキ〳〵ノ人ノ袴デ香ガヨウシメテアルユエデアラウ。

藤袴をよみて人に遣しける

やどりせし人のかたみかふぢばかまわすれがたき香ににほひつゝ

○此ノ藤袴ハイツゾヤ此ノ方デオトマリナサレタ貴樣ノ形見ニオイテ御歸リナサツタ袴デコサルガ。今ニワスレガタイ香ガニホフテサ貴樣ノ事ヲオナツカシウ存ズル。

ふぢばかまをよめる

そせい

ぬししらぬかこそにほへれ秋の野にたがぬぎかけしふぢばかまぞも

○此フヂバカマハ。此秋ノ野ヘタレガヌイデ掛テオイタ袴ゾマア主ノシレヌ香ガサ。ニホテアル。

題しらず　平ノ貞文

今よりはうゑてだに見じ花すゝきほに出る秋はわびしかりけり

○スヽキハドコニモタクサンニアル物ヂヤガソレヤドウモセウコトガナイヂヤガ。今カラセメテハコチノ庭ニナリトモ植テハ見ヌヤウニセウゾ。アノヤウニ薄ノ穗ガデヽ。秋ノケシキガ見エレバキツウ物ガナシウテナンギナワイ。

だにはなりともの意なり。餘材だにの意。なほとき得ず。

寛平ノ御時きさいの宮の歌合の歌

在原ノむねやな

秋の野の草のたもとか花すゝきほに出てまねく袖と見ゆらむ

○スヽキノホノ風デナビクノハ。テウド人ガ色ニデヽ戀シイ人チマネク袖ノヤウニ見エルガ。スヽキノ穗ハ。秋ノ野ノ總體ノ草ノ袖カシラヌ。

○此歌にて袂と袖とはたゞ詞をかへたるのみにて同じ意なり。

千秋云かやうに留りたるちんの格。この譯にて心得べし

素性法師

われのみやあはれと思はむきり〴〵すなく夕かげのやまとなでしこ

○キリ〴〵スガ鳴デオモシロイユフカゲニ見事ニ咲テアルアノ撫子ト云兒ヲ。母親ヤ乳母ナドモ打ソロウテトモ〴〵ニテウアイスルヤウニ。誰ニモカレニモ見セテ賞翫サセタイモノヂヤニ。タツタ一人ノ手デソダテル兒ノヤウニ。オレバツカリガ。アヽヨイ兒ヤト云テ。獨リ見ハヤサウコトカヤ。アツタラ此ノ花ヲ。

餘材後の說ちかし。打聞わろし。

題しらず　よみ人しらず

みどりなるひとつ草とぞ春は見し秋は色々の花にぞ有ける

○春見タ時ニハ。タヾ皆同ジ青イ一ツノ草ヂヤトバカリ思フタガサウデハナイ。秋ニナツテ今見レバ。コレ此ノヤウニイロ〳〵ノサ見ゴトナ花ヂヤワイ。

もゝくさの花のひもとく秋の野に思ひたはれむ人なとがめそ

○ソウタイ花ノ開クヲ紐トクト云ヂヤガ。此ノヤウニイロ〳〵サマ〴〵草ノ花ノ帶紐トイテミダレテアル面白イ秋ノ野デ。ドレヤコヲモアノ花ヲ賞翫シテトモ〴〵ニミダレテアハウヲツクサウ。人ガ見タナラ。アレハマヤ何事ヂヤトフシンニ思フテアラウガユルセユルセ。

五

月草にころもはすらむ朝露にぬれてののちはうつろひぬとも

○キルモノヲバ月草ノ花デスラウ。エイ色ナ物ヂヤ。シタガ外ヘ色ノウツリヤスイ物ヂヤニヨツテ。朝ノツユニヌレタラ。色ガ外ノモノヘウツヽテシマハウモシレヌガ。エイワサ。後ニハ。ウツヽタト云テモ。

仁和のみかどみこにおはしましけるとき御覽ぜむとておはしましける道に遍昭が母の家にやどり給へりける時に庭を秋ののにつくりておほむ物がたりのついでによみて奉りける

僧正遍昭

里はあれて人はふりにしやどなれや庭もまがきも秋の野らなる

○此ノヤドノ義ハ。里ハアレマシタ里ナリ。住デヲリマスル者ハ老人ナリ。致シマスレバ諸事不都合ナ宿ニエカ致シマシテ。庭モ籬モ御覽下サレマストホリ。トントハヤ秋ノ野原デゴザリマス。

上句の二ツのはもじ。心をかくべし。

古今和歌集卷五

秋歌下

是貞ノみこの家の歌合の歌　文屋ノ康秀

吹くからに秋の草木のしをるればうべ山風をあらしといふらむ

○フクトソノマヽ。秋ノ草ヤ木ガアノヤウニシチレヽバ。尤ナコトヂヤ。ソレデ山風ヲアラシトハ云デアラフ。

千秋云。あらしといふ名は此歌のごとく物をあらす意にて。合荒か・又あらき風といふことが。風をしといふなり

草も木も色かはれどもわたつ海の清清浪の花にぞ秋なかりける

○草デモ木デモ。此ノ秋ト云フ時節ガアッテ。ミナ色ガカハッテ枯テシマウケレドモ。アノ海ノ浪ノ花バッカリガ。イツデモ同ジヤウニ咲テ秋ト云フコトガナイワイ。

秋の歌合しける時によめる　きのよしもち

もみぢせぬときはの山はふく風の音にや秋をききわたるらむ

○秋デモ木ノ葉ノ色ノカハルト云フコトモナウテ常住同ジヤウヂヤト云フ常磐山デハ。時節ガイツヂヤカシレマイガ。秋ヂヤト云事ハ。風ノ吹ク音バカリデヨソニ聞テタテルデアラウカ。

題しらず　よみ人しらず

霧たちて雁ぞなくなるかた岡のあしたの原はもみぢしぬらむ

○霧ガ立テ。アレ雁ガサ。ナクワ。コレデハモウ。片岡ノ朝ノ原ハ。紅葉シタデアラウ。

かみ無月しぐれもいまだふらなくにかねてうつろふ神なひのもり

○木葉チソメル十月ノ時雨モマダフラヌニ。神ナビノ杜ハ。ハヤカネテチヤント色ガ染マッタ。

ちはやぶる神なひ山のもみぢ葉に思ひはかけじうつろふものを

○心ノカハリヤスイ人ニ思ヒヲカケルハアハウナ事ヂヤガ。此ノ神ナミ山ノ紅葉モソンナモノヂヤ。思ヒハカケマイゾ。ホドナウチッテシマウモノヲ。

貞觀ノ御時綾綺殿のまへに梅の木有けりにしのかたにさせりける枝のもみぢはじめたりけるをうへにさふらふをのこどものよみけるついでによめる　藤原ノかちおむ

同じえをわきてこのはのうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ

同ジ一本ノ木ノ枝ヂヤニ。西ノ方ヘサシタ枝ガトリ分テアノヤウニ色ノカハッタヲ見レバ。ナルホド西ガサ。秋ノハジメヂヤワイ。

いし山にまうでけるときおとは山の紅葉を見てよめる　つらゆき

秋風の吹きにし日よりおとは山みねの梢も色づきにけり

○秋ノタチソメタ日カラシテ風ノ音モカハッテキタガ。今日見レバ此ノ山ノ木ドモヽソロ〳〵色ガツイテキタワイ。

千秋云。この譯にて。上句を心得べし梢もといへるにて。風の音もかはりたる意を思はせたるものなり

是貞ノみこの家の歌合によめる　としゆきの朝臣

白露の色はひとつをいかにして秋のこのはをちぢにそむらむ

○露ノ色ハミナ同ジ一ツノ白イ色ヂヤニ。ドウシテ秋ノ木ノ葉ヲアノヤウニイロ〳〵ノ色ニソメル事ヤラ。

千秋云。ひとつをのをは。ものをの意にて。ひとつなるものをいへるなり

壬生ノ忠岑

秋の夜の露をば露とおきながら雁の涙や野べをそむらむ

○秋ノ夜ノ露ヲバ。白イ露デソノマヽデオイテ別ニ雁ノナク涙デアノ野ノ草木ヲバ。ソメルカシラヌ。

題しらず　よみびとしらず

秋のつゆいろ〳〵ことにおけばこそ山のこのはの千種なるらめ

○秋ノ露ハタヾ白イ物ヂヤトバカリ思フテ居ルガサウデハナイサウデ。色々チガウテオクサウナ。ソレデコソ。染ツタ山ノ木ノ葉ガアノヤウニサマ〴〵ノ色デアラウ。

もる山のほとりにてよめる　つらゆき

しら露もしぐれもいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり

○露モ時雨モキツウモルコノ守ル山ノ木ドモハ下葉マデノコラズ色ヅイタワイ。

秋のうたとてよめる　ありはらのもとかた

雨ふれど露ももらじをかさどりの山はいかでかもみぢそめけむ

○カサトリ山ハ傘ナモツト云フ名ナレバ。雨ガフツテモ。露ホドモモリハ。スマイニドウシテアノヤウニ。紅葉シソメタコトヤラ。

神のやしろのあたりをまかりける時にいがきのうちの紅葉を見てよめる　つらゆき

ちはやぶる神のいがきにはふくずも秋にはあへずうつろひにけり

○コレハマア神社ノイガキニハウテアル葛ナレバ神ノ御守リデ。色ハカハリソモナイモノナレド。ソレデモ。秋ニハエコタヘズニ色ガカハツタワイ。

是貞ノみこの家の歌合によめる　たゞみね

雨ふればかさどり山のもみぢ葉はゆきかふ人の袖さへぞてる

○〔一〕笠取山ノ紅葉ハコトノ外ヨウ染テ往來ノ人ノ袖マデサ色ガカヾヤイテチリマス。

寛平ノ御時きさいの宮の歌合の歌　よみ人しらず

ちらねどもかねてぞをしきもみぢ葉は今はかぎりの色と見つれば

○此ノ紅葉ヲ見レバ。マダチリハセネドモ。チラヌサキカラサ。惜イモウ十分ニソメタレバ。オツヽケチルデアラウト思ヘバサ。

やまとの國にまかりける時さほ山に霧のたてりけるを見てよめる　きのとものり

たがためのにしきなればか秋霧のさほの山べを立かくすらむ

○此ノサホ山ノ紅葉ハ。タガタメニドノヤウニ大切ニスル錦デ。アノヤウニ霧ガカクシテ。人ニモ見セヌ事ヤラ。セツカク紅葉ヲ見ヤウト思フテキタニ。

是貞ノみこの家の歌合の歌

よみ人しらず

秋ぎりはけさはなたちそ佐保山のはゝその紅葉よそにてもみむ

霧ハドウゾケサハ立テクレルナイ。アノサホ山ノ柞ノ紅葉チヨソカラナリトモ見ヤウニ。

秋の歌とてよめる　坂上ノこれのり

さほ山のはゝその色はうすけれど秋は深くもなりにけるかな

○ソウタイ柞ノ木ト云モノハ。ナンボ染テモ色ノアマル濃ウハナラヌ物ナレバ今マ此サホ山ノ柞モ色ハウスウテ。深ウハナイケレドモ。アノケシキヲ見レバ。サテ〳〵マア秋ハイカウ深ウナツタ事カナ。

人のせんざいに菊にむすびつけてうゑける歌　ありはらのなりひらの朝臣

うゑしうゑば秋なきときやさかざらむ花こそちらめ根さへ枯めや

○カウシテウエテサヘオイタナラバ。コレカラ後秋ト云時ガナイコトガアツタラバコソサカヌ事モアラウカシラヌガ。秋ト云時節サヘアラバ咲ヌト云事ハアルマイ。此今年ノ花コソチツテシマハウケレ根マデガ枯レウカ根ハカレハセネバ。イツマデモ毎年秋ハ咲クデアラウハサテ。

寛平ノ御時きくの花をよませ給うけるとし行ノ朝臣

ひさかたの雲の上にて見る菊はあまつ星とぞあやまたれける

○カヤウニ禁中デ見マスル菊ノ花ハ。雲ノ上デゴザリマスニヨツテ天ノ星ガヤトサ。トリチカヘラレマスルワイ。

この歌はまだ殿上ゆるされざりける時にめしあげられてつかうまつるとなん

是貞ノみこの家の歌合のうた　紀ノ友則

露ながらをりてかざさむ菊の花おいせぬ秋の久しかるべく

○菊ノ露ハ壽命ヲ長ウスルモノヂヤ。キケバ。イツマデモ年ノヨラズ秋ヲ久シウ重ネテ長生スルヤウニ。此菊ノ花ヲ露モソノマヽデ折テ頭ヘサヽウ。

寛平ノ御時きさいの宮の歌合の歌　大江ノ千里

うゑし時花まちどほに有りし菊うつろふ秋にあはむとや見し

○春ウエタ時ニハ。早ウ花ノサク秋ニシタイト。マチドホニ思フタ菊ガマア。盛リガ過テモウ色ノカハツテシマウ時節ニナツテコノヤウニナツタノヲ見ヤウトハ。思フタカイ。

千秋云。結句やもじは。やはの意にて。うつろふ秋にあはんとは思はざりしものをといへるなり

おなじ御時せられける菊合にすはまをつくりて菊の花うゑたりけるにくはへたりける歌ふきあげの濱のかたに菊植たりけるをよめる　すがはらの朝臣

秋風の吹上にたてるしらぎくは花かあらぬか浪のよするか

○秋風ノフク吹キ上ノ濱ニアルアノ白イ菊ノ花ハ。花カサウデハナイカ浪ノヨセルノカ風ガフクナレバ浪ノヨセルヤウニモ見エルガ。

仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる　素性法師

ぬれてほす山路のきくの露のまにいつか千年を
我はへにけむ

○在所ヘカヘツテ見タレバモハヤ千年モ過タヤウスギヤガオレハ仙人ノスミカヘイクトテ。山道ノ菊ノ花ノ中ヲ分テイテ其ノ菊ノ露ニ。キル物ノヌレタヲ千ス間ホドノチツトノマデアツタニイツノマニマア千年モタツタ事ヤラ。

きくの花のもとにて人の人まてる
かたをよめる　とものり

花見つゝ人まつときはしろたへの袖かとのみぞ
あやまたれける

○庭ノ菊ノ花ヲ見イ〳〵クル人ヲ待テ居ルトキニハソノ白イ花ガソノクル人ノ白イ衣ノ袖ノヤウニ見エテ。ヒタモノソギヤカトトリチガヘラルヽワイ。

大澤の池のかたに菊うゑたるをよめる　めろ

一もとゝ思ひしきくをおほさはの池の底にもたれかうゑけむ

○タツタ一本ギヤト思フタ菊ノ花ギヤニ。アレ此ノ池ノ底ニモアルワアレハ誰ガ池ノ底ヘモウエタコトヤラ。イヤ〳〵ヨウ見レバ影ノウツヽタノギヤ。

千秋云。これまで四首の題はみなかのすはまのかたなり

世ノ中のはかなきことを思ひけるをりにきくの花を見てよめる　つらゆき

秋のきくにほふかぎりはかざしてむ花よりさきとしらぬ我身を

○菊ノ花ヲカウ咲テアルウチハ散ルマデハカザシテアソバウゾ。アノ花ヨリサキヘ死ナウモシレヌ我身ギヤモノヲ。アソバイデハ。

白菊の花をよめる　凡河内ノみつね

心あてにをらばやをらむ初霜のおきまどはせる
しらぎくの花

○アノヤウニ初霜ガオイテ。花ヤラ霜ヤラシレヌヤウニマガウテ見エル。白イ菊ノ花ハタイガイスイリヤウデ。チラバ。折モセウガナカ〳〵見分ラルヽ事デハナイ。

是貞ノみこの家の歌合のうた　よみ人しらず

いろかはる秋のきくをば一とせにふたゝびにほふ花とこそみれ

○ハジメノホドヽハトント格別ニ色ノカハツタアノ菊ノ花ハ。同ジ木ノ芽トハ見エヌ一年ニ二度サイタ花ギヤトサ思ハルヽ。

餘材下句意違り。打聞よろし。

仁和寺にきくの花めしけろ時に歌そへて奉れとおほせられければよみて奉りける　平ノさだふん

秋をおきて時こそ有けれきくの花うつろふからに色のまされば

○キクノ花ハ。ウツロイマシテカラ。又カヤウニ始メヨリハ色ガマサリマスレバ。秋ノ一トサカリバカリデハゴザリマセヌ。秋ガスギテカラ又マイチド。盛リノ時節ガサゴザリマス。恐レナガラ。陛下ノ御義モコノ菊ノ花ノトホリト存ジ奉リマス。

人の家なりけるきくの花をうつし
うゑたりけるをよめる　つらゆき

咲そめしやどしかはれば菊の花色さへにこそ
うつろひにけれ

○此ノ菊ノ花ハ始メニ咲タヤドヽ。ヤドガ替

ツテウツヽタレバ。所ノウツヽタバカリカ花ノ色マデガサ。アノヤウニウツテカハツタワイ。

題しらず　よみ人しらず

佐保山のはゝそのもみぢちりぬべみよるさへ見よとてらす月影

○アノサホ山ノ柞ノ木。モミヂガ。オツヽケ散ラウヤウニ見エテオツテ。晝バカリデナシニ。夜ルモ人ニ見ヨト云テ。アノヤウニ月ガアカイ。

みやづかへ久しうつかうまつらで山里にこもい侍りけるによめる　藤原ノ關雄

おく山のいはかきもみぢちりぬべしてる日の光見る時なくて

○此ヤウニ高イ岩ノ築地ノヤウニ立テアル陰ニアル奥山ノ紅葉ハ日ノ光ヲ見ル時モナシニ散テシマウデアラウト思ハレルガ。アヽクチヲシイオレガ身ノウヘモテウド此ノ紅葉ト同ジ事ヂヤ。

題しらず　よみ人しらず

立田川もみぢみだれてながるめり渡らば錦中や絶えなむ

○立田川ハ紅葉ガチリミダレテ今最中流レルヤウスニ思ハレル。ソレデハ今渡ツタナラバアツタラ錦ガマン中カラキレルデアラウカイ。

此歌はある人ならのみかどの御歌なりとなん申す

たつた川もみぢ葉ながる神なひのみむろの山に時雨ふるらし

○此川ニ紅葉ガナガレル。神ナビノ御室ノ山ニ時雨ガシテ風ガフクサウナ時雨といふに風のふくとを。もたせるなるべし。

またはあすか川もみぢ葉流る　此歌不注人丸歌

戀しくは見てもしのばむもみぢ葉をふきな散しそ山おろしの風

○紅葉ハモウ散テシマウタガ。今カラモ散タ紅葉ノ戀シイ時ニハ。此落葉ヲナリトモ見テ愛セウニソノヤウニ。ヨソヘフキチラシテヤルナイコレ山オロシノ風ヨ。

千秋云。このもみぢ葉は。ちりにしきたる落葉をいへるなり見てもといふにて怨聞えたり。せめては落葉を見てもなり。ももじあはれなり

秋風にあへずちりぬるもみぢばのゆくへさだめぬ我ぞかなしき

○秋風ニエコタヘズニ散ルアノ紅葉ノ。アチヤコチヤ散テイテ。ドコトモナク方ノ定マラヌヤウニ。オレガ身モ行末ノドウナル事ヤラシレヌガサカナシイ。

秋はきぬ紅葉はやどにふりしきぬ道ふみわけてとふ人はなし

○物ガナシイ時セツニハナツタナリ。紅葉ハ庭ヘチツテシマウソノ散リシイタ落葉ヲフミ分テタレモ尋ネテクル人ハナシ。サテモサテモ何モカモソロウテサビシイ事カナ。

三のはもじに。心をつくべし。餘材初句を。秋の暮れは來ぬといへるはしひごとなり。秋とは物かなしき時節といふ意にいへる例多し。

ふみわけてさらにやとはむもみぢ葉のふりかくしてし道と見ながら

○アノ家ヘハイル道ハ。アノヤウニ紅葉ガチリシイテ。タレモ人ノミシラヌヤウニ。フミ分テコヌヤウニト。隱シテアル道ヂヤニサウト見ナガラ。ソレヲフミ分テ。今サラ見舞ウベキ事カ。サウト見ナガラフミ分テ見舞ハウヤウハナイ。

秋の月山べさやかにてらせるはおつる紅葉のかずを見よとか

○月ノアノヤウニ山ヲサヤカニテラスノハオチル紅葉ノ數ハイクツヂヤト云コトヲトリ見ヨトテノ事カヤ。

吹く風のいろのちくさに見えつるは秋のこの葉のちればなりけり

○風ニハ色ハナイモノヂヤニ。アノヤウニ風ノ吹ク色ガ。イロ〳〵ニ見エルハドウシタコトカト思ヘバ。紅葉ノチルコエヂヤワイ。

せきを

霜のたて露のぬきこそよわからし山の錦のおればかつちる

○山ノ紅葉ノ露ヤ霜ニ染マツテ。ソシテ錦ノヤウニナルヂヤ。スリヤ。霜ト露トガ錦ノハタヲ織ル竪ト横トノ糸ノヤウナ物ヂヤガソノ露ト霜トノタテヨコノ糸ガサ弱イサウナ。ソレユヱカシテアノ紅葉ノ錦ガ織ルカト思ヘバ。ハヤ片方カラ破レルヤウニチリマス。

うりんぬんの木のかげにたゝずみてよみける　僧正遍昭

わびびとのわきて立よるこの本は頼むかげなく紅葉散けり

○ナンジフナ身ハ。ナニカラナニマデナンジフナモノカナ。コレハ頼モシイヨイ陰ヂヤト思フテ見タテヽ立ヨルコノ木ハ。ヨニモ早ウ紅葉ガチツテシマウテ。トリワケテ早ウ。

二條ノ后の春宮のみやす所と申けるる時に御屏風にたつた川に紅葉ながれたるかたをかけりけるを題にてよめる　そせい

もみぢ葉のながれてとまるみなとにはくれなゐ深き浪やたつらむ

○此ノ立田川ノ紅葉ガ。ツヽト下ヘ流レテイテ。トマル湊ノアタリニハマツカイナ色ノヨイ涙ガタツデアラウカ。

なりひらの朝臣

ちはやぶる神代もきかず立田川からくれなゐに水くくるとは

○此ノ立田川ヘ。シゲウ紅葉ノ流レルトコロヲ見レバ。トント紅鹿子紅シボリヒト見エルワイ。サテ〳〵奇妙ナ事カナ。神代ニハサマ〴〵ノキメウナ事ドモガアツタヂヤガ。此ノヤウニ川ノ水ヲ。紅ノクヽリゾメニシタト云フ事ハ。神代ニモイツカウキカヌ事ヂヤ。

千秋云。くゝりぞめは。合式などにも見えて。縮纈といへるこれなり

是ノ貞みこの家の歌合の歌　としゆきの朝臣

わが來つるかたもしられずくらぶ山木々のこのはのちりとまがふに

○此クラブ山ノ木ドモノコノハノ最中チリマガウノデ。今トホツテ來タ方モ。ドチカラキタヤラシレヌ。

たゞみれ

神なひのみむろの山を秋ゆけば錦たちきるこゝちこそすれ

○今秋ノコロ此ノ神ナヒノミムロノ山ヲ通レバ。紅花ガチリカヽルデ錦ヲ着ルコヽロモチガサスルワイ。

千秋云。たちの譯なきは。俗語にはこの詞なきがよろしきなるべし

北山にもみぢをらむとてまかれりける時によめる　貫之

見る人もなくて散ぬるおく山の紅葉はよるのにしきなりけり

○ナンデモセンノナイ事ヲバ夜ルノ錦ト云ヂヤガ。見ル人モナシニ此ヤウニムダニ散テシマウタ奥山ノ紅葉ハ。ナンボ見事デ錦ノヤウデモマコトニ夜ノ錦ヂヤワイ。

秋のうた　かれみの王

立田姫たむくる神のあればこそ秋の木ノ葉のぬさと散らめ

○立田姫ハ神樣ヂヤガソレデモ又御手向ナサル神樣ガアルヤラコソ。御自身ノ御染ナサツタ。紅葉ガ。アレトント手向ノ麻ヲチラスヤウニチリマス。

小野といふところにすみ侍ける時

もみぢを見てよめる　つらゆき

秋の山もみぢをぬさとたむくればすむ我さへぞ旅ごころする

○秋ノ山デハアレアノトホリニ。紅葉ノチルヤウスガテウド旅人ノ道クダリ神々ヘ麻ヲチラシテ手向テユクヤウニ見エルニヨツテ住デ居ルコチマデガサドウヤラ旅ノコヽチガスル。

神なひ山を過てたつた川を渡りける時に紅葉のながれけるをよめる　きよはらのふかやぶ

神なひの山をすぎゆく秋なればたつたの川にぞぬさやたむくる

○コチモ今神ナビ山ヲ過デキテ。立田川ヲ渡ルガ。暮ヲ行ク秋モソノトホリデ。神ノゴザル神ナビ山ノ。紅葉ハモウ散テ。ソコニハスギテ西ヘユケバ。アレアノヤウニ。紅葉ノヌサヲバ立田川ヘサタムケマス。神なひ山は山城國乙訓郡立田川はその西にて津ノ國島上郡なりともに山崎のあたりなりこの事別に考へあり。

千秋云。師のこの考は。玉勝間の初若菜ノ卷に。くはしく見えたり

寛平ノ御時きさいの宮の歌合の歌　藤原ノおき風

白浪に秋のこのはのうかべるをあまのながせる船かとぞ見る

○浪ノ上ヘ。木ノ葉ノチツテウイテアルノハ。獵師ノ流シタ船デハナイカトサ見エル。

立田川のほとりにてよめる　坂上ノ是則

もみぢ葉のながれざりせば立田川水の秋をばたれかしらまし

○木葉ノ青イノハ色ノカハルデ秋ガシレルガ水ノ青イノハ色ノカハラヌモノナレバ。秋ガシレヌニ。今立田川ノ水ヲ見レバ。紅葉ガ流レルデ秋ヂヤト云事ガシレタ。モシ此ノヤウニ紅葉ノナガレル事ガナイナラバ水ノ秋ヲバドウシテ誰レガシラウゾ。シルモノハアルマイ。

しかの山ごえにてよめる　はるみちのつらき

山河に風のかけたるしがらみは流れもあへぬもみぢなりけり

○山川ヘアレ風ガモテキテシガラミヲカケタト見エルノハ。エナガレモセズニトマツテアル。紅葉ヂヤワイ。アレハ風ガフクデアマリシゲウモミヂガチツテセキカケ〳〵流レテクルニヨツテサラ〳〵ト下ヘ。エ流レテハイカズニアノトホリニシガラミノヤウニヨドムヂヤ。

池のほとりにて紅葉のちるをよめる　みつね

風ふけばおつるもみぢ葉水清みちらぬ影さへ底に見えつつ

○風ガフケバ。チトヅヽソロ〳〵紅葉ガチリカケタガ。此ノ池ノ水ガキヨサニ。マダチラズニ枝ニアル紅葉ノ影マデガ底ヘヨウウツヽテ。ハヤ大分チツタヤウニ見エル。

亭子院の御屏風の繪に川わたらむとする人のもみぢのちる木の本に馬をひかへてたてるをよませたまひければつかうまつりける

たちとまり見てを渡らむもみぢばは雨とふるとも水はまさらじ

○シバラク立トマツテ。アノ紅葉ヲ見テカラ此ノ川ハ渡ラウ。雨ガフレバ水ガマシテ川ガ渡ラレヌヂヤガ。紅葉ハ雨ノヤウニナンボフツタトテモ水ハマシハスマイホドニ。

是貞ノみこの家の歌合の歌

たぐみれ

山田もる秋のかりほにおく露はいなおほせ鳥の涙なりけり

○秋ノコロ山ノ田ノ番ヲスル此ノ小屋ヘコノヤウニ露ノオイタハ。稻負セ鳥カ此ゴロハ來テシゲウ鳴ケバ。ソノナミダヂヤワイコレハ。

題しらず　よみ人しらず

ほにも出ぬ山田をもるとふぢ衣いなばの露にぬれぬ日はなし

○マダ穗モデヌ山ノ田ヲトウカラ番ヲスルトテ。毎日〳〵稻ノ葉ノ露デキルモノヽヌレヌ日ト云ハナイ。百姓ト云モノハアヽナンギナモノヂヤ。此ヤウナヤウスヲ。上ニハ御存知アルマイカ。

藤衣は。いやしきものなり。

千秋云。こは君たる人はことにふかく心をとめて昧ひ給ふべき歌なり。下として貴き人の御心ばへをも知り奉り。また貴き人の下が下の。ありさまをもよくしろしめすべきは歌なり

かれる田におふるひつちのほに出ぬは世を今さらにあきはてぬとか

○苅テシマウタ田ヘ。又アトヘハエタヒツチノ穗ノデヌノハ。時節モモウ秋ガハテタナリ。世ノ中ヲモウアキハテタレバ今サラ。穗ヲダサウヤウハナイト思ウテノ事カイ。

千秋云。今さらにといふ詞は。三の句の上へうつして心得べし

北山に僧正遍昭とたけがりにまかれりけるによめる　そせい法師

もみぢ葉は袖にこきいれてもて出なむ秋は限と見む人のため

○此ノ紅葉ヲバ袖ヘコキガロシテ入レテ持テ此ノ山ヲ出テ。インデミヤゲニセウ。人ハ定テ。秋ハモウハヤ。シマイヂヤト思フテ居ルデアラウガサ思フテ居ル人ノタメニサ。

寛平ノ御時ふるき歌たてまつれとおほせられければ立田川もみぢ葉ながるといふ歌をかきてそのおなじ心をよめりける　おきかぜ

みやまより落くる水の色見てぞ秋はかぎりと思ひしりぬる

○モシヤ深山ナドニハマダ秋ガ殘ツテアルデモアラウカト思フタガ。此ヤウニ深山カラ。散タ紅葉ノ流レテクル水ノ色ヲ見レバササテハモウイヨ〳〵秋ハシマヒニナツタト思ヒシツタ。

秋のはつるこゝろを立田川に思ひやりてよめる　つらゆき

年ごとにもみぢ葉ながすたつた川みなとや秋の
とまりなるらむ

○毎年〳〵秋ノ紅葉ヲ。筏ヤ船ノヤウニ流シテヤル。立田川ハ川下ノ湊ガ秋ノトマル所デアラウカイ。ソレナラ湊ヘ尋ネテイテ秋ニアヒタイモノヂヤ。クレテ行ノハノコリ多イ秋ヂヤノニ。

ながづきのつごもりの日大井にて
よめる

夕月夜をぐらの山に鳴鹿のこゑのうちにや秋は
くるらむ

○〔一〕ケフハ九月晦日デモウ日モクレ方ニナツタガ。アレアノ小倉山デ鹿ノナク長イ聲ノキレヌウチニ。ハヤ秋ハクレテシマウデ。アラウカ。

同じつごもりの日よめる

みつね

道しらばたづねもゆかむもみじ葉をぬさと手向
けて秋はいにけり

○秋ハモウ紅葉ノチルノヲ道ノ神ヘノ麻ニシテ手向テ。旅立シテ。インデシマウタワイサテモ〳〵ノコリ多イ事カナ。道ヲシツタナラ跡カラ尋ネテナリトモユカウ。

古今和歌集卷六

冬歌

題しらず　よみ人しらず

たつたがは錦おりかくかみな月しぐれの雨をた
てぬきにして

○立田川ヘ紅葉ノ散テ流レルトコロヲ見レバ時雨ノ糸ノヤウナ雨ヲ。竪横ノ糸ニシテ機ヘカケテ錦ヲ織ルト見エル。

冬の歌とてよめる　源ノ宗于ノ朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれ
ぬと思へば

○山里ハイツデモサビシイガ。冬ハサベツシテサビシサガマシタワイ。人ノコヌ事ヲ人目ガカレルト云ヂヤガ。今マデハタマ〳〵見エタ。人目モカレル。草モ枯レタニヨツテサ。

かれぬと思へばゝたゞかれぬればといふに同じ。思ふに意なし此の例多し

題しらず　よみびとしらず

大空の月のひかりし清ければ影見し水ぞまづこ
ほりける

○昨夜ノソラノ月ガキツウサエタニヨツテ。ソノ影ノ見エタ水ガサケサハアレアノヤウニマヅ一バンニコホツタワイ。

千秋云。三の句。菅家萬葉朗詠などに寒ければとあるその方まさりて聞ゆ

夕されば衣手さむしみよし野のよしのの山にみ
雪ふるらし

○此ゴロハユフカタニナレバ。イカウ寒イマ一ツ着ニヤナラヌ。コレハモウ吉野山ヘハ雪ガフツタサウナ。

いまよりはつぎてふらなむわがやどの薄おしなみふれる白雪

○コレカラハツヾイテ段々フレカシ。コチノ庭ノスヽキチオシナビカシテツモツタアノ雪ノケシキキツウオモシロイ。

ふる雪はかつぞけぬらしあしひきの山の瀧つせ音まさるなり

○山ハ雪ガフルヤウスヂヤガ。フルウチニ。ハヤ片一方カラサキエルサウナソノ雪ト見エテ。アノ山カラ流レオチル。川水ガマシテ音ガアレ高ウナツタヲ。

此川にもみぢ葉ながるおく山の雪けの水ぞ今まさるらし

○此ノ川ヘ紅葉ガ流レル。コレマデハ流レテコナンダガ。今アノヤウニ流レテキタノハ川上ノ奥山ノ雪トケデ水ガサマシタサウナソレデ川上ニヨドンデアツタ木ノ葉ガ今流レテクルヂヤ。

故郷はよしの〻山しちかければひと日もみ雪ふらぬ日はなし

○此吉野ノ里ハ高山ガ近イニヨツテ。ケガナイ一日モ雪ノフラヌ日ト云ハナイ。

我やどは雪ふりしきて道もなしふみ分けてとふ人しなければ

○コチノ庭ハ。イチメンニ雪ガツモツタマヽデ道モナイ。フミ分テ尋ネテクル人ガナイヂヤニヨツテサ。通ツテクル人ガアラウナラセメテ道ハシレテアラウニ。

冬の歌とてよめる　紀ノ貫之

雪ふれば冬ごもりせる草も木も春にしられぬ花ぞさきける

○冬ガレデマダメモデヌ草モ木モ。雪ガフレバ。春ニハサタナシノ花ガササイタヲイ。ソウタイ花ハ春ニナツテ咲クモノヂヤニ。

しがの山ごえにてよめる　きのあきみれ

白雪のところもわかずふりしけばいはほにもさく花とこそ見れ

○雪ガドコト云事ナシニ。タヒラ一メンニツモツタレバ。木デハナウテ花ノ咲マイ岩ヘモサ花ガ咲タト見エル。

千秋云。志賀の山ごえは。花の名どころなれば。春の花のことを思ひて。よめるならんか

ならの京にまかれりけるときにや　どれりけるところにてよめる　坂上ノこれのり

みよし野の山のしら雪つもるらし故郷寒くなりまさるなり

○今夜ハ吉野山の雪ガイカウツモルサウナソレデ此ヘンマデガ此ヤウニダン〳〵サムサガマサルヂヤ。

寛平ノ御時きさいのみやの歌合の歌　ふぢはらのおきかぜ

浦ちかくふりくる雪はしら浪の末のまつ山こすかとぞ見る

○カノ奥州ノ末ノ松山ト云所ハ古歌ニ涙モコエナントヨンデアツテ。名ノ高イコトヂヤガ。今コウ海邊近イ所ヘ雪ノフツテクルケシキハ白イ涙ガマコトニソノ末ノ松山ヲサコエルノカト見エル。

餘材此の初句を末の松山のあたりの。浦と見たるにやひがことなり。この浦はいづくにまれ。海の浦なり。

壬生ノ忠岑

みよし野の山のしら雪ふみ分けていりにし人のおとづれもせぬ

○吉野山ヘ深イ雪ヲフミ分テコモツタ人ガ。ソノ後一向ニオトヅレモナイガ。雪ガ段々フカウナツテ便リモシラレヌコトカ。イヨイヨ無事ナカ寒氣ノツヨイトコロナレバ。モシヅラハレナドハセヌカアンジラルヽワイ。

白雪のふりてつもれる山里はすむ人さへや思ひきゆらむ。

○雪ノフツテ段々フカウツモツタ山里ハ。サヅヤ寒ウハアラウシ。サビシウアラウシサウ云所デハ。住デ居ル人マデガ。心ノキエイルヤウニ思フデカナアラウ。雪ハシマイニ消ルモノヂヤガ。ソノ雪ノヤウニサ心マデガ。

雪のふるを見てよめる　凡河内ノみつね

雪ふりて人も通はぬ道なれや跡はかもなくおもひきゆらむ

○雪フリニカウシテ居ル我心ハ。タトヘバ此ノヤウニ雪ガフツテ。人ドホリモタエテ。足跡モナウナツテソコト云筋モシレヌヤウニ消テシマウ道ノヤウナ物ヂヤヤラ。カウシテ居ル心ガキエルヤウナ。

千秋云。三の句の。なれやと結句のらんとのあつかひこの譯をよく味ひてしるべし

雪のふりけるをよみける　清原ノふかやぶ

冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ

○マダ冬ナガラ空カラアノヤウニ花ノ散テクルハ。アノ雲ノアチラハモウ春ヂヤカシラヌ。

雪の木にふりかゝれりけるをよめる　つらゆき

冬ごもりおもひかけぬをこのまより花と見るまで雪ぞふりける

○今ハ冬ガレデマダメモデヌアノ木ナレバ思ヒガケモナイニ。枝ノアヒダカラ。花ノチルト見エルホドニサ。雪ガフルワイ。

やまとの國にまかれりける時に雪のふりけるを見てよめる　坂上ノこれのり

朝ぼらけ有明の月と見るまでによしの〻里にふれる白雪

○カウ夜ノクワラリツトアケタ時ニ見レバテウド有明ノ月ノ殘ツタ影ト見エルホドニ吉野ノ里ヘ雪ガフツタ。

千秋云。朝ぼらけのぼらけは朗明のつゞまりたるなり集中戀三にしの〻めのほがら〳〵と明ゆけばと云々是なり

題しらず　よみ人しらず

けぬがうへに又もふりしけ春霞たちなばみ雪まれにこそ見め

○此ノ雪ハマダキエヌウヘヽモ又ツヾイテフリカサナレ。オツヽケ春ガキテ霞ノタツ時分ニナツタナラ。マレニコソフリモセウケレ。度々ハ見ラレマイホドニ。

梅の花それとも見えずひさかたのあまぎる雪のなべてふれゝば

○〔三〕あまぎる雪ガオシナメデドコモカモフツタレバ。梅ノ花ガ梅ノ花トモ見エヌ。

同ジ白サヂヤニヨツテ。

此歌はある人のいはくかきの本の人まろが歌なり。

梅の花に雪のふれるをよめる　小野ノたかむらの朝臣

花の色は雪にまじりて見えずとも香をだにほへ人のしるべく

○花ノ色ハ雪ニマジツテ。ソレト分レテ見エズトモ。人ガ梅ノ花ヂヤトシルヤウニセメ

テ香ナリトモ。ハツキリトシレルヤウニ。ニホヘ。

雪の中の梅ノ花をよめる　きのつらゆき

梅の香のふりおける雪にまがひせばたれかこと清こと分てをらまし

○梅ノ花ハ色ハ白ウテ。雪ニマガウガ。モシ香マデガ。色ノヤウニツモツタ雪ニマガウナラバ。誰レガ雪ト梅花トチヨウベツ〳〵ニ見分テ折ウゾイ。タレモエ見分ケハスマイ。香ガマガハネバコソ。

雪のふりけるを見てよめる　紀ノとものり

雪ふれば木ごとに花ぞ咲にけるいづれを梅とわきてをらまし

○雪ガフレバ何ンナ木モミナ花ノサイダヤウナワイ。ドレヲ梅ゾヤト見分テ。チラウゾドウモ見分ケニクイ。

物へまかりける人をまちてしはす　のつごもりによめる　みつね

わがまたぬ年は來ぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず

○コチガマチモセヌ來年ノ年ハモウ近ウキタケレドモ。今ジブンノ草ノヤウニカレテヨソヘインダ人ハ。コチガコレホド待ツノニ。マダカヘツテコヌノミナラズ。ネカラオトヅレモセヌ。カレルト云ハヨソヘイテヨリツカヌ事ゾヤゾイ。

としのはてによめる　ありはらのもとかた

あらたまのとしのをはりになることに雪も我身もふりまさりつつ

○〔一〕年ノ終リニナルタビゴトニ雪モフリマサルガ。コチガ身モ段々フルサガマサツテサ次第ニ年ガヨツテイク。アヽコマツタモノヂヤ。

寛平ノ御時きさいの宮の歌合の歌　よみ人しらず

雪ふりて年の暮ぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ

○今マデ露ヤ霜ヤ時雨ガフツテモ。松ハ色ガカハラナンダカ。ソレデモマダ此ウヘ。雪ガフツタラバ。モシ色ガカハルデモアラウカト思フタガ。今此ヤウニ雪ガフツテモ。ヤツハリ色ハカハラズニ。モウ年ガクレタカラハ。サテハ。トウ〳〵シヤウ色ノカハラヌ松ヂヤト云事モコヽデコソ見エタモノナレ。

としのはてによめる

はるみちのつらき

昨日といひけふとくらしてあすか川流れて早き月日なりけり

○昨日今日明日ト云テ一日〳〵トクラシテ。ツイモウ年ノクレニナツタヂヤ。アスカ川ノ水ノ早ウ流レデユクヤウニ。アヽサテサテ早ウタツタ月日ヂヤワイ。

歌奉れとおほせられし時によみて奉れる　きのつらゆき

ゆくとしのをしくも有るかなます鏡見る影さへにくれぬと思へば

○年ノツモルニシタガウテ。次第ニ鏡デ見ル影マデガ。ツムリガ眞ツ白ニナツテ面ハシワガヨツテ。此ノヤウニオイクチテイクト思ヘバ。サテ〳〵暮テユク年ガマアチシウ思ハル、事カナ。

古今和歌集卷七

賀歌

題しらず　　よみ人しらず

我君は千世に八千世にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで

○コマカイ石ガ。大キナ岩ホニナツテ苔ノハエルマデ。千年モ万年モ御繁昌デオイデナサレコチノ君ハ。

わたつ海の濱のまさごをかぞへつゝ君が千年のありかずにせむ

○海ノ濱ノ砂ノ數ヲダン〳〵ニカゾヘテ君ノ御長壽ノ御年ノ數取リニセウ

しほの山さしでの磯にすむ千鳥君が御代をば八千世とぞなく

○シホノ山ノサシデノ磯ニ住デキル千鳥ノ鳴クヲキケバ君ノ御代ヲバヤチヨ〳〵トサ鳴キマス。

わがよはひ君がやちよにとりそへてとゞめおきてば思ひ出にせよ

○ワレラガ此ノ長命ナヨハヒヲ。ソコモトヘ進ゼウホドニコレカラソコモトノ八千世ノヨハヒノ上ヘ。此ワレラガ齡モトリソヘテソコモトニトゞメオカレタラバ。後ニ思ヒダシグサニシテ。我ラガ事ヲ思ヒダサツシヤレ。

打聞よろし。餘材わろし。

仁和ノ御時僧正遍昭に七十の賀給ひける時の御歌

かくしつゝとにもかくにもながらへて君が八千世にあふよしもがな

○朕モドウシテナリトモ共ニ長命デ居テ。此ノ度ノトホリニ又イク度モ〳〵賀ヲイハウテ進ジテ。ソコノ八千歳ノ賀ニドウゾ逢ウヤウニシタイ事カナ。

仁和のみかどのみこにおはしましける時に御をばの八十の賀にしろかねを杖につくれりけるを見てかの御をばにかはりてよめる

僧正遍昭

御をばは御祖母なるべし。おの假字を書べきなり。

ちはやぶる神のきりけむつくからに千年の坂もこえぬべらなり

○此ノ杖ハ一トホリノ物トハ見エヌ。大カタ神ノ御キリナサレタ杖デアラウ然レバ此ノ杖ヲツクカラシテハ。千年ノ坂マデモ。心ヤスウ越ラルヽデアラウト思ハルヽ。

ほり川のおほいまうちぎみの四十ノ賀九條の家にてしける時によめる

在原ノ業平ノ朝臣

櫻花ちりかひくもれおいらくのこむといふなる道まがふがに

○四十ニ御ナリナサレタレバ初老ト申シテ。コレカラ老ガコウト云ヂヤガドウゾコヌヤウニシタイモノナレバ。ソノ老メガ來ル道ヲフミマヨフヤウニ其ノ用意ニ櫻花ヨタントチリアウテソコラガ。闇ウ曇ルヤウニセイソシタラソレデ道ガ闇ウテ來ル老ガフミマヨウテエ來マイホドニ。

がには萬葉に多き詞なり。疑ひのかにはあらず。

さだときのみこのをばのよそぢの賀を大井にてしける日よめる

きのこれをか

此をばも御祖母にておばなるべし。

かめのをの山のいはねをとめて落つる瀧の白玉

ちよの數かも

○コノ大井ノ近所ナ龜ノチノ山ノ岩ノネニソウテカチル瀧ノ白玉ノ多イ數ハ御壽命ノ千年ノ數カヤレ。山ノ名サヘメデタイ龜山ナレヤ。

さだやすのみこのきさいの宮の五十の賀たてまつりける御屏風に櫻の花のちるしたに人の花見たるかたかけるをよめる

藤原ノ興風

いたづらに過る月日はおもほへで花見てくらす春ぞすくなき

○ナントモナシニタヾ過テイク月日ハ。多ノヤラスクナイヤラ。何ントモ思ハズニウカウカトシテクラスガ。此ノヤウニ面白イ花チ見テクラス春ハサキツウ日數ガスクナウ思ハルヽ。

餘材に春のすくなきにおどろきて。思へば過にし月日は多かりけりとはじめておぼゆる意なるべしといへるはかなはず。

もとやすのみこの七十の賀のうしろの屏風によみてかきける

きのつらゆき

春くればやどにまづさくうめの花君が千年のかざしとぞ見る

○春ガクレバ此ノ御庭ヘマヅ一バンニサク梅ノ花ヲ君ガ千年マデノ春ノ御カザシヂヤトサ存ジマスル。

素性法師

いにしへにありきあらずはしらねども千年のためし君に始めむ

○千年モイキタ人ハ。昔モアツタカナカツタカハシラヌケレドモ。タトヒ今マデニハサウ云人ハナイニモセヨ千年イキルタメシチ君カラ始メナサルデアラウ。

ふして思ひおきてかぞふる萬代は神ぞしるらむわが君のため

○吾君ノ御年ノ數ヲドウゾ萬年マデモト。窠テモオキテモ願ヒマスルコトハ人ノ力ニコソ及バズトモ。神ガサ其通リニ御ハカラヒナサレウワサ我君ノタメニ。

神ぞしるらんは萬葉に神ししらさんなどある類にてしるとはは唐ひおこなふをいふなりたゞ常にいふしるの意のみにあらず

藤原ノ三善が六十ノ賀によみける

在原ノしげはる

つるかめも千年ののちはしらなくにあかぬ心にまかせはてゝむ

○鶴龜ハ千年ノヨハヒチタモツ物ナレド。ソレモソノ千年ノ後ハドウアルヤラシラヌガ貴樣ハ千年ゴザツテモマダソレデハ十分ニハ存ゼネバソノウヘモマダ存分ニ長ウ久シウ御無事デオキマセウ。

此歌はある人在原ノときはるがともいふ。

よしみれのつれなりがよそちの賀にむすめにかはりてよみ侍ける

そせいほうし

萬代をまつにぞ君をいはひつる千年の陰にすまむと思へば

○君ハ萬年ノ御壽命ヲ待ツナレバ。ソノマツト云名ノ松デサオイハヒ申シマスル。サウシテソノ千年モアル松ノカゲニ鶴ノスムヤウニワタシモ君ノ千年ノオカゲヲ蒙ツテ共ニ長ウ居マセウト存ジマスレバサ。

餘材につるといふ辭に。鶴をもたせりといへり。まとに下の句のとば。鶴によれりと聞えたり。

ないしのかみの右大將藤原ノ朝臣の四十ノ賀しける時に四季のゑかけるうしろの屏風にかきたりけるうた

春日野にわかなつみつゝ萬代をいはふこゝろは

神ぞしるらむ

○御賀ノタメニカウ春日野デ。若菜ヲツミツミ心ノ内デ御壽命ヲ萬年マデトオイハヒ申ス心願ノホドハ。御先祖ノ此ノ春日ノ御神ガサ。御納受ナサレテ御守リナサルヽデゴザラウ。

しるらんの意上にいへるが如し。

山高み雲ゐに見ゆるさくら花こゝろのゆきてをらぬ日ぞなき

○高イ山デ雲ノアタリニ見エルアノ櫻ノ花ガキツウヨイ花ヂヤガ。山ガ高サニドウモアソコヘハエイカネバ。アヽドウゾ一枝折テキタイ物ヂヤト思ウ心ガ。毎日アノ山ヘイテアノ櫻ヲヲラヌ日ハサナイ。

夏

めづらしき聲ならなくにほとゝぎすこゝらの年をあかすも有哉

○イツノ年モ同ジ聲デナケバ。ナニモメヅラシイ聲デハナイニ。アノ郭公ハオホクノ年毎年聞テモサテモ〳〵マア聞アカヌ事カナ。

打聞こゝらの説わろし。

秋

すみのえの松を秋風吹くからにこゑうちそふるおきつ白浪

○住ノ江ノ松ヲ秋風ガサアヽトフクトソノママデ。ドオヽト涙ノ音ヲウチソヘル。

千鳥なくさほの川霧たちぬらし山の木葉も色まさりゆく

○佐保山ノ木ノ葉モ段々色ガマサツテキタ。此トホリナレバ今マデニモウ〔一〕此佐保川ノ霧カタツタサウナ。

千秋云。露時雨のみたらず霧にも木の葉は色づく物なる故也。かゝるべきなり

秋くれど色もかはらぬときは山よその紅葉を風ぞかしける

○秋ニナツテモ木ノ葉ノ色ノカハラヌト云。常磐山ヂヤニヨツテ此山ニハ紅葉ハナイニヨリノ山ノ紅葉ヲ風ガ吹テ來テサ。此ノ常磐山ヘ借スワイ

冬

しら雪のふりしく時はみよしのゝ山下風に花ぞちりける

○此ノ吉野ノアタリヘドコモカモ白イ雪ガフツタ時ニハ山ノ風デ麓ハ花ガサ散ルワイ。

春宮のうまれ給へりける時にまゐりてよめる

典侍藤原ノよるかの朝臣

峰高き春日の山にいづる日のくもる時なくてらすべらなり

○春日神ノ御末ノ藤原氏ノ中デモ此上ヘモナイ御方ノ姫君ノ御腹ニデキマシナサツタ若宮樣ナレバ。テウドソノ春日山ノ高ウウチハレテ曇所ノナイヤウニ御行末イツマデモ。クモリナウ天下ヲ御照シアソバスデアラウト存ジラレマス。

古今和歌集卷八

離別歌

題しらず　　在原ノ行平朝臣

立わかれいなばの山の峯におふるまつとしきかば今かへりこむ

○今此方ハ京ヲ立テ別レテ因幡國ヘ下ルガ。其ノ國ノイナバ山ノ峰ニハエテ松ノ名ノトホリニ。ソナタガ此方ヲ待ツト聞タナラ。ヂキニ又カヘツテカウワサテ。

よみ人しらず

すがるなく秋の萩はら朝たちて旅ゆく人をいつとかまたむ

○朝立テ旅ユク人ニ〔一〕萩ノ咲テアル此ノ秋ノ野デ今ワカレルガ。オカヘリヲバイツト思ウテマタウゾ。ソレヤキツウ遠イ事デアラウ。

打聞すがるなくの說うけがたし。

かぎりなき雲ゐのよそにわかるとも人を心におくらさむやは

○今カウ別レテ限リモナイ遠イ。雲ヨリアチラノ國ヘワシハイクヂヤガソレデモ此ノ故郷ノ人ノ事ハ常住忘レルマモナシニ思ウテ行ウヂヤニヨツテ。心ノ内ハドコマデモイツショニツレダツテイクモ同ジ事ヂヤワサ身コソカウシテ今別ルレ心ノ内デハ。貴樣ダチチアトヘ殘シテオカウカイ心デハツレダツテイクワサテ。

打聞結句の說いとわろし。餘材よろし。

をのゝちふるがみちのくのすけにまかりける時にはゝのよめる

たらちねのおやのまもりとあひそふる心ばかりは關なとがめそ

○ソナタノ身ノ守リヂヤト思ウテ。添ヘテヤル此ノ母ガ心バカリヲバ行サキノ關所〳〵デモドウゾトメテ下サルナ。トボシテヤツテ下サレ。

さだときのみこの家にてふぢはらのきよふが近江のすけにまかりける時にうまのはなむけしけるよよめる　　きのとしさだ

けふわかれあすはあふみと思へども夜やふけぬらむ袖の露けき

○今日別レテ明日ハヂキニ又アハレルホド近イ近江國ヂヤトハ思ヘドモ。カハツタモノデ別レトイヘバ悲シイ。アヽ夜ガイカウフケタヤラ袖ガ露デヌレタワイ。イヤ〳〵コレヤ。涙ヂヤワイ。

こしへまかりける人によみてつかはしける

かへる山ありとはきけど春霞たちわかれなば戀しかるべし

○北國ニハカヘル山ト云山ガアルト云事ナレバ其名ノトホリニオツヽケ御無事デカヘラツシヤラウトハ思ヘド。ソレデアノ霞ノ立テアル方ヘ立テ別レテイカシヤツタナラバ戀シカラウ。

人のうまのはなむけにてよめる　　きのつらゆき

をしむから戀しきものをしら雲のたちなむ後は何ごゝちせむ

○ナゴリヲシウ思ヘバ。マダタヽツシヤラヌウチカラ此ヤウニ戀イ物ヲ〔三〕立テイカシヤツタアトデハ。ドノヤウナコヽチガスルデアラウ。

ともだちの人の國へまかりけるに
よめる　在原ノしげはる

わかれてはほどをへだつと思へばやかつ見ながらにかねて戀しき

○別レテカラハ遠イ道ヲヘダテヽ。久シウアハレヌ事ヂヤト思ウユエカシテ。マダカウシテ見テ居ナガラ。カタ一方デハ。ハヤ今カラモウ戀シウ思ハルヽ。

あづまのかたへまかりける人によみてつかはしける　いかこのあつゆき

思へども身をしわけねばめに見えぬ心を君にたぐへてぞやる

○ナンバウカナゴリヲシウ思ヘドモ。人ノ身ハ二ツニ分ラレヌ物デドツイテハエイカネバ。目ニハ見エタケレドモ。心ヲサ其ノ方ヘソハセテヤリマスヽ

相坂にて人をわかれける時によめる

千秋云。人をわかるといふも。人にわかるといふと同じことなり。しかるを打聞に。人の旅行に別るゝには人をといひ。我行くには人にわかるといふといへるはあたらず。萬葉集に。くやしく妹をわかれ來にけり。又たらちねの母を別れてまことわれ旅のかりほにやすくねんかも。これらわがゆくときの別れなり

なにはのよろづを

あふ坂の關しまさしき物ならばあかず別るゝ君をとゞめよ

○アフ坂ト云ガマサシク其ノ名ノ通リヲガヒナイ物ナラバ。人ニ逢ウハズヂヤ。別レウハズハナイ。スレヤ殘リ多イニ別レテユク此人ヲ。アヒカハラズ逢ウヤウニコノ關デトヾメヨ。

餘材まさしきといへるにかなはず。

千秋云。餘材抄は關といへる詞になづみて二三の句を說たれども。關にて人をとゞむるは常のことなるを。まさしきものならばなどことゝしくいふべきにあらず

題しらず　よみ人しらず

から衣たつ日はきかじ朝露のおきてしゆけばけぬべき物を

○〔一〕御立チ日ヲバ明日ヂヤト云フ事ハ。ワシヤモウ聞キマスマイ。ワシヲステヽオイテ御出ナサル事ナラバ。明日御立ヂヤト聞テハ。明日ノ朝ニナツテナラ。ワシヤモウ露ノキエルヤウニアラウト存ジマスモノ。

此歌はある人つかさを給はりてあたらしきめにつきて年へてすみける人をすてゝたゞ明日なんたつとばかりいへける時にともかうもいはでよみてつかはしける。

ひたちへまかりけるときにふぢはらのきみとしによみてつかはしける　寵

あさなけに見べき君とし頼まねば思ひたちぬるくさ枕なり

○毎日アハレル公利樣ヂヤトハ頼マレヌ。ミヅクサイ御心ナレバソレユエワシヤ存ジ立ツテ常陸ヘ下リマスル今度ノ旅デゴザリマス。

きのむねさだがあづまへまかりける時に人の家にやどりてあかつき出たつてまかりまうししければ女のよみていだせりける　よみ人しらず

えぞしらぬ今こゝろみよ命あらば我やわするゝ君やとはぬと

○ガマヘハワタシヲイツマデモ忘レハセヌトガツシヤルケレドモ、ワシハドウモソレハサ。エガテンセヌ。末デワシガ忘レルカ。ガマヘガ忘レテトウテ下サレヌカハ。命ガアツテイキテ居タナラ。ガツツケ知レウホドニタメシテゴラウジヨ。ワシハガマヘヲ

イツマデモワカレハスマイガ。オマヘハ追ツ付ケワタシチバ御忘レナサルデアラウワサ。

あひしりて侍ける人のあづまのかたへまかりけるをおくるとてよめる　ふかやぶ

雲ゐにも通ふこゝろのおくれねばわかると人に見ゆばかりなり

○貴樣ガ今度ドレホド遠イ所ヘイカシヤツテモ。拙者ガ心ハ。イツモソノ貴樣ノ方ヘカヨウテ。コヽニ殘ツテ。居ネバヒツキヤウ此ノ身ガ。今別レテアトニ殘ルト見ラレルバカリヂヤ。心ハ別レハセヌ。

友のあづまへまかりける時によめる　よしみねのひでをか

白雲のこなたかなたに立別れ心をぬさとくだく旅かな

○雲ノアチコチヘ分レテイクヤウニ。今度遠イ間ダチヘダテヽ別レル悲シサニ。今ハナムケニ進ズル此ノ手向ノ麻ノコマカナヤウニ拙者ハイロ〳〵ニ心チクダイテ。サテサテナシイ御旅立デゴザル事カナ。

千秋云。ぬさとて。五色の絹などをこまかにきりて袋にいれて。道の神に手向の料に。旅だつ人にをくることあり。ぬさ袋といふこれなり

みちのくにへまかりける人によみてつかはしける　つらゆき

しら雲の八重にかさなるをちにても思はむ人に心へだつな

○ハルカニ雲ノイクヘモヘダヽツテアルアチラノ國デアラウトモ。拙者ハ貴樣ノ事ヲ。タエズ思ウテ居ヤウホドニ。タトヒ雲ハヘダテルトモ。心ハヘダテサツシヤルナヤ。

人をわかれける時によみける

わかれてふことは色にもあらなくに心にしみてわびしかるらむ

○色コソ物ニシム物ナレ。別レト言ハ色デモナイニドウ云コトデ此ヤウニ心ニシミ〳〵トツラウ思ハレルヤラ。

あひしれりける人のこしの國にまかりて年へて京にまうできて又かへいける時によめる　凡河内ノ躬恒

かへる山なにぞは有てあるかひは來てもとまらぬ名にこそ有けれ

○貴樣ノ又下ダラツシヤル國ニアルカヘル山ハヨソヘイタ人ノカヘルト云名ヂヤト思ウタニ。ソノカヘル山ハ。何ンノヤクニタツ事ゾ。サウ云フ山ガ有テモアルカヒハナイアルカヒト云ハ。久シブリデ來テモ。京ニハ居トマラズニ。又アチヘカヘルト云名デコソアレ。

こしの國へまかりける人によみてつかはしける

よそにのみこひやわたらむ白山のゆき見るべくもあらぬ我身は

○今カラハヨソニバツカリオナツカシウ思ウテ。月日ヲタテルデゴザラウカ。アノハウヘ參ツテ御目ニカヽラレウトモ思ハレヌワシガ身ナレバ。

(ゆきて見るといふをを白山の雪を見るといひかけたり。)

おとは山のほとりにて人をわかるとてよめる　つらゆき

おとは山こだかく鳴てほとゝぎす君が別れを惜むべらなり

○コノオトハ山ノ高イ木ノ上ヘデアレホトヽギスガ高ウ鳴キマス郭公モアノトホリ鳴テ

貴様ノ御別レチナゴリチシウ思ウデアラウサウ聞エル。拙者ドモヽ同ジ事サ。

ふぢはらののちかげがから物のつ（唐物シラベノ役ニ仰付ラレテ西國ヘ）
かひになが月のつごもりかたにま
かりけるにうへのをのこどもさけ
たうびけるついでによめる
ふぢはらのかねもち

もろともに鳴てとゞめよきり〴〵す秋の別れは
惜くやはあらぬ

○トモ〴〵ニ鳴テドウゾオトメ申セキリ〴〵スヨ今マ秋別レノ時分ニオワカレ申スハコレホドナゴリチシイニ。ソチハナゴリチシウハナイカイ。

平ノもとのり

秋霧のともに立出でわかれなばはれぬ思ひにこひや渡らむ

○アノ霧ノ立ツヤウニ貴様モ共ニ立テ出テイカシヤツテ御別レ申シタナラワシハ今カラハアノ霧ノハレヌヤウニ。心ガハレヌ。イツモオナツカシウ思フテタテルデゴザラウカイ。

源ノさねがつくしへゆあみむとて
まかりける時にやまざきにてわか
れをしみけるところにてよめる
しろめ

いのちだに心にかなふ物ならば何か別れのかなしからまし

○命サヘ心マカセニナツテ。死ナズニ居ラルルモノナラ。ナニガサテ御別レ申スガコレホドニ悲シカラウゾイ。人ノ命ハ御歸ノ時分マデノコトモ知レヌニヨツテサ。悲シイワイノ。

山ざきより神なびのもりまでおく
りに人々まかりてかへりがてにし
てわかれをしみけるによめる
みなもとのさね

人やりの道ならなくに大かたはいきうしといひていざかへりなむ

○人ノサセル旅デハナイ我心カライク旅ヂヤニ。タイガイナ事ナラモウイキトモナイト云テドレヤカヘラウゾ。

いまはこれよりかへりねとされが
いひけるをりによみける
藤原ノかねもち

したはれてきにし心の身にしあればかへるさまには道もしられず

○ドコマデモイツショニイキタイトシタハレテ。コレマデキタ心ニ着イテアル我身ヂヤニソノ心ガドコマデモ貴様ニツキソウテ參レバ。コレカラ歸ルトキニハ此ノ身ハ心トハナレテ心ノナイヌケガラヂヤニヨツテカヘリシナニハ道モエシリマセヌ。

藤原ノこれをかゞむさしのすけに
まかりける時におくりに相坂をこ
ゆとてよみける
つらゆき

かつこえて別れもゆくかあふ坂は人だのめなる名にこそ有けれ

○此坂ハ逢坂ナレバ人ニ逢ウハズヂヤニ。此坂ヲコエツヽソシテマア別レテイカツシヤル事カ。コレデハ逢フ坂ト云名ハ。頼モシサウニ聞エテ頼ミニナラヌサ名ヂヤワイノ。コレガ人ダノメト云モノヂヤ。人ダノメトハ人ニ頼モシウ思ハセテオイテ。ソシテ其通リデモナウテムダナ事ヲ云ヒマス。

千秋云。かつとは。逢阪をこえながらかつわれゆくかといへる意にて逢と別るゝと。まじはることにいへることばなり

おほえのちふるがこしへまかりけ
るうまのはなむけによめる

藤原ノかれすけの朝臣

君がゆくこしのしら山しらねどもゆきのまに
まに跡はたづねむ

○貴様ノ下ラッシャル北國ノ道ハ拙者ハ不案内ナレドモ。白山ハモトヨリノ事。惣體雪ノ深イ國ヂヤト云事ナレバ。貴様ノトホッテイカツシヤツタソノ雪ノ跡ヲタヅネテ拙者モアトカラ參ラウ。

人の花山にまうできてゆふさりつ
かたかへりなむとしける時によめる

僧正遍昭

夕ぐれのまがきは山と見えなゝむよるはこえじ
とやどりとるべく

○夕カタノ此庭ノマガキハ。山ト見エレバヨイニ。サウシタナラ。夜ルハドウモ山ハコエラレマイト思ウテ。アノイヌル人モ。コヨヒハコヽデトマルヤウニ。

山にのぼりてかへりまうできて人
々別れけるついでによめる

幽仙法師

わかれをば山の櫻にまかせてむとめむとめじは
花のまに〳〵

○サテカウ御別レ申スハキツウ御殘念ナガ。ト云テ拙僧ガナンボオトメ申シタトテトマリハナサレマイホドニ。コレハナンデモコノ山ノ櫻ニウチマカセテ。トメウトモトメマイトモ。アノ花シダイニ致サウワイ。オノガノガタヨモヤ。アノ花チフリモキツテエカヘリハナサルマイワサテ。

うりんぬんのみこの舍利會に山に
のぼりてかへりけるに櫻の花の本
にてよめる　僧正へんぜう

山風にさくら吹きまきみだれなむ花のまぎれに
立とまるべく

○山風ニ此ノ櫻ノ花ヲ吹卷テチリミダレヨカシ。ソシタラ此ノ花ノチリミダレルノニマギレテ。カヘル道ガシレヌト云テ。君ガオトマリナサルヤウニ。

幽仙法師

清ことならば君とまるべくにほはなむかへすは花
のうきにやはあらぬ

○トテモ見事ニ咲クホドナラバ。君ノ殘リ多ウ思召テオトマリナサルヤウニ咲タガヨイソレニ君ヲオカヘシ申ノハ花ノキコエヌノデハナイカ。花ノキコエヌノヂヤワサオカヘシ申サウヤウハナイワサテ(結句又)花ヨソチガタメニモウイデハナイカ。ソチガタメニモウイ事ヂヤワサテ。

仁和のみかどみこにおはしましけ
る時にふるの瀧御らんじにおはし
ましてかへり給ひけるによめる

兼藝法師

あかずして別るゝ涙たきにそふ水まさるとや下
は見ゆらむ

○ノコリ多ウテ御別レ申ス拙僧ガ此涙ガ淵ニソウテ流レル。コレデハ川下デハ。水ガマシタト見エルデガナアラウ。

かむなりのつぼにめしたりける日
おほみきなどたうべて雨のいたう
ふりければゆふさりまで侍りてま
かり出侍りけるをりにさかづきを
とりて　つらゆき

秋萩の花をば雨にぬらせども君をばましてをし
とこそおもへ

○アノ萩ノ花ヲコノ雨ニヌラシテシヲラカシテシマウノハ。キツウ惜ウ思ヒマスルレトモマダソレヨリモ貴様ノ此雨ニヌレテ御歸ナサルニ御別レ申スノガサ。ナホサラ御名

殘ヲシイコトヂヤト存ジラレマスワイノ。マアマヒトツアガリマセ。ソノウチニ雨モヤミマセウワサテ。

とよめりけるかへし　　兼覽王

をしむらむ人の心をしらぬまに秋の時雨と身ぞふりにける

○ソノヤウニ別レヲ惜ンデ拙者ヲ御深切ニ思ウテ下サレウトハ今日マデ夢ニモ存ゼナンダ。サウシタ貴樣ノ御志ヲマダ存ゼナンダウチニ。拙者ガ身ハサ。此秋ノ時雨ノフルト云ヤウニ舊ウナツテモウラチノアカヌ物ニナリマシタ。マソツト早ウ若イウチニ其御志ヲ知ツタラ。別シテ大慶ニゴザラウニアア殘念ナ。

かねみのおほきみにはじめて物がたりして別れける時によめる　　一二四　　みつね

別るれどうれしくも有かこよひより逢見ぬさきに何を戀まし

○御別レ申スハナゴリヲシウハアレド。サテサテマア嬉シイコトカナ。ナゼニト申スニ今夜ヨリサキ。イマダ御近付キニナランダウチニハ。何ヲオナツカシウハ思ヒマセウゾ。今夜始メテ御近付キニナリマシタレバコソ御別レ申スナレ。スレヤ別レノナゴリヲシウ思ハレルヤウニ御近付ニナツタ所ガナンボウカ嬉シイ事ヂヤワサテ。

題しらず　　よみ人しらず

あかずして別るゝ袖のしら玉は君が形見とつゝみてぞゆく

○ノコリ多ウテ別レル袖ノ涙ハトント玉ノヤウニ落ルガ。此ノ玉ヲバ。ソコモトノ形見ヂヤト存ジテ卽チ此袖ニツヽンデ參ル。

かきりなく思ふ涙にそぼちぬる袖はかわかじ逢はむ日までに

○此別レヲナンボウカ悲シウ思ウテ此ヤウニ泣ク涙ニヒツタリトヌレタコノ袖ハ。又逢フ日マデハ乾キハスマイ。ナゼニト云ニ。コレホドニ悲シウ思ウ事ヂヤニヨツテ。イツマデモ忘レラレマイホドニイツヲ限リト云事モナウ泣テヌラスデアラウニヨツテサ。

かきくらしことはふらなむ春雨にぬれぎぬきせて君をとゞめむ

○コノ春雨ハトテモフルホドナラバ。マツクラニナツテマソツトツヨウフツタガヨイ。ソシタラ此雨ヲイヒタテニシテ別レテイク君ヲトメウニ。

しひてゆく人をとゞめむ櫻花いづれを道とまどふ迄ちれ

○ナンボトメテモトマラズニシヒテ別レテイク人ヲトメウニ。櫻花ヨ道ノシレヌヤウニチリウヅンデ。ドレガ道ヂヤトアノ人ノ迷フテエユカヌホドチツテクレイ。

しがの山ごえにていし井のもとにて物いひける人の別れけるをりによめる　　つらゆき

むすぶ手のしづくににごる山の井のあかでも人に別れぬる哉

○惣體コノヤウナ山ノシミヅハ。淺イモノヂヤニヨツテ。飲ウト思ウテスクヘバ。ソノ手カラ落ルシヅクデヂキニ濁ルニヨツテ。オモウヤウニスクウテノマレヌ飲タラヌモノヂヤガ。テウドソノ通リニ。サテ〳〵マア殘リオホイニアノ人ニワカレタコトカナ。

道にあへりける人のくるまに物をいひつきてわかれけるところにて

よめる　　とものり

下の帶のみちはかた〳〵わかるとも行めぐりても逢はむとぞ思ふ

○帶ヲスルニ。ウシロヘアテタ所デハ。端ノカタ兩方ヘヨカレルケレドモ。前ヘマハシテムスブトコロデハ。又イキアウモノヂヤガソノ通リニ今イク道ハカウベツ〳〵ニヨカレテイクトモマタソノウチドウシテナリトモ。出合ウヨサテ。

古今和歌集卷九

羇旅歌

もろこしにて月を見てよめる　　安倍ノ仲麿

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出し月かも

○今カウ空ヲヅヽトハルカニ見渡セバ。アレアレ。海ノ上ヘ月ガデタアヽアノ月ハ。故郷ノ三笠山ヘ出タ月デアラウカイマア。

此歌はむかしなかまろをもろこしに物ならはしに遣はしたりけるに。あまたのとしをへてえかへりまうでこざりけるを。此の國より又つかひまかりいたりけるにたぐひてまうできなんとて出たりけるに。めいしうといふところのうみべにてかの國の人のはなむけしけりよるになりて。月のいとおもしろくさし出たりけるを見て。よめるとなんかたりつたふる。

おきの國にながされける時に船にのりて出たつとて京なる人のもとにつかはしける　　小野ノたかむらの朝臣

わたの原八十島かけてこぎ出ぬと人にはつげよ海士の釣舟

○ユクサキハイクラトモナク段々ニアマタアル島々ヲ過テイクベキ海上ヘ今出船シタト云事ヲ。故郷ノ人ニハシラシテクレイ。コレアノアチヘ歸ツテイクアマノ釣舟ヨ。

餘材結句の説わろし。　　題しらず　　よみびとしらず

みやこ出てけふみかの原いづみ川川風寒しころもかせやま

○今日京ヲ出テ此ミカノ原ヘキテアノ向ヒニ見エル山ハ。鹿背山ヂヤガ此イヅミ川ノ川風ガキツウ寒イニ。アノカセ山ヨオレニキ

ルモノヲ一ツ借セ山。

千秋云。二句のいひかけ。鹿背山を見とのいひかけなり。譯はそのこゝろなり

ほの〴〵とあかしの浦の朝ぎりに島がくれゆく船をしぞ思ふ

○夜ノウス〳〵トアケテクル時分ニ。海上カラミレバアノ向ヒナ明石ノ浦ガ。朝ギリデカクレテ見エヌヤウニナツテイクアノケシキヲ遠ウヨソニミテ過テイク。此船中ノ心ハサテモ〳〵心ポソイモノガナシイ事ヂヤ

此の歌はある人のいはくかきのもとの人まろがなり。此の歌は。打聞に出されたるごとく。今昔物語に。小野の篁の卿の歌とてのせたるぞよろしかるべき。但し明石にて海をながめてよめるとあるは。下の句を心得あやまりておしあてにいへる詞なり。今昔物語古本。廿四の卷に出たり。餘材四の句の說たがへり。すべて島がくれといふことを。よく解得たる人なし。島がくれとは。海をへだてたるところの。かくれて見えぬをいへり。かならずしも島にはかぎらずこの歌にては朝霧にかくれて明石の浦のみえぬを。海の沖よりいへるなり。

千秋云。島がくれゆく舟とは、船の島がくれ行如く聞ゆれど。さにあらず。朝ぎりに明石の浦のかくれゆくを。見つゝゆく舟といふ意なり。この所むかしより人みなまどへり

あづまのかたへ友とする人ひとり
ふたりいざなひていきけり三河ノ
國八ッ橋といふところにいたれり
けるにその川のほとりにかきつば
たいとおもしろくさけりけるを見
て木の蔭におりゐてかきつばたと
いふいつもじを句のかしらにする
て旅の心をよまむとてよめる

在原ノ業平ノ朝臣

から衣きつゝなれにしつましあればはるゝきぬる旅をしぞ思ふ

○〔一〕きつゝ故郷ニナジンダ妻ガアレバ。別レテハルゝ〳〵ト來タコノ旅ガサコヽロボソウ物ガナシウ思ハル。

むさしの國とししつふさの國との中にあるすみだ川のほとりにいかりてみやこのいと戀しうおぼえければしばし川のほとりにおりゐて思ひやればかぎりなくとほくもきにけるかなと思ひわびてながめをるにわたしもりはや舟にのれ日もくれぬといひければ船にのりて渡らむとするにみな人ものわびしくて京におもふ人なくしもあらずさるをりに白き鳥のはしとあしとあかき川のほとりにあそびけり京にも見えぬ鳥なりければみな人見しらず渡し守にこれは何鳥ぞととひければこれなむみやこ鳥といひけるをききてよめる

名にしおはゞいざこととはむみやこ鳥わが思ふ人はありやなしやと

○都ト云事ヲ名ニツイテ居ルナラバ。定メテ京ノ事ヲヨウ知テ居ルデアラウホドニ。ドレヤモノトハウ都鳥ヨ。コチガ思ウ人ハ無事デキルカドウヂヤ。

題しらず　よみ人しらず

北へゆく雁ぞなくなるつれてこし數はたらでぞかへるべらなる

○北ノ方ヘイヌル雁ガサアレマア鳴クワイノワシバカリカト思ヘバアノ雁モツレダツテキタ友ノ數ハタラヌヤウニナツテサ歸ルデアラウ。ソレデアノヤウニ泣テイヌルト見エル。

此歌はある人男女もろともに人の國へまかりけり。をとこまかりいたりてす。なはちみまかりにければ。女ひとり京へかへりける道に。歸る雁の鳴けるを聞てよめるとなんいふ。

あづまのかたより京へまうでくると
て道にてよめる　お　と

山かくす春のかすみぞうらめしきいづれみやこ

のさかひなるらむ

○四ドノアタリガ京ヂカクノ山ヂヤヤラ。片時モ早ウカヘリタウ思ヘバモウ京ノ山ガミエルカ〳〵ト氣ヲ付ケテミルケレド。ドレヂヤヤラシレヌアノヤウニ山ヲカクシテ。ハツキリトミセヌ春ノ霞ガサキコエヌ霞ヂヤ。

こしの國へまかりけるときしら山を見てよめる

きえはつる時しなければこしぢなるしら山の名は雪にぞありける

○ノコラズ消テシマウ時ト云ハナクテ。イツデモアノヤウニ雪ガアレバ此ノ北國海道ノ白山ノ名ハサ雪ノ事ヂヤワイ。

打聞說名はといへるにかなはず。

あづまへかりける時道にてよめる

つゆ　ゆき

糸による物ならなくに別れ路のこゝろぼそくもおもほゆるかな

○ナンデモ糸ニヨレバ細ウナルヂヤガ。カウシテ故郷ヲ別レテキタ旅ノ道ハ。ソノヤウニ糸ニヨルモノデハナイノニ。サテ〳〵マア心ボソウ思ハルヽ事カナ。

かひの國へまかりける時道にてよめる　みつね

夜を寒みおくはつ霜をはらひつゝ草の枕にあまたゝびねぬ

○此ノゴロハ夜ガ寒サニ。草ヘハ霜ガフツテアルナイク夜カソノ霜ヲハラウテハネ。ハラウテハネ。野ノ草ヲ枕ニシテ。モウハヤ何度モ何度モネタ。

たぢまの國のゆへまかりける時にふたみの海といふ所にとまりて夕きりのかれいひたうべにけるとも

に有ける人々うたよみけるついでによめる　藤原ノかねすけ

夕づくよおぼつかなきを玉くしげふたみのうらはあけてこそ見め

○〔三〕此ノ二見ノ浦ノケシキチミタイモノヂヤガ。コヨヒハ宵月夜デ。マダ影ガウスケレバ。ハツキリトハミエヌニ、夜ガ明テカラサトクトミヤウ。

これたかのみこのともにかりにまかりける時にあまの川といふところの川のほとりにおりゐてさけなどのみけるついでにみこのいひけらくかりしてあまのかはらにいたるといふ心をよみてさかづきはさせといひければよめる　ありはらのなりひらの朝臣

かきくらしたなばたつめにやどからむ天の河原に我はきにけり

○此方ドモハ今日ハ一日狩ヲシテアルイテ。コレハ〳〵天ノ川原ヘキタワイ日モクレタニ。サテヨイ所ヘキタ。天ノ川ナレヤ。タナバタニ宿ヲカラウ。

みこ此歌をかへすがへすよみつゝかへしえせずなりにければともに侍りてよめる　きのありつね

一とせに一たびきます君まてばやどかす人もあらじとぞ思ふ

○イヤ〳〵天ノ川デハ一年ニ一度ヅヽ御出ナサル彦星ト云御方ヲ待ツヂヤニヨツテナカナカ外ノ者ガ宿カラウト云タトテモ。借ス人モアルマイトサ存ズル

朱雀院のならにおはしましける時に手向山にてよめる　すがはらの朝臣

此たびはぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに

○此ノ度ノ旅ハ御供ユヱ。ヌサモ得用意致サナンダソレユヱ。神ノ御心マカセニト存ジテ卽チコノ山ノ紅葉ノ錦ヲソノマヽ手向マスル。

素性法師

たむけにはつゞりの袖もきるべきに紅葉にあける神やかへさむ

○神ヘノ手向ニハ。出家ノ身モ此ツゞリノ袖ナリトモ切リキザンデ麻ニシテ手向ルハズナレドモ。コノヤウニ見事ナ紅葉ノ錦ヲハラ一ツパイ見テ御座ナサルヽ神ナレバ。此ヤウナキタナイツゞリノ切レナドハ御受ケハナサルマイ、御返シナサルデガナゴザラウ。ソレユヱサシヒカヘテ手向マセヌ。

古今和歌集卷十

物ノ名

うぐひす　藤原ノとしゆきの朝臣

心から花のしづくにそぼちつゝうぐひすとのみ鳥のなくらむ

○オノガ心カラスキデ花ノ雫ニヌレナガラツライコトヂヤ乾カヌト云テ鶯ノヒタスラアノヤウニナクノハドウ云コトヤラ。

ほとゝぎす

くべきほどときすぎぬれや待わびてなくなる聲の人をとよむる

○郭公ガ待ツ妻ノ來ベキ。ジセツガ過テコヌカシテ。マチカネテナクアノ聲ガ人ヲヒツクリサセル。時鳥のうへの戀の歌なり。餘材わろし。打聞よろし但し結句の說はわろし。

うつせみ　在原ノしげはる

浪のうつせみれば玉ぞみだれけるひろはゞ袖にはかなからむや

○涙ノウツ川ノ瀨ヲミレバ。水玉ガ。トントマコトノ玉ガサチルヤウナワイアノ玉ヲヒロウタナラ。ホンノ玉デハナイホドニ。袖ヘ入レウトシタナラヂキニ消ルデアラウカ。

餘材わろし。

かへし　壬生ノ忠岑

たもとよりはなれて玉をつゝまめやこれなむそれとうつせみむかし

○貴樣ハ袖ヘ入レウトシタナラヂキニキエルデアラウガト云ハシヤルガ。デモ袖ヲオイテ外ニ玉ヲツヽマウ物ハナイハサテ。スレ

ヤ貴様ノ袖ヘツンデコレガサソレデゴザルト云テ。ワシガ袖ヘウツサツシヤレ。ワシモミヤウワサ。

打聞よろし。餘材わろし。

うめ　よみ人しらず

あなうめにつねなるべくも見えぬかな戀しかるべき香はにほひつゝ

○梅花ハヤレ〳〵ウイ物ヤ。マモナウ散デシマイサウデ。目ニ常住見ラレサウニモミエヌ事カナ。ソノクセアトデ戀シガリサウナ香ハヨウニホウテサ。

かにばざくら　つらゆき

かづけども浪のなかにはさぐられて風ふくごとにうきしづむ玉

○海ニ涙ガ立テ水玉ノチツテキユルノハ。玉ノヤウナガ。ソレヲホンノ玉ヂヤト思ウテ。其海底ヘハイツテ取ウトスレドモ。涙ノ中デハドウモ手ニアタライデトラレヌ。ソシテ風ノフク度ニテウド底ニアル玉ガウイテハシヅミ。ウイテハシヅミスルヤウニ見エル。

すもゝの花

今いくか春しなければうぐひすもものはながめて思ふべらなり

○モウ春ノアヒダハナニホドモナケレバ。ソレヲ殘リ多ウ思フテ。人ト同ジヤウニ驚モシンキサウナカホシテ。物思イスルヤウナサウミエル。

からもゝの花　ふかやぶ

あふからものはなほこそかなしけれ別れむことをかねておもへば

○逢フタラウレシイハズヂヤニ。逢ヒナガラモヤツパリタレデモサカナシイワイ。アヘバ別レヌサキカラハヤ。別レル事ヲ思ウニヨツテサ。

たちばな　をののしげかげ

あしびきの山たちばなれゆく雲のやどり定めぬ世にこそ有けれ

○山カラ立テハナレテイク雲ノトマリドコロノ定マラヌヤウナモノデトント行ク末ノサドウナラウヤラジレヌ世ノ中ヂヤワイノ。

をかたまの木　とものり

打聞をかたまの木の說うけがたし。

みよし野のよしのゝ瀧にうかび出る沫をかたまのきゆと見つらむ

○吉野ノ瀧ヘウキデル水ノ沫ヲ人ハ。玉ガ出テキユルト見ルデアラウガ。

やまがきの木　よみ人しらず

横井ノ千秋云。山柿はちひさくむらがりてなる柿にて。世に信濃柿とも吉野柿ともいふ。又材に黑柿といふも是なり

秋はきぬ今やまがきのきり〳〵すよな〳〵なかむ風の寒さに

○秋ガキタコレデハ風ノ寒サニ。マガキノキリ〳〵スガ。モウカツヽケヨナ〳〵ナクデガナアラウ。

あふひかつら　清

かくばかりあふひのまれになる人をいかゞつらしとおもはざるべき

○コレホドニ逢事ガマレニナツタ人ヲ。ドウシテツライト思ハズニ居ラレウゾ。ツラウ思ハイデハ。

人めゆゑ後にあふひのはるけくはわがつらきにや思ひなされむ　清

○人目ヲツヽムユエニ。コレカラ後ニモシ逢フ事ガ遠ウナツタナラ。ソノワケハシラズ

ニ。コチガツライノニナルデガナアラウ。

くたに　僧正遍昭

ちりぬれば後はあくたになる花を思ひしらずもまどふてふ哉

○花ハチツテシマヘバ後ニハ芥ニナツテシマウテナンデモナイ物ヂヤニ。ソレヲエガテンセズニアハウナ。サテモマア花ニマヨウ事カナ。

さうび　つらゆき

われはけさうひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべかりけり

○オレハ花ト云物ヲ今朝始メテサミタガ。花ヲバ世間ノ人ガアダナ物ヂヤト云ヂヤガナルホドミレバ。アダナモノト云ベキ色ヂヤワイノ。

打聞よろし

をみなへし　とものり

白露を玉にぬくとやさゝがにの花にも葉にも糸をみなへし

○露ヲ玉ニシテツナグトテヤラ。蜘ガ女郎花ノ花ヘモ。葉ヘモミナ絲ヲ引テカケタ。朝露を分そほぢつゝ花見むと今ぞ野山をみなへしりぬる

○女郎花ヲ見ヤウト思フテ。朝露ヲ分テヌレヌレアルイテ。今日サ野ヤ山ヲドコモカシコモミナトホツテ知ツタ。

朱雀院のをみなへしあはせの時にをみなへしといふいつもじをくのかしらにおきてよめる　つらゆき

をぐら山みね立ならしなく鹿のへにけむ秋をしる人ぞなき

○小倉山ノ峯ノアタリヲアチコチアルイテ鳴ク鹿ノ。コレマデ經テキタ秋ノ數ヲサ何ン年ヂヤカシル人ハナイ。

きちかうの花　とものり

あきちかうのはなりにけり白露のおける草葉も色かはりゆく

○野ノケシキヲミレバ。冬ガレノ物ガナシイ時節ガ近ウナツタワイ。露ノオイタ草葉モ色ガカハツテキタ。

秋とは、物がなしき時節をいへり。さる例秋の部にも、秋はきぬ紅葉はやどに云々などあり。考へ合すべし。

しをに　よみ人しらず

ふりはへていざ故郷の花見むとこしをにほひぞうつろひにける

○ドレヤ昔ノ在所ノ花ヲイテ見ヤウゾト思ウテ。ワザ〳〵キタモノヲモウサ色ガカハツタワイ。

りうたんのはな　友のり

わがやどの花ふみしだくとりうたんのはなければやこゝにしもくる

○コチノ庭ノ大事ノ花ヲフミアラス。アノ鳥ヲオウテヤラウ。住ム野ガナイカシテ。トカクコヽヘ來オル。

しだくはしのぐと本と同言なり。

をばな　よみびとしらず

ありと見て頼むぞかたきうつせみのよをばなしとや思ひなしてむ

をばなは尾花なり。打聞の說わろし萬葉の歌の見あやまりなり。

○惣ジテ世中ノ事ハナンデモ。有ルモノヂヤト思ウテ頼ミニシテモ頼ミニハサナリガタイ。スレヤ〔三〕世ノ中ノ事ヲバ皆無イモノヂヤト。レウケンヲツケルガ。ヨカラウカイ。

けにごし　やたべの名實

うちつけにこしとや花の色を見むおく白露のそむるばかりを

○花ヲミテサツキヤクニ濃イ色ヲヤト見ヤウモノカ。アレハ花ノ色ノコイノデハナイ。オイタ露デヌレテ。ソレデアノトホリニ。濃ウミエルバカリヲヤモノヲ。

二條ノ后春宮のみやすむ所（御摂樣）と申ける時にめどにけづり花させりけるをよませ給ひける　ふむやのやすひで

花の木にあらざらめども咲にけりふりにしこのみなる時もがな

○此ケヅリ花ヲミマスレバ花ノ咲ベキ木デモアルマイケレトモ。花ガサキマシタワイ。致セバナルマジイ木ヘモ木實（このみ）ノナルヤウニ年ヨリマシタ私ガ此ノ身モドウゾ立身イタス時節モアレカシト願ヒマスル儀デゴザリマス。

餘材。四の句の初の說いとわろし。　しのぶぐさ　きのとしさだ

山高みつねにあらしのふくさとはにほひもあへず花ぞ散ける

○近所ナ山ガ高サニ。ジヤウヲウ嵐ノフク里ハ花ハサ咲テアルマモナシニツイ散リテシマウワイ。

打聞。四の句の說わろし。　やまし　平ノあつゆき

郭公峯の雲にやまじりにしありとはきけど見るよしもなき

○時鳥ハ峯ノ雲ノ中ヘトンデイタカシラメ。アソコラデ鳴クトハ聞エルケレド。ドウモ形ハ見ヤウヤウガナイ。

からはぎ　よみ人しらず

千秋云。淸暑堂の御神樂の時に。人長。かれたる荻（をぎ）の枝を持つとあり。これを枯荻（からをぎ）といふよし。體源抄など

に見え。又いとしろく枯たるをぎをたかやかにかざしなど源氏物語にも見えたり。さればこれはもとからをぎとありて歌も二の句。からを木毎にとありけんを題の荻を萩にあやまりて。歌のてにをはをも。それによりて改めつるものにはあらじ歟。

うつせみのからはぎごとにとゞむれどたまのゆくへを見ぬぞかなしき

○蟬ノカラヲバスギステヽドノ木ニモトメテオイテ。其身ハドコヘカ飛ンデイヌルカ。此ノ人間モテウドソンナモノデ。人ゴトニ死ヌレバミナカラダヲバ棺ノ中ヘトメテオケドモ。カンジンノ魂シヒハドコヘトンデイヌルヤラ。ユクヘガシレヌヤウニ。ナツテシマウノハサ。カナシイ事ヲヤ

打聞よろし。　かはなぐさ　ふかやぶ

うばたまの夢に何かはなぐさまむうつゝにだにもあかぬこゝろを

○逢ヒタイト思フ人ハ夢ニデモ見レバ心ガキルト云事ナレドモ。〔一〕夢ニ見タバカリデドウシテ心ガキヤウゾ。シヤウジンニ逢テサヘマダタラヌヤウニ思ウ心ヲヤモノヲ。

さがりこけ　たかむこのとしはる

花のいろはたゞ一さかりこけれどもかへすゞぞ露はそめける

○花ノ色ノ濃イノハ。タツタ一サカリデ。ワヅカノ間バカリナレドモソレヲ露ハ。毎朝毎晩ナンベンモ〳〵サソメルワイ。タツタ一サカリナモノヲ。ソノヤウニ染ズトモヨイ事ヲ。

にがたけ　しげはる

にがたけは、次なるかはたけと共に、くさびらの名なり。うつぼ物語に見ゆ。

千秋云。にがたけは。苦茸。かはたけは。革茸なり。

いのちとて露をたのむにかたければ物わびしらになく野べの虫

○野ヘンノ蟲ハ。露ヲ命ヂヤト思ウテ頼ミニスレドモ。頼ミニナリニクイハカナイモノヂヤニヨツテ。難儀ニ思ウテカナシサウニ鳴ク。

かはたけ　かげのりの王

さよふけてなかばたけゆくひさかたの月ふきかへせ秋のやま風

○夜ガフケテモウ半分ホドモタケテイクアノ月ヲ東ノ方ヘ吹カヘセ秋ノ山ノ風ヨ

わらび　しんせい法師

けふりたちもゆとも見えぬ草のはをたれかわらびとなづけそめけむ

○ワラ火ナラバ。烟リモ立ツテモエルハズヂヤニ。烟モタヽズモエルトモ見エヌ草ノ葉ヂヤモノヲ。誰カワラ火ト云。名ヲツケソメタ事ヤラ。

千秋云。この歌は。物名のよみざまにあらざれば。此の部に入べきにあらず。

さゝまつ　びは　清はせをば　きのめのと

いさゝめに時まつまにぞひはへぬる心はせをばひとに見えつゝ

○近イウチニ逢イマセウトタガヒニ約束ヲシテオイテ。其日マデハツイワヅカノ間ダノ事ニ思ウテ待ツアヒダニサ大分日數ガタツタワイ。コレデハドウアラウカ。逢ウ事ハ心モトナイモノヂヤ。逢ハウト云ワシガ心アヒヲバ人ニ。見ラレテマア。エヽコンナ事ナラ約束セネバ。ヨカツタニ

なし　なつめ　くるみ　兵衛

あぢきなしなげきなつめそうき事にあひくるみをばすてぬ物から

○イロ〳〵サマ〳〵ノウイコトニアツテ來タ此ノ身ヲエステモセズニ居ナガラソノウイ事ノカズ〳〵ヲトリアツメテナゲカウ事デハナイアヽムヤクナ事ヂヤ。

からことといふところにて春の立ける日よめる　安倍ノ清行ノ朝臣

浪の音のけさからことに聞ゆるは春のしらべやあらたまるらむ

○アノ涙ノ音ノケサカラカハツテ聞エルノハ此ノ唐琴ノ調子モケサカラハ春ノ調子ニナツテキノウマデトハ改マツタカシラヌ。

いかゞさき　かれのおほきみ

かぢにあたる浪のしづくを春なればいかゞさきちる花と見ざらむ

○舟ノカヂヘアタツタ涙ノクダケテチル雫ガ今ハ春ナレバ花ガチルト思ハレル。トントト花ヂヤ。アレヲドウシテ花ト見ヌモノガアラウゾ。

花のさきちるといふは。たゞちることなり。例みなしかり。打聞わろし。

からさき　あほのつねみ

かのかたにいつからさきにわたりけむ浪路は跡ものこらざりけり

○見レバアレアノ辛崎ニ人ガ立テキルガ。アソコヘハ今マデニ何時渡ツテイツカラアヽシテ居ル事ヤラ。今マデニ渡ツタナラ。其アトガアリソナ物ナレドモ。涙ノ道ナレバ渡ツタ跡モノコツテハナイワイ。

伊勢

浪の花おきからさきて散りくめり水の春とは風やなるらむ

○涙ノ打ヨセテクルノハ。テウド花ノチツテクルヤウニミエルガ。此ノヤウニ打ヨセテ磯ヘチツテクル涙ノ花ハ。アノ沖ヘサイタ花ガ沖ノ方カラチツテ來ル樣子ヂヤ。サテ

花ヲサカスノハ春ノ事ナリ涙ノヨセテクルノハ風ユエナリ。スレヤ水ノタメニハ風ガ春ニナリカハツテアノヤウニ花ヲサカスカシラヌ。

打聞説上句にかなはず。

かみやがは　つらゆき

うば玉のわが黒かみやがはるらむかゞみの影にふれるしら雪

○カレガ黒イ髪ガ色ガカハツテシラガニナツタカシラヌ。鏡ヘウツヽタ影ヲ見レバツムリヘマヅ白ニ雪ガフツタ。

よどがは

あしびきの山べにをれば白雲のいかにせよとかはるゝ時なき

○山里ニ住ンデ居レバ。ジヤウヂウ雲ノハレル時モナイサウナウテサヘ氣ノツマツタ山ノ中ヂヤニ。何ントセイト云フ事デ此ノヤウニ思ウチラスバカリノ事ヂヤモノヲ。ソレニ世間デ秋ノ月ヲバカリベツニ賞翫スルハドウ云事ゾイ。

百和香　よみ人しらず

花ごとにあかずちらしゝ風なればいくそばくわがうしとかは思ふ

○花ト云花ヲバドレモカレモミナ。殘リ多イニ散シテシマウヤツナレバ風ヲバカレハドレホドフツクニ思フゾ。タイテイ不足ニ思ウ事デハナイ。

すみながし　しげはる

春がすみなかしかよひぢなかりせば秋くる雁はかへらざらまし

○春ノ霞ノバツタリトフサガツテアル中ニ通ツテイク道ガ。ナイナラバ秋キタ雁ガ春カヘリハスマイニ。霞ノ中ニモ道ガアルデ春ハカヘルデアラウ。

ウニ雲サヘ晴ルトキモナイ事ゾ。

かた野　たゞみれ

夏草のうへはしげれるぬま水のゆくかたのなきわが心かな

○拙者ガ身ハテウド。ウヘニハ夏ノ草ガ一ツハイハニシゲツテ。アルヤラナイヤラシレヌ沼水ノヤウナモノデ。世間ノ人ニモシラレヌ立身モエセネバテウド又ソノ沼水ノ流レテ行ク所ノナイヤウニ。扨サテ心ノユカヌ事カナ。オモシロウナイ事カナ。

かつらの宮　源ノほどこす

秋くれど月のかつらのみやはなるひかりを花とちらすばかりを

○ソウタイノ木ハ秋ハ實ガナルモノヂヤガ。月ノ中ナ桂ハ。秋ガキタトテ實ガナルカ。實ハナリハセヌカ。タヾ秋ハ常ヨリサヤカナ光ヲ花ノヤウニ思ウチラスバカリノ事ヂヤモノヲ。ソレニ世間デ秋ノ月ヲバカリベツニ賞翫スルハドウ云事ゾイ。

百和香　よみ人しらず

花ごとにあかずちらしゝ風なればいくそばくわがうしとかは思ふ

○花ト云花ヲバドレモカレモミナ。殘リ多イニ散シテシマウヤツナレバ風ヲバカレハドレホドフツクニ思フゾ。タイテイ不足ニ思ウ事デハナイ。

すみながし　しげはる

春がすみなかしかよひぢなかりせば秋くる雁はかへらざらまし

○春ノ霞ノバツタリトフサガツテアル中ニ通ツテイク道ガ。ナイナラバ秋キタ雁ガ春カヘリハスマイニ。霞ノ中ニモ道ガアルデ春ハカヘルデアラウ。

おき火　みやこのよしか

流れいづるかたゞに見えぬ涙川おきひむときやそこはしられむ

○流レテ出ル沼サヘドチヂヤカシレヌ。涙川ナレバ。マシテ底ノ深サハイカホドアルカシレヌガ。モシ沖ノ深イ所マデ。水ノ干ル時ガアツタナラ底ノ深サモミエルデアラウガ。

ちまき　大江ノ千里

のちまきのおくれておふるなへなれどあだにはならぬたのみとぞきく

○後蒔ノオクレテ。ハエタ苗デモ。ムダニナツテシマイハセズニ。秋ハヤツパリ實ノツテ頼ミノアル田ノ稻ヂヤト。聞及ンデ居ル。スレヤ學問デモナンデモ。オンガクヂヤト云テ爲マイヤウハナイゾヤ。

打聞四の句の注俗意なり。

はをはじめるをはてにてながめを
かけて時の歌よめと人のいひけれ
ばよめる　僧正聖寶

はなのなかめにあくやとて分ゆけば心ぞともに
ちりぬべらなる。

○ゾンブン目ニ見飽カト思ウテ。花ノタントヽ
咲テアル中ヲ分テイケバ花ニ目ガ移ツテ。
コチノ心ガサ花トイツショニ。アチコチト
チツテイクヤウナ心モチガスル。

古今和歌集卷十一

戀歌一

題しらず　よみ人しらず

郭公なくやさつきのあやめ草あやめもしらぬ戀
もする哉

○〔上〕ドノヤウナワケナ物ヤラマダシラズ
ニワシヤマア。ムチヤナ戀ヲスル事カナ。

素性法師

音にのみきくの白露よるはおきてひるは思ひに
あへずけぬべし

○音ニキクバカリデ〔の白露〕マダ見タ事モナ
イ人ヲ思フテ。夜ルハネラレネバオキテ居
テ。晝ハ又戀シサニエコタヘイデ。消サウ
ニ思ハルヽ。

よし野川岩浪たかくゆく水のはやくぞ人をおも
ひそめてし

○アノ人ヲオレヤトウカラ思ヒソメタ。又オ
レガアノ人ヲ思フノハサイシヨカラモウ。
吉野川ノ早瀬ノヤウニヤルセモナウ思フ。
千秋云。後の譯の心は「たきつ心をせきぞかねつる。」たきつせの中にもよどはありてふを云々などの意なり。

藤原勝臣

白浪のあとなきかたにゆく舟も風ぞたよりのし
るべなりける

○浪ノ上ノ。人ノトホツタ跡モナイ方ヘイク
舟デモ。風ト云フ物ガサ手ヨリノ案内者ヂ
ヤ。ソレニワシガ戀ハソンナ風ノヤウナ。
タヨリニセウ物サヘナイワイノ。
餘材。打聞。ともにわろし例をもてしるべし。

在原ノ元方

音羽山おとに聞きつゝあふ坂の關のこなたに年をふるかな

○音羽山ハ逢坂ノ關ノコチラニアル山ヂヤガ其山ノ名ノトホリニコナタデ音ニハキヽナガラ。關ガアツテコエラレネバ。コチラニチツト。トマツテ居ルヤウニ逢坂ト云フ名ノヤウニ思フ人ニ逢フ事モセズニ。何ン年モタテル事カナ。サテモ早ウ逢ヒタイ。

立かへりあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつしら浪

○此ヤウニヨソニハナレテ居テモ。心ハジヤウヂウカノ人ノ所ヘバツカリイテ居レバつ白波一又シテモ〳〵アヽハレ逢タイ事ヤトサ思フ。

打聞いとわろし。

つらゆき

世の中はかくこそ有けれふく風のめに見ぬ人も戀しかりけり

○ヨノ中ト云モノハマアカウシタ事ヂヤワイマア聞テ下サレ。〔三〕マダ一目モ見タ事モナイ人モ。此ノヤウニ戀シイヂヤワイ。

右近のうまばのひをりの日むかひにたてたりける車の下すだれより女のかほのほのかに見えければよみてつかはしける　在原ノなりひらの朝臣

ひをりといふ名は。袖中抄の說のごとくなるべし。

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくはあやなくけふやながめくらさむ

○見ヌデモナシ見タデモナイ人ガ此ヤウニ戀シイヂヤガコレデハワケモナイ事ニ今日ハ一日シンキニ思フテクラスデアラウサ。

かへし　よみ人しらず

しるしらぬ何かあやなく分ていはむ思ひのみこそしるべなりけれ

○見タノ見ヌノト分テハ何ンノイハウコトゾソレヤワケモナイ事ヂヤ。戀ト云モノハ。思ヒバツカリコソハ。イツゾハアハレルシルベナレ。其外ノ事ハナニモドウコウト云事ハナイワイナ。

かすがのまつりにまかれりける時に物見に出たりける女のもとに家をたづねてつかはしける　みぶのたゞみね

春日野の雪間を分ておひ出くる草のはつかに見えし君はも

○春日野ノ雪ノアヒダカラ。ハエデヽクル草ノチツトバカリ見エソメタヤウニハツ〳〵ニチヨツト見エタ御方ワイノマア。人の花つみしける所にまかりてそこなりける人のもとに後によみてつかはしける　つらゆき

山櫻霞のまよりほのかにも見てし人こそ戀しかりけれ

○山ノ櫻ノ花ヲ。霞ノアヒダカラ見ルヤウニウス〳〵ト見タ人ガサマアサテ〳〵戀シイ事ヂヤワイ。

題しらず　もとかた

たよりにもあらぬ思ひのあやしきは心を人につくるなりけり

○何ンゾノタヨリニコソ。物ハコトヅケテヤルモノナレ〳〵タヨリデモナイ此ワシガ思ヒノ。カハツタコトハ。此ヤウニ思フ心ヲソノ人ニツケルノヂヤワイ。カウイフノハ。タヨリニ物ヲコトヅケルト心ヲ人ニツケルト云ト詞ガ同ジヂヤニヨツテサ。

餘材わろし。打聞いかなる意とも聞とりがたし。

凡河内ノ躬恒

はつ雁のはつかに聲を聞しより中空にのみ物を

おもふ哉

○空ヲ飛デイク始メテノ雁ノ聲ヲ聞クヤウニ人ノ聲ヲハツ〳〵ニチヨツト聞テカラ。心ガヒタスラ。ウテウテンニナツテ。サテモ〳〵モノ思ヒヲスル事カナ。

つらゆき

逢事は雲ゐはるかになる神の音にきゝつゝこひわたるかな

○コレホド戀シウ思ウケレドモナカ〳〵逢ハレサウナモヤウハ遠イ事デ。タヾ雲ノ中デ鳴ルカミナリノ遠イ音ヲヨソカラ聞クヤウニ。音ニバツカリ聞テ月日ヲタテル事カナ。

よみびとしらず

かた絲をこなたかなたによりかけてあはずは何を玉のをにせむ

○一筋ヅヽノ糸ヲ。合セテ玉ヲツナグ緒ニヨラウト思ウテ。ソノ糸ヲアチラヘコチラヘトヨリカケテ。モシソレガ一ツニ合ハイデ緒ニナラズバ。玉ツナグ緒ニハ何ヲセウゾ

ワシガ戀モテウドソンナ物デ此ヤウニイロイロトスレドモモシシヽウ逢ハレズバ。ドウシテ命ガツヾカウゾ。

餘材打聞ともに。二の句の注わろし。これはたゞさまざまとして心をつくすことをたとへたるなり。男女のこなたかなたをたとへたるにはあらず。

夕ぐれは雲のはたてに物ぞおもふあまつ空なる人をこふとて

○ユウカタニハ雲ノ旗手ト云テイロ〳〵ノ雲ガタツ物ヂヤガテウドソノ雲ノタツ空ノヤウニ何ンノ手ガヽリモナイ。遠イ人ヲ思フトテワシハユフカタニナレバ。ソノ雲ノハタテノヤウニイロ〳〵サマ〴〵トサ物思ヒヲシマスル。

かりこもの思ひみだれてわがこふと妹しるらめや人しつげずは

○苅タマコモノミダレルヤウニワシハイロイロト心ガミダレテ。此ノヤウニ思フト云事ヲ。妹ハ知ラウカイ。人ガイツテキカサズバ。コレホドニ思フトハ知リハスマイ。

つれもなき人をやねたく白露のおくとはなげきぬとはしのばむ

○〔三〕オキルト云テハナゲキ。ネルト云テハシタウテ。アノアイソモナイ氣ヅヨイ人ヲ此ノヤウニ思ハウ事カヤ。サテモクチヲシイ事ヤドウゾ思フマイゾ。

ちはやぶるかものやしろのゆふだすき一日も君をかけぬ日はなし

○〔上〕ワシハ一日モオマヘノ事ヲ云ダシテ思ハヌ日ハ云ハナイ。

我戀はむなしき空にみちぬらし思ひやれども行く方もなし

○ワシガ戀ハ。サテケシカラヌ戀デ。虛空ヘ一ツパイニフサガツタサウナサウヂヤカシテ。思ヒヲハラシテヤラウト思ヘドモ。ドツコヘモ行クトコロガナウテ。ナンボウデモ此思ヒガハレテ。ユカヌ。

するがなるたごのうら浪たゝぬ日ばあれども君をこひぬ日はなし

○此ノタゴノ浦ノ浪ハ。オホカタイツデモ立ツガ。ソレデモサタマ〳〵ニハ此浪デモタタヌ日ハアレドモ。ワシガオマヘヲ戀シウ思ハヌ日ト云テハケガナ一日モナイ。

夕づくよさすや岡べの松の葉のいつともわかぬ戀もする哉

○アレアノ夕日ノ影ノサス。岡ノ松葉ハ四季トモニ同ジ色デ。イツモ云ワカチモナイガ。テウドソノヤウニ。ワシハイツト云ワカチ

モナイ戀ヲ。マアスル事カナ。サテモ〳〵。

千秋云。此初句タヅくよ。タヅくひ昔より兩本有しと見ゆ。千五百番の歌合に。公經卿さびしさをいかにとはましタヅく日さすや岡べのまつの雪折季經判に。いはく。万葉集にはゆふづくひさすやと侍り。古今の歌を思ひて。松をよまば。タヅくよとぞ侍るべき云々。かれば公經卿はタヅく日とある本によりてよまれ。季經卿はタヅくよとある本につきて判せられたるなり。今師も譯は日とある本によられたり打聞に。松を待に。とりなしてとあるはわろし。そのこゝろはなし。

あしひきの山下水のこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる

○山ノ陰ナ川ハシゲツタ木ノ下ニカクレテ。ヨソヘ見エハセネドモ。ゲウサンニサツサト流レオチルモノデヤガ。ワシガ戀モテウドソノヤウデ。見エヌヤウニカクシテハ居ルケレド。胸ノ内ハサツサト瀧ノ流レルヤウデソレヲセキトメウト思ヘド。中々セキトメラルヽ事デハサナイ。

吉野川いはきりとほし行水の音にはたてじ戀はしぬとも

○吉野川ハケシカラヌ早イ川デ。ドウ〳〵ト鳴ツテ。岩ヲ切リトホシテイクヤウニスルドイ流レデヤガ。ワシガ戀モ。ムネノ内ハ吉野川デヤソレデモタトヒコレデ。死ハスルト云テモ。吉野川ノヤウニ。音ニタテヽ人ニハシラレマイゾ。

たぎつせの中にも淀はありてふをなど我戀の淵瀨ともなき

○山川ハ早イ物ナレド。ソレデモ其ノ間ニハ淵ガアツテヨドム所モアルト云事デヤニ。ワシガ戀ハナゼ淵デヤ瀨デヤト云ワカチモナシニイツモ早瀨ノヤウナ事ゾイ。

山高み下ゆく水のしたにのみ流れてこひむこひはしぬとも

○山ガ高サニ。上ノ方ヲバイカズニ下ノ谷バツカリ流レル水ノトホリニワシモタトヒ此ノ分デコヒシニヽ死ヌルト云テモウハベハアラハシハスマイゾイツマデ心ノ内デバツカリ思ウテ居ヨウゾ。

思ひ出るときはの山のいはつゝじいはねばこそあれ戀しきものを

○野山の〔三〕口ヘダシテイハヌデコソアレ思ヒダシタ時ニハ夫ハ〳〵戀シイモノヲ。

人しれず思へばくるしくれなゐの末つむ花の色にいでなむ

○人ニシラサズニ心ノ内デバツカリ思フテ居レバキツウジユツナイ。コレデハドウモタマラヌホドニ〔三四〕イツソウチダシテノケウ。

秋の野の尾花にまじり咲く花のいろにやこひむあふよしもなみ

○此ヤウニ心ノウチデバツカリ思フテ居テハトテモドウシテモカウシテモ逢ハレサウナモヤウガナサニ。シアンシテ見レバ。〔上〕イツソウチダシテカヽラウカイ。

上句打聞の說よろし。

わがそのゝ梅のほつえに鶯のねになきぬべき戀もするかな

○アレコチノ庭ノ梅ノ木ノ高イ枝デ鶯ガナクガ。ワシモアノヤウニ聲ヲアゲテナキモセウヤウニ思ハルホドノ戀ヲマアスルアラレモナイ事カナ。

あし引の山ほとゝぎすわがごとや君にこひつゝいねがてにする

○夜ルモヨヒトヨネラレヌニヨツテ聞テ居レバ。ヒタモノ郭公ガ。鳴ガアレモワシガ君

チ思フヤウニ。戀ナシテネラレヌコトカイ。三四の句は。わが君に戀るごとや。こひつゝといふ意なり。

夏なればやどにふすぶるかやり火のいつまで我身下もえにせむ

○夏デイハウナラ。テウド家ノマヘデタク蚊遣火ノ上ヘアラハレテハモエズニイツマデモクス〳〵トフスボツテアルヤウニ。ワシガ身モ此ノヤウニイツマデ人ニハイハズニ胸ヲモヤシテ居ルデアラウ。

夏なれば。夏の物にてたとへていはゞといはんがごとし秋なればともあるそれも同じ意なり。

戀せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずぞなりにけらしも

○ドウゾ戀ヲスマイト思テ。御手洗川デシタミソギヲ。神ハトウ〳〵御ウケナサレヌサウナワイマア。サウカシテネカラ戀ガヤマヌ。

あはれてふことだになくはなにをかは戀のみだれのつかねをにせむ

○思ヒガ胸ニ一ツ杯ニナルトキニハ。聲ヲアゲテ。アヽアハレアヽアハレトイヘバコソスコシハ胸モユルマレ。ソノアヽアハレト云事サヘナクバ戀スルモノハ何ンデ心ヲチヲサメウゾ。テウド萱ナドヲ苅テ亂レタ時ニ一トコロヘトリアツメテ。緒デユヒツカ子ルヤウニ。戀デ心ガ亂レタ時ニハアヽアハレアヽアハレト云ノガ束ネ緒ヂヤ。

思ふにはしのぶることぞまけにける色には出でとおもひし物を

○ナンボシノンデ見テモ。思ウ方ガ強イニヨツテトウ〳〵シノブ方ガサ。マケタワイ。イツマデモ色ニハダスマイト思ウタモノヲ。

我戀は人しるらめやしきたへの枕のみこそしらばしるらめ

○此ノ通リニキツウシノベバ。ワシガ戀スルノハ。人ガシラウカヤ。タレモ知ル人ハアルマイ枕バツカリコソハ。夜ル〳〵シテネルモノナレバ。モシモ知ルナラシリモセウケレ。

あさぢふのをのゝしのはら忍ぶとも人しるらめやいふ人なしに

○〔一〕〔二〕此ヤウニ忍デ思フト云事モ君ハ知ウカイシリハスマイ。云テキカス人ナシニハ。

人しれぬ思ひやなぞとあしがきのまぢかけれどもあふよしもなき

○人ニシラサヌコノ思ヒトシタ事ワイノ〔三〕マヂカイ所ヂヤケレドモ。ナゼニアハレルモヤウノナイ事ゾ。

千秋云。二の句なぞとのともじ。歌注打聞なきにたゞなぞなり。といふ辭は。いはれぬやうなれどもことばのたすけにおきたるなりとあるは心得ず。助辭にともじを用ひたること。をさ〳〵見えず此とはかならずもを寫し誤りて傳へたるにて。もとはなぞもにてぞ有けん。なぞもは古歌に例多く見ゆちかくは此の巻の中にもかゝり火に云々なぞもかくとありもと。と字の形よく似たり。

思ふともこふともあはむ物なれやゆふてもたゆくとくるしだひも

○イカホド思フタト云テモコヒシタウタト云テモ逢ハレウモノカイドウデアハレル事デハナイ。ソレニ又シテモ〳〵。ムスブ手モタルイホドセツ〳〵下紐ガトケル。總體シキリニ人ニ逢ヒタウ思フ時ニハ下紐ガトケルモノヂヤト云事ヂヤガ。ワシハナニホドアヒタウ思ウテ下紐ガトケタト云テモトテモ逢レハセネバ何ンノセンナイ事ヂヤニ。

打聞下句の說上句にかけ合わろし。

いで我を人なとながめそ大ぶねのゆたのたゆたなぞたり。とゝいふ辭は。いはれぬやうなれどもことばのたすけにおきたるなりとあるは心得ず。助辭にともじを用ひたること。をさ〳〵見えず此とはかならずもを寫し誤りて傳へたるにて。もとはなぞもにてぞ有けん。なぞもは古歌に例多く見ゆちかくは此の巻の中にもかゝり火に云々なぞもかくとありもと。と字の形よく似たり。

に物おもふころぞ

○イヤサ。コレ貴樣タチソノヤウニトガメテ下サルナイ。ワシハ大キナ舟ノ涙ニユラレルヤウニ物思ヒテウカラ〳〵トシテ居ルジセツヂヤスレヤアヂナ顏ツキニ見エルハズヂヤ。

いせの海に釣するあまのうけなれや心ひとつをさだめかねつる

○戀チスルワシガ心ハイセノ海デ獵師ノ釣チスルウケヂヤカシテ。フハラ〳〵トウカレテシヅメウト思フテモドウモシヅメラレヌ釣ノウケト云フモノハ涙ニユラレテ。フハラ〳〵トウキアルク物ヂヤガ心ガテウドソノヤウニサ。

いせの海のあまのつりなはうちはへてくるしとのみや思ひ渡らむ

○〔一〕〔二〕戀ユヱニ長イ月日ヲ。此ノヤウニジユツナイ事ヤトバツカリ思ウテタテル事デアラウカ。

千秋云。あまのつりなはうちはへてくる。とつゞけたるは。いと〳〵長き繩に釣の枝糸をあまたつけて。海の中へ。遠くうちはへおきて。その繩をくりよせあげて。かの釣をくひたる魚どもをとるわざありこれなり今世にこれをながのゝ釣といふは。長繩の釣といへるを訛れるなり國によりては。ながなはともいへり。この歌うちはへてくるといへるよのつねの釣にては。かなはぬとなり。

涙川なにみなかみをたづねけむ物思ふ時のわが身なりけり

○涙川ト云川ノミナカミハトコヂヤカトナゼ思フタ事ヤラソノ川ノミナカミハドコデモナイ物ヲ思フ時ノ此ワシガ身ヂヤワイ。ハテ涙ハ身カラ出ルハサテ。

たねしあれば岩にも松はおひにけり戀をしこひばあはざらめやは

○タネガアレバ。岩ニモ松ハハエルワイ。スレヤナンボ出來ニクイ戀ヂヤト云テモ隨分骨ヲ折リサヘシタナラ。逢ハレヌト云事ハガアロカイ。ドコゾデハアハレヌト云事ハアルマイ。

あさなゝたつ河霧の空にのみうきて思ひのある世なりけり

○毎朝タツ川ノ霧ノ中ニウイテアルヤウニイツモ落チ付カヌ思ヒノアル世ヂヤワイ。わすらるゝ時しなければあしたづの思ひみだれてねをのみぞなく

○ワスレラレル時ガナケレバ。〔三〕イロ〳〵ト思ウテ泣テバツカリサ居ルワシヤ。

から衣ひも夕ぐれになるときはかへすゞぐゝぞ人はこひしき

○〔一〕〔二〕ひも毎日ユフ方ニナレバカヘスゞぐゝモサ。カノ人ガ戀シイ。

よひゝに枕さだめんかたもなしいかにねし夜か夢に見えけむ

○イツゾヤ戀シイ人ヲ。夢ニ見タ事ガアツタガ其ノ夜ハドチラ枕ニドウシテ寐タ時デアツタヤラ。思ヒダシテミレド覺エヌ。ソレデ此ゴロモ。毎晩々々ドウゾ夢ニ見ヤウト思ヘド。ドチラ枕ガヨカラウヤラ定メウヤウガナイ。

餘材打聞ともに上の句の說たがへり。よく上下の詞を味ひてしるべし。

戀しきに命をかふるものならばしにはやすくぞあるべかりける

○命ヲ此戀シサノクルシイノニカヘテ死ナルモノナラ死ヌルノハヤスイ事デサアラウト思ハレルワイ。此クルシイメヲセウヨリ死ダ方ガハルカマシヂヤ。

人の身もならはし物をあはずしていざこゝろみ

む戀やしぬると

○人ノ身ト云モノモ。ナンデモナラハシカラナモノヂヤ。戀シイ人ニアハズニ居テモソレガナラハシニナツテ。ソノ通リデ居ラルモノカ又ソレデハコタヘラレイデ。死ヌル物カ。ドレヤ逢ハズニ居テタメシテ見ヤウゾ。

しのぶればくるしきものを人しれず思ふてふことたれに語らむ

○思フ事ヲ隱シテ居ルノハサテモ〳〵苦シイニ此ヤウニ人ニシラレズニ心デバツカリ思フト云コトヲ。誰ニナリトモ語リタイモノヂヤガ。タレニ語ラウゾ。タレニモ語ラウ人ガナイ。

來ん世にもはやなりなゝむめのまへにつれなき人を昔と思はむ

○イツソ早ウ來世ニナツテシマヘバヨイニ。ソシタラ此現在目ノマヘニツレナイ人ヲ昔ノ事ヂヤト思モワウニ。昔シ事ヂヤト思フタラ。コレホドニツラウハ思ハレマイワサ。つれもなき人をこふとて山彦のこたへするまで歎きつるかな

○アイソモナイ人ヲ戀シフ思フトテワシハマア。山ノ中ナラコダマノヒゞクホドニサテモ〳〵大キナタメ息ヲツイテナゲイタ事カナ。

行水にかずかくよりもはかなきは思はぬ人をおもふなりけり

○流レテイク水ヘ物ノ數ヲカキトメルノハ。ヂツキニ消テシマヘバ。センノナイラチノアカヌ事ヂヤガ。ソレヨリマダキツイラチノアカヌ事ハコチチ思フテモクレヌ人ヲ。コチカラバツカリ思フノヂヤワイ。ワシガ戀ハサウヂヤワイノ。

人を思ふ心は我にあらねばや身のまどふだにしられざるらむ

○人ヲ戀シウ思フ心ハ。我心ヂヤケレド。我心ヂヤナイヤラシテ。此我身ノマヨフノサヘシレヌ。モシコノ心ガキツト我心ニチガイナクバ。我身ノマヨフノガシレヌト云事ハ。ナイハズヤワサテ。アヽ戀ト云モノハカハツタモノヂヤ。

おもひやるさかひはるかになりやするまどふ夢路にあふ人のなき

○人モナイハルカナ國ヘイタナラ道デ逢人モアルマイガ。テウドソンナモノデ。ワシガ戀シイ人ノ事ヲ思ヒヤル其ノ心ノイク道モダン〳〵遠ウナルカシラヌ。サウカシテ。アチコチト思フテ夢ヲ見テモ思フ人ニアフ夢ハ見ヌ。

打聞上句の意たがへり。

夢のうちに逢見んことを頼みつゝくらせるよひはねむかたもなし

○セメテハドウゾ夢ノウチニ逢ハウト思フテヒルノ内カラソレヲ頼ミニシテ暮ラシタ夜ハ。ドチ枕ニドウ寢タナラ夢ニ見ラレウゾ。ドウ寢タモノデアラウゾト。心ガマヨフテ。ドウモ寢樣ガナイ。

餘材打聞ともに。結句を解えず。上なるいかにねし夜が夢に見えけんといふ歌と合せて心得べし。

こひしねとするわざならしうば玉のよるはすがらに夢に見えつゝ

○コレハマア。戀デ死ンデシマヘト云事サウナ。ナマナカニ。夜ルハヨヒトヨ夢ニ見エテ。思ヒサセテ。ホンマニハネカラアハレデサ。

涙川まくら流るゝうきねには夢もさだかに見えずぞ有ける

○涙ガ川ノヤウデ枕ガ流レテ川舟ノ中デ浮テ寢ルヤウナ。カウイウ浮寢デハ見ル夢モハツキリトハサ見エヌワイノ。

戀すれば我身は影となりにけりさりとて人にそはぬものゆゑ

○戀チスレバワガ身ハ。此ヤウニヤセテ。影ノヤウニナツタワイ。サウカト云テ思フ人ニ添ヒモセヌモノヽクセニサ。影ナラ人ニソヒソナモノヂヤニ。

かゞり火にあらぬわが身のなぞもかく涙の川にうきてもあらなむ

○鵜飼舟ノカゞリ火コソ川ニ浮テモエル物ナレ。カゞリ火デモナイワシガ身ノナゼニマア。此ノヤウナ涙ノ川ニウイテ。胸ニ思ヒノ火ガモエル事ヤラ。

かゞり火の影となる身のわびしきは流れて下にもゆるなりけり

○川ヲ流レテクダル鵜飼舟ノカゞリ火ノ移ツタカゲハ水ノ下デモエルガ。ワシモテウドソンナモノデ。戀ニヤツレテ影ノヤウニナツタ身ノ。ツライ難儀ナコトハ。長イ月日ヲ。心ノ内デバツカリ思フテ。ムネノモエルノヂヤワイ。

早き瀬にみるめおひせば我袖の涙の川にうゑましものを

○ミルメト云モノハ海ノ中ヘハエルモノヂヤガ。ソレガ若シ川ノ早イ瀬ヘハエテソダツナラ。ワシガ袖ノ涙ノ川ヘウエウモノ。ナゼニナレヤワシガ涙ハ早イ瀬ノヤウニ流レルソシテ。戀シイ人ニ逢フ事ヲミルメト云ニヨツテサ。

おきへにもよらぬ玉もの浪のうへにみだれてのみや戀渡りなむ

○ワシガ戀ハ沖ノ方ヘモ磯バタヘモヨラズニ涙ノ上デミダレテアル藻ノヤウニドチラヘモツカズニ心ガ亂レテ。イツデモ此ヤウニ戀シイ！ヽト思フテバツカリ月日ヲタテルデアラウカ。

あしがものさわぐ入江のしら浪のしらずや人を戀しきねかくこひんとは

○〔上〕四人ヲ今此ノヤウニ戀シウ思ワウトハ。思ヒモヨラヌ事ヨ。

人しれぬおもひを常にするがなるふじの山こそ我身なりけれ

○常住人ニシラサヌ思ヒヲスルワシガ身ハ。外ニハナイ。駿河ノ富士山ガサワシガ身ヂヤワイ。ナゼト云フニ富士ノ山モ火ハモエズニ常住烟ガ立テモエルハサテ。

とぶ鳥のこゑも聞えぬおく山のふかき心を人はしらなむ

○イカウ深イオク山デハ。鳥ノ聲モセヌモノヂヤガ。ソノクラキノ奥山ホド深イ此ワシガ心ヲ。思フ人ハサウトハシラヌサウナガ。ドウゾ知テクレカシ。

あふ坂のゆふつけ鳥もわがごとく人や戀しきねのみなくらむ

○相坂ニハナシテアルアノ木綿ヲツケタ鷄モ人ガ戀シイヤラ。オレト同ジヤウニ聲ヲアゲテヒタスラ鳴。

打聞ゆふつけ鳥の說わろし。

逢坂の關に流るゝいはし水いはで心に思ひこそすれ

○〔上〕イハズニ居ルデコソアレ。心ニハタイテイ思フ事デハナイ。

うき草のうへはしげれるふちなれや深き心をしらでしらなむ

る人のなき

○ワシガ深イ心底ハ。ウヘニハ浮草ノシゲツテ見エヌ淵ヂヤカシテ。此ノ深イ心底ヲ。人ガ知テクレヌ。フカイ事ガ見エヌサウナ。

うちわびてよばゝむ聲に山びこのこたへぬ山はあらじとぞ思ふ

○サシツマツテセンカタナサニ大キナ聲ヲシテヨバヽツタナラ。其聲ニハヨモヤ。コタマノヒゞカヌ山ハアルマイトサ思フ。大キナ聲ヲスレバ必コタマノヒゞリ通リデワシガコレホドニ深ウ思フ事ナレバアチラカラモスコシハ何ントゾ思フテクレソナモノヂヤ。

こゝろがへする物にもがかたこひはくるしき物と人にしらせむ

○タガヒニ人ノ心ガトリカヘラレル物ニシタイモノヂヤ。ソシタラコチノ心トアチノ心ト入カヘテ片思ヒハクルシイモノヂヤト云事ヲアノ人ニ思ヒシラサウニ。

よそにしてこふればくるしいれひもの同じ心にいざむすびてむ

○今ノトホリニヘダツテヨソデ戀シウ思フテ居レバクルシイニ。兩方ノ紐ヲ一所ヘムスビ合スヤウニドレヤコレカラハ一所ニ居ルヤウニセウゾ。

おなじこゝろにといへるは。或人ノ云からぶみに同心結といふことあるによれるなり。といへり。又今おもふに。ところをこゝろと寫しあやまれるにや。

春たてばきゆる氷ののこりなく君がこゝろはわれにとけなむ

○春ニナレバ氷ノ殘ラズトケルヤウニ君ガ心ハドウゾオクソコナウ我ニウチトケヨカシ。

あけたてば蟬のをりはへ鳴くらしよるは螢のもえこそ渡れ

○夜ガ明レバ晝ハ蟬ノヤウニヒガナ一日ナイテクラシ。夜ハ螢ノヤウニ思ヒニモエテ夜ヲアカシテサ月日ヲタテルワイ。

夏蟲の身をいたづらになすこともひとつ思ひによりてなりけり

○夏ノ比蟲ノ火ノ中ヘトビコンデ。ツイ我身ヲムダニシテシマウノモ火ヲトラウト云フ思ヒ一ツニヨツテノ事ヂヤワイ。人ノ戀ヲスルノモテウド其通リデ。人ニ心ヲカケテ。ツイ我身ヲシモテノケル事ヂヤ。アヽア戀ハスマイ事ヂヤゾヤ。

餘材打聞ともにひとつおもひの說わろし。

夕されば濁いとゞひがたき我袖に秋の露さへおきそはりつゝ

○戀ヲスレバタゞサヘ涙ガカワキニクイワシガ袖ヘユフカタニナレバ。此ノ時節ノ露マデガオキソフテサ。イヨ〳〵カワカヌ。

いつとても戀しからずは清あらねども秋の夕はあやしかりけり

○イツヂヤト云テモコヒシウナイト云事ハナケレドモ。ソノ内ニモトリワケテ秋ノ時分ノ夕方ハ又カクベツニドウモタヘラレヌワイ。

秋の田のほにこそ人をこひざらめなどか心に忘れしもせむ

○〔一〕サウト顯ハレテ思フフリコソスマイケレ心ニハ何ンノ忘レウゾイ忘レハセヌ。

秋の田のほのうへをてらすいな妻の光のまにも我やわすゝ

○秋ノ田ノ稻ノ穗ノ上ヘイナヅマノピカリト光ルホドノチヨツトノマモ。ワシハオマヘノ事ヲ忘レルカイ。ソレホドノ間モワスレ

ハセヌゾイワシヤ。

人めもる我かはあやな花ずゝきなどかほに出てこひずしも有らむ

○人目ヲハバカル我身カイ。オレハ何ニモ人目ヲ憚カル事ハナイエ。アヽワケモナイ。何ノタメニ此ヤウニ〔三〕アラハサズニバツカリ思フテ居ヤウゾ。

あわ雪のたまればかてにくだけつゝわが物思ひのしげきころ哉

○沫雪ノタマルカト見レバ。エタマラズニクダケテ消ユルヤウニ。オレハ心ガクダケテ此コロハサテ〳〵モノ思ヒノシゲイ事カナ。

おく山のすがの根しのぎふる雪のけぬとかいはむ戀のしげきに

○此ヤウニ思ヒガシゲウテハ。ドウモタマラヌニ〔上〕ワシハモウキユル死ヌルト云テヤウ〳〵カイ。

古今和歌集卷十二

戀歌二

題しらず　小野ノ小町

おもひつゝぬればや人の見えつらん夢としりせばさめざらましを

○思ヒ〳〵寐ルユエニヤラ。戀シイ人ガ夢ニ見エタ。其時ニ夢ヂヤト知ツタナラサマサズニオカウデアツタモノヲ。チシイ事ヲシテサマシテノケタ。

うたゝねに戀しき人を見てしより夢てふ物は頼みそめてき

○イツソヤウタヽネシタ時ニ戀シイ人ヲ夢ニ見テカラ。夢ト云モノハヨイ物ヂヤト思ヒソメテ。ソレカラ又見ヤウ又見ヤウト思フテ。夢ヲ頼ミニシテ居ル。

いとせめて戀しき時はうば玉のよるの衣をかへしてぞきる

○衣ヲカヘシテ着テネレバ思フ人ヲ。夢ニ見ルモノヂヤトイヘバ。ワシモキツウサシツマツテ戀シウタヘラレヌ時ニハ。ネマキヲキテウラカヘシテサキテネル。

素性法師

秋風の身に寒ければつれもなき人をぞ頼むくるるよごとに

○ワシガ思フ人ハツレナイ人ナレドサ。秋風ガ身ニシンデ寒ケレバ。日ガクレヽバ毎夜。モシヒヨツト見エル事モアラウト思フテワシハソレヲ頼ミニスル。しもついづもでらに人のわざしけ